

## 青木茂人の「陣中日記」

隼 田 嘉 彦

はじめに

本稿は、松本歩兵第五十連隊から、日中戦争に小隊長として「出征」した、青木茂人（少尉 中尉）が陣中で付けた日記を翻刻したものである。

筆者はかつて、鯖江歩兵第三十六連隊に所属した山本武（上等兵 伍長 軍曹）の陣中日記を翻刻したことがある。<sup>1)</sup>この連隊は、九月三十日上海に上陸し、そこから南京に向けて北上したので、その方面が主戦場となった。一方五十連隊はいわゆる「北支」を舞台とし、河北省、河南省、山西省——もちろんそのごく一部、いわゆる如く点と線にすぎないが——を転戦したのである。三十六連隊の長江に対して、五十連隊は黄河とでもいえるわけで、戦場の気候風土その他異なることが多い。さらに両連隊は徐州作戦の一時期を除いて交錯することがなく、陸軍における二人の階級が、将校、下士官と決定的な差があったことから、青木茂人の日記も山本武のものとはまた違った意味で貴重なものといわなければならない。かなり長文になったが、思い切って全文収録した所以である。

### 一 青木茂人の略歴<sup>2)</sup>と日記の概要

茂人は、大正元年（一九一二）十月十七日、青木寿夫、松野の長男として、長野県更級郡稲里村中氷鉋（長野市稲里町中央二丁目）に生まれた。生家は約三町歩の農地を持つ小地主であった。同七年四月下水鉋尋常高等小学校に入学、昭和二年（一九二七）三月同校卒業、四月には長野県立更級農学校に進学し、同五年三月卒業後は、農業に従事していた。

昭和七年十二月一日、幹部候補生（歩兵二等兵）として五十連隊留守隊に入隊、翌八年二月一日一等兵になったのを皮切りに、五月一日上等兵、八月一日伍長、十月一日曹長と順調に昇進し、十一月三十日満期除隊、翌十二月一日予備役に編入された。そして同十一年三月三十一日には歩兵少尉に進級、待望の將校に任じられたのである。その後十二年二月五日、勤務演習のため五十連隊に応召したが、二十六日には一旦応召解除になっていた。ところがその七月七日盧溝橋事件が勃発したのである。

日記は茂人の遺品を整理しているとき発見されたというから、生

前は筐底に秘していたのである。その理由はわからないが、次の四冊からなる。

昭和十二年九月十八日、十三年三月二十三日。

昭和十三年三月二十四日、八月三十一日。

昭和十三年九月一日、十二月三十一日。

昭和十四年一月一日、十二月三十日。

以下それぞれ第一冊、第四冊と称することにしているが、見られる如く、残っている限り一日も欠けることがない。

初めの三冊はごく普通の手帳である。第四冊のみ昭和十二年八月、陸軍大臣官房が「国民の熱誠なる恤兵寄附金を以て調整し従軍者一同に頒布」した「従軍手帳」が使われている。

第五十連隊(遠山登部隊長)への動員下令は、昭和十二年八月十四日であった。<sup>(3)</sup> 茂人の所属は、北支方面軍第一軍第十四師団第二十八旅団歩兵第五十連隊第一大隊第三中隊第三小隊、この小隊長を務め、六ヶ分隊を率いた。二十九日屯営出発、三十日大阪集結、九月三日大阪出港、八日に天津の外港塘沽に上陸した。十三日にここを出発し、翌日北京南郊豊台に着いた。日記に「昨年宛平県から保定への第一歩」(十三年九月十五日条)、また長辛店に帰ったとき、「二年前行動開始の地点」(十四年十月十六日条)ともあるから、この辺りから南下を始めたと思われる。日記はまさにその翌々十八日、いわゆる保定会戦の始まりから筆が起こされる。

このあと、「日本軍は無慈悲なまでの速度で河北、山西に雪崩れ込ん」<sup>(4)</sup> だったのである。

五十連隊は、この後昭和十四年十二月に帰還するまで各地を転戦したが、普通なら大尉か中尉の任務である中隊の指揮を、十三年には「軍曹がとって居る」(五月二十二日条)といわれるほど、この連隊の被害は幹部も含めて大きなものがあつた。部隊約三〇〇人の内、戦死者三九〇人余、負傷者一五〇〇人余に上り、三分の二が犠牲になったという。

私は戦場というものを、三六五日、二四時間、間断なく弾丸が飛び交っていたと思っていたわけではないが、日記に見られるように「休み」(「休養」)が多いことに驚かされた。これに関連して山本武のものにはほとんど出てこないが、将校達が何かにつけて「宴会」を開いていることにも一驚を喫したところで、戦闘が止んでいるときの「日常」が興味深く思われた。よく指摘されている補給が続きにくかったこと、すなわち現地調達主義のことは随所に見られ、そのため「徴発」(略奪)が多いこと、それにたいする中国人の抵抗ぶりも面白かった。中国軍の攻撃に「応戦せず」とあるのも、弾薬の残りが少なく節約したことを示すのである。また紀元節、天長節、明治節などには必ず皇居遙拝などをしているが、ある地点の攻防戦に際し、紀元節を目処にすることが多かったといわれているので、十三年二月十一日の戦闘が印象深かった。茂人も翌年「俺達にとって永久に忘れる事の出来ない思出の日」と回想しているので、余程の激戦だったとみられる。戦場では曜日などが思い浮かばないのが普通であるが、「日曜日のためか病院は全く静か」(十四年十一月五日条)と、入院して初めて日曜日を意識しているのが極めて

新鮮であつた。

茂人は十四年秋帰還することになったが、途中アミーバ赤痢に罹患、そのため奉天（瀋陽）陸軍病院に入院して治療に努めた。病も癒えて十一月十四日下関上陸、十六日松本着、それから温泉などでのんびり過ごし、十二月十六日正式に召集解除となった。除隊後の就職を心配していることなど、思いもかけぬことであつた。

召集解除後はしばらく長野中学校で教練の教師をしていたが、十六年七月三十日臨時召集で工兵第五十二連隊に応召、今度は広島の子品から間島省へ行き、日米開戦後もそのまま転戦した。この間十九年九月十五日には大尉に進級している。敗戦後の八月十八日撫順で武装解除、十月十七日、シベリアはブラゴエチンスク收容所へ収監された。ここで四年間の生活を余儀なくされたあと、二十四年十一月二十四日ナホトカを発ち、二十七日舞鶴に上陸、十二月三日ようやく家族の許に帰ることができたのである。

復員後は農業の傍ら、養蚕やリンゴ作りに励み、また下氷鉋小学校のPTA会長、更北村教育委員長などを歴任して地域のために尽力した。その後内外の旅行を楽しむなどしていたが、二〇〇一年一月五日逝去、八十八歳であつた。

なお、本文の随所に見られるように、若き日の茂人は写真を趣味としたほか、微笑ましくも何度が宿醉をしているようにお酒も嫌いではなかつたようである。ところが戦後は一転して、一切カメラを手にすることはなく、また禁酒禁煙を守り、好きな旅行も中国方面へは勧められても決して行こうとしなかつたという。

## 二 翻刻にあたって

先ず収録は日記本文のみに限ったことをお断りしておかねばならない。手帳には、日々の記事のほか様々なメモが書かれており、旅団長や大隊長の訓辞、諸注意事項、隊員名簿など、興味深く思われるものも多い。しかし紙数の関係で抹消部分（見消）、略図（一点のみ）とともに全て省略することにした。本文については概ね次のような方法に従つた。

大部分の漢字を常用体に改めたほかは、従軍中であることによる精神的、心理的状态をよく表現すると思われるので、また煩瑣を避けるために、平仮名、片仮名、数字、英字の使い方、宛字や送り仮名等、著者の書き癖を含めて、容易に意味が通じるものについては原則として原文の俣とし、できるだけ傍注を少なくした。

例 万開（満開）、以然（依然）、複帰、腹帰（復帰）、

宇回（迂回）、一増（一層）、一整（一斉）、方行（方向）、

待期（待機）、撮映（撮影）、平口（閉口）、紙弊（紙幣）、

珍断（診断）、風影（風景）、堅箇（堅固）

配ソク（配属）、上卜兵（上等兵）、軍イ（軍医）、

前卫（前衛）

違と異、門と問、暗と闇、陵と稜、準と順、着と付、就などの混用

トチカ（トーチカ）、ニュース（ニュース）

偏や旁の間違いや勘違いによる誤字は、態々作字するまでもないと思われるので、前後勘案して正しい文字に直した。なお濁点には若干補ったり、省略した部分もある。

次のものは訂正した。

聯隊 連隊、少隊 小隊、瀑撃(破) 爆撃(破)、  
痛頭 頭痛

校訂者による注はすべて( )で示し、概ね近世史料集などの約束に従って、傍注に(ママ)(脱)(カ)(衍)などを付けた。そのため原文の( )はすべて に改めた。なお破損などは示した。

中国の地名その他は『歩兵第五十聯隊史』のほか、星斌夫『中国地名辞典』(名著普及会、一九八〇年)、丁文江他『中華民国新地図』(上海申報館、一九三四年)、越村衛一他『中華大陸省別地図』(外交時報社、一九七一年)、地図出版社『中華人民共和國地図集』(同社、一九七九年)、黄河水利委員会『黄河流域地図集』(中国地図出版社、一九八九年)、河南省文物局『中国文物地図集』河南分冊(中国地図出版社、一九九一年)、中国国際戦略研究基金会『対日戦争史録』(官公庁資料編纂会、一九九五年)などで確認に努めたが、小地域名などで見出し得なかったものは原文に従った。御教示を得れば幸である。句読点は校訂者が付けた。改行は原文でも少ないが、紙数を節約するため多く追い込んだ。

書名、映画などの題名その他には、適宜「」を付けた。

なお、これらの日記が戦時中のものであることに起因するが、本文中に戦前にはごく普通に使われ茂人のみが特別に使用したわけではないけれども、現在では使用してはならない語句が見られ、当時の偏見に基づく記述がある。本稿は史料紹介であるのでそのまま用いているが、もとよりそれを認めたうえのことではない。

(1) 隼田「山本武の『陣中日記』」上・中・下(『福井大学教育科学部紀要』第 部 社会科学 五一・五二・五三、一九九六・九八年)。

(2) 以下茂人に関しては、「陸軍大尉青木茂人履歴書」(一九六二年作成、長野県知事証明)のほか、青木志子(茂人長女)、村上美代子(次女)両氏の御教示による。

(3) 以下五十連隊の組織、動向は、主として堀越好雄『歩兵第五十聯隊史』(同刊行会、一九八四年)に拠ったほか、『長野県史』通史編九近代3(長野県、一九九〇年)、『信州の昭和史』下(毎日新聞社、一九八二年)、『長野県民百年史』(郷土出版社、一九八四年)、『現代史資料』9日中戦争1・2(みずす書房、一九六四年)なども参考にした。

(4) 一日三〇キロの速度が数日間、この年の平均速度は毎日一二キロだったという。森谷巖訳『アジアの戦争』二五～二六頁(エドガー・スノー著作集3、筑摩書房、一九七三年)。

【第一冊】

(後筆力)

昭和十二年

九月十八日

師団後続部隊連絡の為、先発として小隊中五、三分隊欠にて松林店ニムカフも、道をまちがへて引かへす。

九月十九日

竹内防毒面露营地ニ置イテ来タ為引カヘス。四分隊通訳ノ護エイデ大隊本部へ。四分隊欠ニテ十二時半ヨリ二時間、師団の渡河掩護す。好及莊ニ行ク。師団渡河掩護の中隊として中隊は呉杓ニ残り、小隊は予備隊塩入伍長ヲ長として、下土硝部落の西ニ二分隊、五分隊ヲ出ス。

九月廿日

宮下(マタ) 姥村ヨリ足痛みノ為本隊よりおくる。

九月二十一日

四時半起床、部隊は進撃を続行す。河を渡り五時頃六間房に着き、更に中隊は特別任務にて、部隊の渡河掩護目的にて出発す。

廿二日

先尖として河に至るも、対岸の敵陣強固の為少し下流より一きに渡る。敵陣は強固なるも突撃の前に退却。中隊は陣地を占領するも一部だけで、敵は以前他陣地抵抗、其中に本隊より二中隊が右に出て連絡、安心す。中隊の死傷廿四名、戦死六名を出す。張草部落にて旅団は集結、更五時敵中に進撃す。第一大隊、第三大隊 高崎 は此の部落の守備となる。自分は軍旗護衛となる。軍

旗も此の部落に残る。夜に入つて敵の敗残兵の逆撃物猛く非常毛(ママ)ので、旅団の進撃一時中止となつた位であつた。

廿三日

払曉と共に敵は退いた様だ。本日は戦死傷者の収容をする。火葬にふす。午後七時大隊は連隊の後をおつて出発する事となり、黄村を出発す。

廿四日

昼近く前屯の部落 保定の北西一キロ位の村 に着く。(ママ) 第分隊引率して保定へ斥候に出る。駅には我軍で工事を急いで居た。三大隊の林少尉も来て居た。梨などをもらつて帰る。夜に入つて急に保定へ宿舎がへする事となり、第三中隊は師団司令部の誘導の目的で残り、十時頃司令部が来てしまつた通報あり出発す。三小隊は司令部の警備に二時頃より勤務す。腹痛ノ気味あり。雨ふつて来たり、上陸してより二回目の降雨だ。

廿五日

師団司令部で目をさまして見ると、しとくと雨ふりだ。皆々思々の朝飯の準備して食ひ、警備す。大きな師範学校とかでなか(緑力)ひろいものだ。其の中に雨もやんだ。午後二時頃八中隊より警備交代。小隊中山准尉来る為引断いで中隊へ帰る。幾日ぶりで兵も皆、油、肉其他の材料で思いの夕飯の準備だ。夕方将校行李も来り、シャツなどの衣代へをする。

廿六日

休養。午後中隊長の命で保定の南西後屯呂化七里てん方面の道路

偵察す 部下四名。久方ぶりで家へ手紙を出す。

廿七日

午前十時より連隊本部へ將校集合、(香月清司)軍司令官、(土肥原賢二)師団長閣下の訓示  
其他種々の話あり。今後の作戦についても若干の話あり。

廿八日

午前八時大隊の下士官以上二中隊の舎前に集合、大隊長の訓示其他の注意あり。將校道路偵察の状況を連隊本部へ提出す。午後二時又師団司令部の衛兵として、四分隊引率して警備す。九月廿八日、故郷の今日今頃祭礼其他の開期が思出して、各兵は遠き保定の地に任務について居る。司令部の給与の為、間食など与へられて皆喜んで居る。

廿九日

(寿)寺内軍司令官閣下、師団司令部へ午前十時二十分御いでになるので、掃除をして任務をはたす。午前十一時頃野戦病院を見舞て閣下は帰る。午後一時半警備終りて二中隊に申送り、小隊の宿营地に帰る。二時大隊本部へ道路偵察將校集合。これと別問題で大冊河戦闘の各中小隊の関係位置を大隊長と共に研究す。四時半頃帰ると行則君が面会に来てくれて、種々語る。懐しかった。

卅日

朝から非常に曇つた空は雷鳴と共に夕立となり、十時頃やんだ。午前十一時半R本部へ大行李長と行き、今度の行動は同行李の掩護隊として小隊は行く事に決定す。小隊の兵五名第一小隊へ編成(替)変となりて欠となる。側射砲隊に行った町田君、行則君が面会に

来る。サイダーをもらつて飲みうまかつた。本朝敵機が師団司令部附近へ爆撃して、高射砲隊兵十名近く戦死、負傷多数との事である。

十月一日

いよゝ第二作戦の行動開始。午前七時保定を出発。自分は部下小隊を引率、大行李掩護として本部隊より遅れて最後尾を前進。悪道路の為難行を続け、午後十時部隊一日目の宿营地紫城に到着。夕飯をすまして休養す。大行李の如何に困難かを本日目の前に見て、第一線部隊の給与の悪い事を感じず。

二日

五時半頃起床。昨夜の疲れの為大行李は九時半頃出発、部隊の後をおふも、紫城の前の道路湿地帯で非常な困難で、昼飯まで一里位の行動せるのみ。午後幾分よくなりしも、本隊宿营地まで夜になつて到着する事が出来ず、途中の部落にて九時大行李は独断で宿営す。迫撃砲の中沢が居つた。

三日

五時半頃行李は出発。本日の道路良好の為行軍良く、午前十時頃には四里近の里程を歩く事が出来た。前方に河がある為、車輪隊は本隊より他の道を通りて前進に決し、全車輪隊到着まで大休(止)しをす。二時頃出発。結局道にまよつて夜となり、暗夜各部隊の大行李は百米位の河を渡り、付近の村に十時頃夜営す。

四日

五時起床。十時頃には中央隊石黒部隊の宿营地に達し、本部にて

地名をきゝ高門店にむかふ。更に前進一里近くの梨園を通過、秋とはいへ日中の熱さで疲労其極に達する時、梨が山程ありて、其の味さ。各兵思存分持つて部落に入ると、いよゝ後尾隊の宿営だ。大隊本部は約一里前進、昼食をすまして午後一時頃大行李は漸く到着。二日間本隊との連絡<sup>(断)</sup>たつた為、皆いものみで行李の着いた事をよろこんだ。小隊は三中隊宿营地 約一里 に前進、四時頃着いて休養す。

五日

本日は一日休養す 燕趙鎮。

六日

午前三時起床。五時頃部隊出発。昼頃五百米位の唐河 水深所は工兵の架橋あり を渡り、夕方白廟庄に到着。三、四中隊は他の部落に宿営の目的で道が異い、小さな家に宿営す。

七日

五時頃命令ありて、中隊は尖兵となりいろゝ道をまちがいて本隊に着く。午前十時頃沙河を渡渉、それより草原を将校斥候となりて前進、敵に接近してくるので各村には陣地がある。かくして四時頃胡村着、敵の陣地までの滹沱河まで一里なり。自分は四ヶ分隊を引率して半二十米の前方、川の線で壕を掘りて警戒す。

八日

一面の河原、木はなく風は寒い。而も午後より腹痛の気が夜になつて強くなりしも、元氣を出して任務につく。夜になつても我斥候は盛に前方に偵察に行く。かくして秋風吹きすさぶ高原の第一

線に於て、警備の一夜は明けた。九時頃中隊より引上命令あり。夕、朝飯をとらぬので非常な疲労だ。宿舎に入りて直に休養す。砲声盛に聞へて来る。

九日

十一時十分大隊は集合して、三千米前方の小流にて渡河演習を実施の予定で出発す 鉄舟で敵前渡河するも、急に変更となり中止の為引かへす。午後連隊本部へ行き、渡河材料の高梁がらでこさへるものを<sup>(教)</sup>おさはりて、中隊へ帰り指導す。

十日

八時頃命令ありて、いよゝ今晚攻撃、前進との事だ。第三大隊 第一大隊の準だ。明日の昼食まで準備して、〇時近く整列の予定なり。今日午前は霧深くゆうつな天候なり。午後二時頃整列していよゝ出発の時になつて、急に命令あり、敵は退却の模様との事。皆元氣となり、滹沱河に進み今朝までの強固な敵陣地を前に渡河す。見て驚く程の強陣地、今晚敵前渡河だったら、相当の犠牲者があつた事を思ふと、先ずあんの胸をなで下す。夜間石家庄の西、太原に通ずる郭村駅にて警備す。〇時過だつた。

十一日

急に四時半頃命令あり、石家庄の南西五里庄に前進、出発、十時<sup>(到)</sup>到着。午後二時まで休。それより石家庄を通過、東南の村東三教にて飯の準備す。今夜五〇至<sup>(マ)</sup>乃十五の一大隊は列車邀撃の予定なり。種々準備を行ふ。

十二日

午前二時以後出発準備完了で、寝に就くも命令なく、午後〇時半いよ／＼我小隊は駅の警備小隊で出発。而し列車は来らず。秋風寒く半日駅で休み、午後十時頃いよ／＼列車来り、第一列車三大隊、第二は一大隊、R本部、第三、第四と乗り込む。

十三日

午前六時半頃出発。而し鉄道破壊されており、思ふ様に進ず。

一日七、八里と思れる位で夜となり、七時半頃運行中第一列車停車しあるを知らず衝突、第一列車乗込の兵一名即死、一名両足切断後死亡との事故あり、列車は停車となる。

十四日

午前六時半までに飯を食つて、背囊除いて鉄道を前進、高巴<sup>(邑)</sup>を経て鴨鵝営にむかひ前進、午後一時到着す。それより列車を待つも夕方まで来らず。第三、第一大隊は西鴨鵝営部落にて宿営す。村の周りは壕で相当だ。村民は相当の反対心ある様だ。

十五日

午前五時起床。六時出発の予定なるも、列車との連絡つかず十一時半出発、鴨鵝営駅にて午後五時頃まで又休養。列車はいよ／＼来り、分乗、南へ前進す。内邱駅附近にて鉄橋故障の為、明朝まで停車となる。

十六日

朝になって寒さなか／＼烈しく、寒くてねむれず。各兵は、飯の準備に暗い中より火をたいて居るので、四時頃より起きる。夜明けて見るとなか／＼ひどい霜だった。北支の初霜だ。内地もそろ

／＼此の時期だ。日中は而し秋晴れ<sup>(天)</sup>の

十七日

邯鄲の鉄橋破壊しあり、本日中を要するとの事なので、部隊は十一時頃より輕装にて歩いて磁県<sup>(ふ勝)</sup>にむか。途中敗残兵を掃蕩しつゝ夜九時頃、磁県の手前の光録鎮駅にて敵の列車を襲撃、而し残念乍にがしてしまった。三大隊、一大隊参加。まもなく遊軍<sup>(友力)</sup>の装甲列車来り、一同残念がる。中隊で二小隊の兵一名戦死、負傷一名なり。

僕の滿二五年のたんじょう日だ。大いに祝ふ可きなりしも野戦だ。非常な行軍の後戦闘した。

十八日

まもなく夜は明けた。部隊は五、三〇分頃此の駅にて列車に乗り、ねむいのでねむつて目をさまして見ると太陽は東の空に、磁県に来て居た。而し此の前方に敵居り、二、三大隊攻撃中で迫撃砲も参加して居た。一大隊は待機。磁県の前方約四里、河北省と河南省の境の河、漳河付近まで列車は進むと鉄橋爆破、対岸に敵居り進行不能。雙廟駅まで引かへし、九時頃より孟家庄、駅の附近にて宿営と決す。思へば私達が行動を起してより一ヶ月、河北省の敵を掃蕩し得た事を思ふと感慨無量なり。大隊は明日の戦闘を準備せんとして休養と決す。

十九日

午前九時各中隊は二ヶ小隊を編成、漳河に到り渡河点の偵察を行ふ。三中隊は中隊長以下二、三小隊にて孟家庄の南方にて偵察、



午後二時頃帰り休養す。鉄橋附近には敵あるも、<sup>(マ)</sup>3中隊偵察正面には陣地なき模様なり。秋とは思れない暖さだ。八時頃に至り、明日五時大隊は出発との命令ありしも、まもなく旅団長<sup>(酒井隆)</sup>が連隊本部へ来られ中止となる。

二十日

午前各兵はそれ／＼の使役あり、又洗濯するものあり。天候は秋晴れの天気、雨のふらない北支は、模様は雨となつても翌日は快晴となる。軍事行動には何よりの幸である。午後も休養。夜になつて命令、明日八時以後に於て出発準備し置けとの命令ありし所、九時半急に、昨日河を渡つた三大隊、敵包囲におちいり苦戦、十時連隊は出発、西保障に前進す。

二十一日

午前四時頃渡河、払暁を期し、前方の部落で盛に苦戦の三大隊の右より攻撃、前進す。まもなく陣地を確保。午後一時頃我小隊は二大隊よりの依頼により、救えんに行く。夜となり逆襲物猛く、大坪戦死、負傷六を出すの烈戦だった。夜になつて敵敗たいの模様なり。

二十二日

一晚敵の逆襲射撃を受けるも、夜明となり静かとなり、払暁の逆襲もなく明けた。二十一日夜の此の戦闘で、第六中隊の死傷は非常に大い様である。<sup>(マ)</sup>八時頃中隊に帰り、飯の用意して、〇時大隊は山の頂上は宇回して南にむかひ進撃、前進す。日中の暖さは夏の様で行軍に悩む。夕方敵の陣地の丘に出たので、連隊主力の

来るまで夜八時静かにして休む。所が連隊より西保障附近の陣地が又敵に占領されるおそれあり、前進も師団の今後の作戦に悪いので後退せよとの命で、〇時頃西保障へ引きかへす。

二十三日

八時頃まで眠つて目がさめた。今日は飯は朝昼同時だ。後方の連絡が爆破で困難、糧秣はなるべく俟やくとの事だ。敵の空機もなか／＼活躍して居る。雙廟駅も爆撃されて一小隊で一名戦死との事。午後大隊幹部山の偵察、夜九時より山で警備す。武田少尉戦死との報を聞き驚いた。一昨日の夜のあの激戦に比しあまりに静かだ。

二十四日

大陸の気候はあまりに夜は寒い。二時頃には壕の中で目をさました。秋晴れのすこい月夜だ。夜明けると同時に三中隊の一小隊残つて、他は山をでる。我小隊も西保障へ引かへす。彰徳の敵は退却中との事だ。〇時Rは出発、東にむかひ前進す。敵の居た高地も今は姿なく、午後韓砦 九時頃 着、宿営す。

二十五日

午前十時出発、二千米位東南の谷家嘴に転営、十一時頃着く。午後一時より南方高地にて壕を構築、午後四時頃空中戦を見る事が出来た。先日より雙廟駅渡河点を爆撃せる敵は、ついに友軍機に発見され、我々の居る高地の前方へ火をはいて墜落する様は、実に快愉で思ふ万歳の声だ。直に其場に行つて見ると火災中だ。<sup>(マ)</sup>パラシュートの焼け残りを記念に持つて帰る。夜は自分は高地に半小

隊で警備する。

二十六日

寒いながらもよくねむって夜が明けた。八時頃営舎に帰る。休養す。此の部落に四、五日宿営の模様だ。野菜(と服)な附近になく遠く中隊で徴発に行った。休養もよいが山の中の部落で何もなく、あわ飯を食って居る程だ。それでもなれると食へる。雨のふらない北支も夕方には小雨ふりとなった。

二十七日

昨日は大打行李も当着、将校行李も着いたので早速冬服を出して着る。日中は暑すぎる位だが夜が寒い。内地より暖い位だ。雨も夜ほんの少しだけ。本日は快晴までとならずも晴れた。綿の出来る土地だ、雨はほんとにふらない。午後三時半よりR本部に於て慰霊祭あり、分隊(長脱力)以上参拝、戦友の霊をなぐさめる。

二十八日

夜間になると薄暗い豆ランプ一個だ。起きて居ても何も出来ないで眠る。夜が長くて仕方ない。蚤にせめられて眼がさめる。午前大隊長より種々注意あり。此の丘の部落に相当長く駐在になる模様なので、便所其他を設備せよとの事。午前、中隊は実行す。午後又雨がしとくふって来た。冷雨、秋らしき感を一増思せる。行軍中一回も雨に悩まされた事のなかった事は幸だった。雨量の少ない事も信州の五分ノ一だそうだ。

二十九日

雨もほんの小ぶり、朝より快晴で気持よい。九時より山頂の壕を

拡張の為、兵を引率する。午後休養。五分隊竹内上等兵のわかしてくれた湯に入る。支那特有の大きな甕だ。而し保定以来一ヶ月ぶりの垢を落した気持良さ、第一線の野天風呂の味も又別だ。午後には各兵にも冬服が支給された。内地より一ヶ月遅れたわけだ。夜間は山頂の警備を行ふ。暖かで幸であつた。

三十日

午前南門下土哨の付近へ壕を築く。午後二時より大隊の演芸大会、各中隊より有志出て野戦の余暇をなぐさめる。秋の冷雨ぽつ／＼やつて来り為、残念乍中途で中止す。夜暖くなつて各将士待ちに待つた内地より手紙来り、暖いランプの下で分て子供の様に喜び読む様は、又野戦でなくては見られぬ。而も一ヶ月も前の新聞をむさぼる様にして読んで居る。

三十一日

午前山頂の壕を小隊引率で掘る。午後休養、手紙など皆書いて居る。十月も終りだのに此の附近の気候は相当暖だ。信州は霜で寒い事を思ふと余程異ふと思れる。夜十時頃急に命令あり、大隊は明日転宿との事だ。東南方面より砲声聞へて来る。彰徳附近の残敵幾分活強(況)を呈して居るとの事、それが為友軍砲の射撃と思れる。

十一月一日

午前十一時大隊は出発、東大姓に向ふ。中隊は今度、旅団司令部護衛中隊となり、連隊と別れ約一里後方、鉄道附近の洪河屯部落で警備す。平漢線方面の我軍は十四師団(衍)の様で、二十師団は太原方面、六師団は上海へ転戦の模様だ。此れより河南省の為か部

隊は前進せず、此の附近で対峙の様子である。

十一月二日

午後補充隊より来た兵四四名中隊へ配属となり、小隊十七名、二分隊長、六分隊長も来る。彰徳附近の敵が動よつ、活発なので攻勢に出る様子で、明日にも旅団も前進との事だ。

十一月三日

本日は明治節だ。八時頃中隊は整列、はるか北支の地より東の空にむかつて礼拝、大帝陛下の御遺徳を偲ぶ。十時出発に決定、大隊腹帰で豊安に前進、午後二時連隊は彰徳の西方娘々廟にむかひ前進、敵のていこうにより途中にて宿営す。三中隊は大隊とはなれ、連隊の主力となり警戒す。

四日

七時出発、申家岡<sup>(商)</sup>にて三小隊は野砲の掩護小隊となる。前方部落には相当敵が抵抗し居り、砲の射撃とまつて尖兵隊の前進で退却す。第一、二大隊にも若干の死傷者ある模様なり。昨日補充された兵士の戦死も見受け、気の毒であつた。其の部落で野砲隊と共に宿営す。

五日

八時彰徳の西方二千米位的位置に野砲は前進、本朝は珍しく霧が深く、道を異へて十時頃目的地三家庄に着く。連隊本部も続行す。昼飯の後いよゝく待望の彰徳へ行く事になる。而し野砲掩護の目的は終つたので、大隊の宿营地、駅西方二千米位の所へ行き、中隊も来て居り宿営す。夜十一時頃急に命令あり、連隊は明日磁

にむかつて前進との事だ。朝食を準備す。

六日

本日途中鉄道修理の坂口博君と会、煙草をもらふ。中隊は先発として六時出発、本日中午に磁県まで約十里到着の予定で、鉄道を前進す。三大隊は彰徳に残る事になる。午後六時頃漸く磁県に着いた。師団司令部の位置城内に入り、警備に就く。今晚は臨時宿舎で、明日大隊の到着を待つて決定との事だ。今度遠山部隊は、此の附近に位置して警備に就き、治安の維持に就く予定と連隊長殿が言はれた。石黒部隊より直に勤務を引づく。

七日

午前六時半頃起床、河西伍長をつれて磁県の東、二千五百位の飛行場へ勤務に就きに行く。降霜で真白だ。北支へ来て三回目、いよゝく晩秋の感あり。八時頃命令、一大隊は城外に宿営に決定、三中隊も行く事になる。午後三時頃本隊到着、連隊長の注意あり宿舎のきかない事驚くばかり。夕方又命令、明朝第一大隊は師団司令部と共に磁県東方臨漳<sup>(漳)</sup>へ行くに決定す。なかゝ寒い。ごろねの寒さ。各分隊は火をたいて夜を明かす。封書が三回目で渡された。戸部<sup>(長野市)</sup>、新町<sup>(上水内郡)</sup>、篠井<sup>(長野市)</sup>より。

八日

七時朝食をすまして中隊整列。八時東門を中隊は、師団司令部の前方を臨漳にむかつて出発す。午後一時半頃着、宿営す。大名方面の敵、宗哲元の敗残兵は、百八師団と二十七旅団とで攻撃して居るのだ。

九日

八時出發。中隊は以然司令部の前方を前進、院堡集にむかふのだ。此の附近に來ると砲声が聞へる。氣球が昇つて居る。午後三時院堡集着。此の附近はさつま芋はあり、落<sup>(花)</sup>下生はありして、皆思ひ／＼の加工して食し、特に落<sup>(花)</sup>下生は非常に味がよかつた。内地の正月頃を思い出す。二、三日來めつきり寒くなつた。

十日

四時頃起床、出發との事で、驚いて準備にかゝると間異いであつた。出發の時間は不明なのに、八時中隊は整列して又<sup>(解)</sup>開散、宿営へ歸りて命を待つ。大名方面の敵は退却しつゝあるも、まだ師団は前進せず、本日又一泊する事となる。警戒は昨日同様なり。

十一日

八時師団は院堡集出發、魏県にむかひ前進、二里半位なので昼頃到着す。前方大名附近より、砲及機關銃声聞ふ。直に宿舎に付き、中隊は西方警備となる。此の附近は、落花生、いも、鶏あり、副食物多くて宿営に便利なり。

十二日

朝四時四中隊正面に逆襲ありとの事で、小隊は区域内を起きて配備に就く。北方二里位の方面より銃声猛烈なり。四中隊正面は異状なく、まもなく夜明け、本日は休養との事だ。昼頃師団輜重來り村松猪太郎君と面會、平林少尉も居り久方ぶりで語つた。煙草を給与してもらふ。いよ／＼晩秋らしくなつた。内地と丁度同じ様な氣で、故郷の今頃を懐しく思ふ。夕方命令、師団は明日磁県

にむかひ前進との事、遠山本部は彰徳へ前進との事。昨日より警戒を多くして、十二時より更に城の東南角に二ヶ分隊の下士哨を出す。

十三日

八時出發。小隊は先兵<sup>(先)</sup>となり、戦車の後方を臨<sup>(遠)</sup>彰にむかひ前進す。行程約七里半、それでも歸りの為か皆元氣で、院堡集もいつしか過ぎて午後四時頃臨彰着。今晚は急に命令代り、二、三中隊だけ本夜こゝで司令部と宿営、他は直にこれより磁県へ歸るとの事だ。よつて遠山本部は邯鄲へ行くに変更さる。夜は二ヶ分隊で北門を警戒す。

十四日

八時師団司令部と共に臨彰出發、三中隊は最後尾。午後二時頃漸く磁県に到着、前の營舎に入る。二、三日磁県、豐東鎮、邯鄲と各駅は毎晩の様に敵の敗残兵の夜襲を受けたとの事で、今晚も充分予期して寢に就く。

十五日

夜襲はなくて安心した。八時頃宮坂少尉と城内の入浴場にて入浴清々した氣分になる。漸次支那民衆の商人が、落花生、いもなど売り歩くを見て、人心も安定、和かな氣分が表れて來た。理髮屋などきたないが、我兵で賑つて居る。故郷へ保定以来の手紙を出す。

十六日

長い間傷いて居た靴を修理に出るので出した。本日も休養、手紙

を書く。どんより曇って晩秋らしきうすら寒い日だ。夕方には霧雨さへ降って来た。

十七日

昨夜よりほんの霧雨なるも、道路は非常に悪くなって歩くに困難だ。中隊長の注意あり、営舎の整頓、清潔にして休養。内地より小包など兵に渡り、皆喜んで居る。城内には本日より、地方の内地人の商人が売店を始めたとかで、漸次糖分の補給も就く事で喜んで居る。

十八日

本日も以然うすら寒い日なり。皆宿舎で休養する。ニュースによれば、南京政府はついに漢口にうつしたとの事である。

十九日

昨夕方より雪が舞って居たかと思たら、本朝起床して見ると白銀の世界で、二寸近くの積雪で驚いた。大陸気候はやはり急激に来る。早速皆各分隊炬燵をこさへてあたって居る。雪を見ると炬燵が何よりだ。午前九時より兵器検査実施す。午後手紙書きをする。

二十日

同じくうすら寒い日だ。ちら／＼雪は舞ふし、九時より中隊長の上海方面の情勢に就て学科あり。終りて城内の理髪屋に行き、頭をはさんで来る。下嶋伍長野戦病院より後方へ送られる。大和周(二)一入院のところ全快せり。退院。

二十一日

同様の寒い日だ。午後大隊の予防接種ある チプス ので、起床

同時に宮坂少尉と入浴す。昨夜より何かの中毒か腹の具合悪く、下痢して苦痛を感じる。予防接種を行ひ、午後休養。

二十二日

午後二時より、准尉以上大隊本部へ集合、大隊長のいろ／＼な注意 宿営に関し。昨日成田准尉中隊附として着任す。

二十三日

地形偵察の目的で、南方より駅附近へ行軍を行ふ。新嘗祭だ。大隊は第二回の野戦演芸大会を催し、曇り空の非常に寒い日なるも午後実施、陣中の慰安につとめ、各人相当の腕をふるって愉快なり。

二十四日

九時より、中隊長の過去の戦闘に於て得たる教訓と責任觀念に就いて学科あり。正午突如大隊長の宿舎巡視あり。午後それにともなつて掃除、整頓す。各分隊にて実施。駐屯久しきになるので、漸次酒保も出来、糖分の補給もついて来た。本日は大隊の酒保も開設された。風邪の気味が、幾分頭痛する。

二十五日

頭痛の為休養。各分隊は幾分教練実施。午後も休養す。

廿六日

午前、中隊長の学科あり、頭痛するのでやすむ。

廿七日

午前東方の地形を偵察、掩体構築の準備す。午後命じて行はせ、頭痛烈しき為休養す。

廿八日

兵器検査。午後予防接種あり。発熱、頭痛の為余は行はず。

廿九日

十時より野戦軍医の衛生講話、続いて中隊長の話あり。午後御下賜品を賜る。頭痛非常に烈しく就寝す。東門附近で、午前十時頃民衆のりくだつ、暴行事件あり。夜間中隊の兵を取しらべる。

卅日

大隊長の内務巡視あり。就寝す。

十二月 (後筆力) 昭和十二年

一日

いよゝ猛烈に頭痛する。就寝す。

二日

同様就寝。野戦病院に行き、おや知らず歯がはいはじめ、熱をもち化膿したので、切開手術してもらって来る。

三日

本日は幾分気分良くなった。歯の為もあつたかと思れる。病気でねて居る程つらひ事はない。あきゝした。

四日

だんゝ気分も良くなり、起きて運動などして気分(転)の伝換を計る。

五日

夕方第一分隊で造ってくれたかめ風呂に入り、幾日ぶりの清々した気分となる。暖い中に早く就寝する。

六日

午前lgの一般兵(に脱)に対する普及の為、第五分隊河口伍長をして説明さす。十時頃大隊長突如巡察され、午前の教育の早く終つた事を注意さる。午後小隊で基本体操、巾跳など競技を実施、続いて野球を行ふ。近頃は中隊で炊事を行ふので、何かと分隊の仕事も楽の様だ。

七日

午前、前日同様lg教育。午後入浴なく、lg小銃分隊の対抗野球戦など行ひて運動す。

八日

十時より軍紀教練を実施。大隊長巡視あり、自分は脚絆をつけずにやつて居り、注意された。午後は兵の外泊日なり。自分は三分隊のかめ風呂に入る。よい気持なり。夕食に長い間行動中の望であった秋刀魚を支給され、非常なおいしい飯を食ふ事が出来た。

九日

午前lgの教練、射撃動作其他を行ふ。午後一時半整理、夕方より行軍の予定で、城内に行つて見て驚いた。最早街は支那商店で大賑だ。南門附近で野戦重砲へ来て居る写真屋を依頼して撮す。本日は珍しくどんよりした暖い天候だ。

十日

午前九時よりlg教育。十時より入浴日なので、早く終つて入浴に行かせる。午後体操す。

十一日

午前九時より中隊の清潔検査。十時頃までに切り上げて、本日戸

山学校軍楽隊が来り演奏するので、聞きに一中隊裏の広場へ集合、一時間半位行ふ。午後は兵の外出行、休養す。内地で聞く軍楽隊と同じものでも、又別なあじのあるものである。

十二日

午前九時より中隊全員で、中隊長殿の一般兵に対する擲弾筒の教育、十一時まで実施す。午後は城内中央望楼に上り、西門より南門へ城壁上を行軍実施す。夜の二ユスで、いよゝ待ちに待った南京陥落の報あり。一同思はず万歳を叫ぶ。

十三日

南京陥落の祝として、磁県附近に居る各隊、城内中央十字路に午前十時までに参集、天皇陛下万歳を三唱、喇叭を先頭に西門より城壁上を南門に到り、堂々行進す。更に支那民衆は、蒋政権没落を祝つて高足踊と言ふ珍しい踊を踊つて、街をねつて歩いて居るのも愉快だった。大阪より慰問品として小包を、(稲里村)村の中島信人氏より唄の本を送らる。

十四日

午前中は何もなく、十一時頃昼飯をすまして大隊は整列。香月第一軍司令官閣下が、磁県視察に来られるので、城内道路に整列お迎へす。野戦病院を見舞れて二時頃帰られ、彰徳へ飛行機にてむかわれた。午後は休養す。午後より日直将校を服務、八時頃巡察をする。

十五日

九時より新戦闘法の分隊教練を実施す。暖なよい日であった。午

後は外出日で休養なり。大名方面より歸りて本日で一ヶ月、この磁県で駐屯した当時に比して、民衆も歸つて街は見ちかへる程の賑かとなった。

十六日

午後九時より昨日の広場に集合、成田准尉の新戦闘法の指導あり。珍しく雪空となり、西風非常に寒い日であった。午後は何もなく休養す。夜磁県民衆の数百名からなる提灯行列を見て、愉快だった。北支の戦場に於て提灯行列を見るとは、愉快と同時に内地の今頃の賑を思い浮べて懐しい。

十七日

同様新戦闘法、主として擲弾筒分隊教練、やはり非常に寒い日であった。午後行軍の予定となつて居るも、小隊は中止す。部隊が移動する様な話がある。

十八日

午後十時より兵器検査を実施、余は事務室で遊んで来る。移動は確実らしい。午後は宮坂少尉の代りで日直を服務。中隊の外出行で午後は休養なり。

本日は故郷では妹の結婚日だ。家に居たらつて行くのだが、今は遠く何百里、北支の野戦場で思い浮べて居る。自分の任務は私事より重い。金蔵氏よりの便りによれば、尺余の積雪の様だが、磁県は又天候回復で快晴となった。太田君より便りあり、内地の状況を知る。清沢上等兵退院、帰隊す。

十九日

いよ／＼二十一日午前九時半彰徳方面移動決定す。各其の準備をする。本日は石黒部隊、二連隊の軍旗祭、城内に種々の催しあり。宮坂少尉、林軍曹と見物に行く。城内の賑かな事、實際十一月上旬自分達が夜磁県に着いた時を思ふと、感慨無量なるものあり。

二十日

本日も準備を行ふ。本朝の寒さは相当烈し。午後も同様なるも仕事無く準備休養す。明日の出発九時の予定の所、R本部磁県の北方一里の地点で夜営のため、十一時に変更さる。

二十一日

午前十一時大隊は整列、いよ／＼一ヶ月余の駐屯地磁県を出発、彰徳へむかひ前進す。R本部は昨日来り、三里前方の西小屋子部落に一泊す。夜間は寒くよくねむられず。

二十二日

午前五時起床、七時出発、彰徳へむかふ。三中隊は彰徳北方一里、三家庄にて野戦重砲の掩護をする事となり、今晚はかり宿営す。今日は冬至。この約六里の行軍だが、長い間休んで居たのでなか／＼疲れた。

二十三日

三小隊は、中隊と共に野砲三大隊掩護の予定で出発準備するも、急に変更となり、命令を待つ。午後、中隊長大隊本部へ連絡に行き、二、三小隊は彰徳へ行く事となる。明日出発の予定で、今晚もこゝでかり宿営す。

二十四日

九時一小隊を残し、中隊は彰徳へむかひ前進。二小隊はR本部軍旗護衛となり、三小隊は中隊と共に大隊本部の位置にて警備と決定。宿舎は良くなく、漸次材料を集めてやる事となる。

二十五日

本日は宿舎こさへで一日終る。彰徳の街も非常な賑で、民衆も思／＼の仕事に就て居る。小隊室もおんどる式にこさへて、夕方火をたいて見ると良くもへない。

二十六日

オンドルの上で火をたいて干し、夕方までに乾いた。各分隊は内外の整潔、整頓を行ひ、R隊長のいつ巡視あるもよい様に準備す。夕方大阪の岩田宗太郎さんより、有井と二人へ慰問品を送らる。便りも八日ぶりで多く来た。

二十七日

朝より有井及向山を使役にとりて、自分の居室を準備させ、夕方までに完了。三日ぶりでせい／＼した居室に入る。いよ／＼年末で、内地に居つたら何かと多忙の事と思ひ出す。

二十八日

午前山崎伍長を引率して城内へ買物に行き、支那靴を一円にて購入。城内は流石に磁県より広々として、街もなか／＼立派だ。支那商人も相当店を出して居る。大阪の岩田氏へ慰問品の礼状を出し、家へ写真を送る。いよ／＼年末だ。而し内地に居る様な感じは少しもせないが、それでも部隊によつては大きな松を飾つて居た。此の彰徳附近には松林がある様だ。支那へ来て始めての松だ。



青々とした緑樹は、やはり冬季には特によい感じを我々にあたへてくれる。夕方末沢保治君が水治鎮より連絡に來り、遊びに来る。

二十九日

午前中居室へストープを入れる。(長野市)小島田の原田君が連絡に來てよ

つて行つた。先頃遺骨を送つて内地へ歸り、家へ行つて來たそう  
だ。午後五時より遠山部隊の、中、少尉の忘年会をやヨイにて実  
施、R隊長、大隊長來り盛会、十時歸る。

三十日

大隊長の巡視あるので、宿舍内外の整潔、整頓を実施。午前十時  
が午後二時に変更されて巡視あり。いよゝ年末だが、野戦でも  
松を切つて來り、俵の藁でしめな<sup>(注連縄)</sup>いをやり、心ばかりの門松を飾  
る。

三十一日

いよゝ大晦日だ。いよゝなごちそうは支給され、酒を飲んで  
大いに祝ひ、各分隊はいつにない賑だった。夜になつて銃砲声が  
南方で聞へる様になつた。

昭和十三年

(一月一日)

元旦の朝、除夜の鐘は銃砲声であつた。酒を飲んで居る状況を知  
つて夜襲して來たのだらう。いよゝ十三年の元旦だ。七時起床、  
入浴して東の空へむかつて拝礼。午前九時より中隊にて皇居遙拝、  
九時半より大隊長に挨拶、十時R本部にて隊長に挨拶、祝宴を屋

上にて実施。風なく平穩な元旦だ。それより旅団師司令部にて挨拶  
後、吉岡と二人で落馬して負傷せる篠原を、城内の野戦病院に見  
舞。實際暖な元旦であつた。

二日

九時より体操遊技をして、十時より兵の外出。一日休養。

三日

一日休養。兵は外出。記念写真を取るべく出て見るも、混雜して  
居りし為歸る。

四日

成田准尉本部へいよゝの挨拶に來り、一泊する為、三家庄へ自  
分が小隊長として、駒津、竹前をつれて行く。晩に敵襲の心配あ  
りと、大隊本部よりの通報に緊張して居るも、何事もなかつた。

五日

午後一時半、野重の自動車にて警備小隊の兵と彰徳へ歸る。自分  
の居る所がやはりよい。旭写真館にて記念撮映す。彰徳城内で麻  
雀を購入す。明朝九時R隊長水治鎮巡視に行く警備として、第三  
中隊より四〇名。自分は小隊長として出発との事で、い<sup>(脱)</sup>る準備す。

六日

八時半二中隊長を中隊長として、各中隊より混成で一ヶ中隊を編  
成、出発。午後三時頃二大隊警備の水治鎮に到着。久保田少尉の  
五中隊に行き、自分だけ留る。城は相当立派な堅固なものである。  
七日

九時出発。良郎君が面會に來てくれた。演習を行ひ乍ら自分は尖

兵長として、連隊長に種々注意され乍ら、東方一里半の地点、河  
伴で終る。それより行軍にて午後四時頃帰る。第一、二次補充隊  
より来たもので編成せる為、落<sup>(五)</sup>悟せるものもあつた。

八日

午前五時非常呼集、軍装で待期。三中隊は予備隊として残り、他  
中隊は防衛の配備に就く。陸軍始らしい演習を実施す。十時工兵  
隊の彰徳城壁乗りの演習を見学。今日はR隊の野球大会で、優勝  
チームは四斗樽一本とのR隊長の主催、十時より開始す。速射砲  
には職業野球のライオンの中村三郎居り、投手をやりB球場の優  
勝。A球場は三中隊は準決勝で一中隊に破れ、一、二中隊で決勝  
戦、一中隊の勝となる。弱い風乍も冷い風で、なか／＼寒い日であ  
つた。

九日

午前昨日野球を実施せる場所にて体操を実施す。中隊長は、連隊  
長警備小隊巡視に行かれたので、三家庄に行かる。

十日

非常時事変後の初年兵始めて入隊の日だ。内地の各留守隊は、さ  
だめしこれ等兵士の緊張した入隊風影であらう。

十一日

午前休養。午後外出を許可す。

十二日

午前十時より、彰徳西南方十中隊の正面敵方にむかつて、大隊砲、  
機関銃の試験射撃あり、将校見学で、中隊長と宮坂少尉と三人で

見学す。十一月上旬攻撃した前方娘娘廟部落には敵居るらしく、  
幾分小銃弾を射つてよこした。午後は何もなく休養す。宿舎に電  
灯がついた。塘沽以来の電気だ、懐しい。而し火力電の為、暗く  
て仕方ない。

十三日

午前小隊の野球大会を実施す。十時頃、本日午後一時軍旗小隊の  
実兵指揮あり、其の代りに三小隊より警備員を出せとの事で中止  
す。午後将校見学、中隊長と共に行く。隊長の指導であつた。

十四日

兵の外出日。一日休養す。

十五日

午前小隊を引率して、彰徳北方の袁世凱の墓を見物す。附近には  
松が相当植へてあり、而も建物なども相当の立派な作りで、支那  
革命の父で、其の生前の人望を思せるもが<sup>(の脱)</sup>あつた。

十六日

第二分隊内にて金額紛失、種々取調べるも判明せず。午後一時半  
より中隊教練あり。三家庄北方部落より、二中隊長指揮して連隊  
長の指導で行ふ。午後四時より附近のトーチカ陣地に向つて測<sup>(速)</sup>射  
砲の試射あり。相当の効果ある事が後で見学して知つた。朝より  
久方ぶり雪空は寒い風と共に雪が舞ひ、冬らしい感じを起させ  
る気候となる。

十七日

夜になり雪となり、二寸近くの積雪で、十一月廿日磁巢に於てふ

つたのみで、二ヶ月ぶりであった。九時頃野砲二〇の小島田の藤井君が遊びに來り、懐しい友に色々語り、昼飯をすまして一時半頃歸った。

十八日

雪を見ると内地の正月が思い出す。降雪後の寒さは烈しいのだが暖い。最近はまだ仕事がないので退屈だ。

十九日

師団長代理として參謀長が、午後遠山部隊に表彰状を持って來るので、二時四十分R本部に集合す。

二十日

何も仕事無し。午前、中隊の兵に対する学科あり。二分隊などで金が紛失、帶剣がなくなるで、それに対する注意、戦線全般的の状況を話さる。戸部(長野市)の伯母より慰問品として、キャラメル其他を送れ入手す。

二十一日

別に何もなく休養す。

二十二日

午前小隊を引率して、彰徳城壁上を一周の行軍を実施す。なか／＼寒い日である。午後は工兵隊主催の水壕通過及城壁上りの演習を、下士官以上にて各部隊見學す。

二十三日

昨夜より幾分風邪の気味で、本朝は頭痛す。午後連隊長指導の本に、鉄条網通過及水壕通過の演習あり。南風非常に寒く、頭痛す。

るので早く歸りて就寝す。

二十四日

午前九時より中隊に於て水壕通過の演習を行ふ。大隊長指導の基に演練す。

廿五日

休養す。

廿六日

隊の藤田准尉、午後の恒河に於ける演習見學の爲來られる。特別志願の身体検査大隊本部に在り、第一大隊五名、第二大隊一名、三大隊二名なり。演習見學は中止す。夕方水治鎮よりの連絡者、保治、原田君遊びに來り、友一君と文男さんの弟君と五名にて、城壁西北角にて撮映す。

廿七日

行則君遊びに來る。

廿八日

志願票を提出す。小隊の考(課)科表を造る。午後田鎖隊主催の演芸会あり、見物す。種々な余興に一増の爆笑起り、なか／＼賑なり。藤田氏二泊して本日歸る。

廿九日

昨夜おそく命令あり。本日自分、連隊砲の佐藤准尉と豊安地方へ馬匹徴発に行く。中隊小隊の兵、大行李の一部を引率、通訳をつれて、他隊徴発の後とてなか／＼無く、民衆は村から／＼へ通報して、馬をひいてにげて行くので、なか／＼困難であつた。それで

も夕方まで十六頭を徴発、帰る。

卅日

本日は馬匹徴発は宮坂少尉が行く。別に何もなく休養す。晩連隊長と三中隊の幹部にて、宴会を事務室にて実施す。十時頃上機嫌にて帰られた。

卅一日

午後三時より城内支那劇場にて、東京朝日新聞派遣の柳屋金二郎<sup>(柳家金悟楼)</sup>、三喜松の漫談、其他漫才、浪花節等あり、二時間を快愉な笑にとだされて快愉だった。敵機が北支爆撃の模様ありとの情報ありて緊張。夜間灯火管制あり。

(二月)  
一日

新年も早一ヶ月経った。気温も漸次暖くなって来た様な感じがする。

二日

午後完全軍装にて大隊の命令で行軍を実施、飛行場一周をする。軽爆機多数来て居り見学する。どんより曇って居るも、風非常に寒い日であった。留守中坂口博君が面会に来たそうである。

三日

午前十時より恒河石橋附近にて、連隊長主催の鵜飼を将校は見学す。始めて見たのでなか／＼面白い。良くとれるものだった。野砲隊に行き、五日稲里出身者がよって話す通知に、行則、竹三君のところへ行く。午後大隊の演芸会、三小隊の笠原の余興一等となる。夜連隊も来り<sup>(長勝)</sup>演会をやる。

四日

午後成田少隊<sup>(ママ)</sup>に代りに一泊に行く。種々酒を出してもらって非常によった。早くねる。

五日

昼に帰る。午後稲里出身彰徳附近に居る人の会合をやる予定なりしも、午後師団長彰徳に来られる為、警備となり、中止す。

六日

何もなし。久保田少尉一泊す。

七日

午前兵器検査を実施。

八日

午前明日十二中隊後に警備に行く。偵察に中隊長と行く。いよ／＼新郷にむかつて前進する事に決し、各隊は漸次攻撃隊型に入る。晩に大隊の小隊以上<sup>(長勝)</sup>の宴会あり。

九日

午前九時突然、野砲の観測の掩護に半小隊を引率して行けとの事で、秋莊口前方の部落に行く。午後一時半頃帰り、大隊の入浴場の二が、大隊本部、三中隊の曹長以上を招待すると言ふので行き、場内のこうなんはんてい料理屋に行き、三時開始。四時よりR本部に将校集合、連隊長の訓示あり。夜十時いよ／＼彰徳一ヶ月半の宿舎に別れを告げて、十二中隊後に警備に行く。

十日

八時半宿舎出発、いよ／＼前方中村に進出して、攻撃準備の位置

につくべく、中村附近の敵の前進陣地を野砲の射撃の後占領して、こゝで一泊す。迫撃砲の射撃を受けるも、二小隊の一名軽傷を負ったのみで大した事なし。

十一日

紀元の佳節。早朝を期して前方高地及下毛嶺澗部落にむけ、先ず砲兵の集中射撃から始められ、こゝくとして炸裂する様は、実に部落山頂が変形すると思れる位。これに続いて我歩兵大隊の前進だ。中隊は先ず中村東方七里店の敵を攻撃して、高地東方より更に攻撃を開始す。一きに高地を奪取の予定も、幾重にものトチ力陣地によつて抵抗する敵の爲前進不能となり、mg砲の掩護のもとにかるうじて第一トチ力を中隊は占領す。途中地雷ありて、吉沢重松、二番目に竹前寿一、これにかゝつてコッぱみじんとなつて戦死。途中志水上等兵重傷、塚田上等兵同じく負傷せり。第一小隊は、小隊長以下戦傷者多数。これより三小隊第一線となり、幾重にもある前方高地を攻撃す。而し銃眼、而も高地より射出す敵の爲、更に前進不能。十二時頃には又山崎伍長頭部貫通で重傷せり。かくしていつまでもこんな事をして居るは、いたづらに犠牲を大きくするだけ。中隊よりの前進命令により、壕をつたわつて逐次前進中、又もや中沢三喜雄上等兵重傷、大沢上等兵腕の貫通により傷つきたり。

かくて我勇敢なる前進に、敵は逐次後退。機関銃の掩護射撃の本に次々とトチ力陣地を奪取して、午後四時頃漸く高地全部を我手に占領せり。思へば実に苦戦の八時間の戦闘であつた。神谷一等

兵も負傷を受けたり。占領後南方に前進、辛<sup>(ハハ)</sup>庄にて一泊に決す。前方部落まで将校斥候に出て、敵情を偵察す。

十二日

南方に追撃す。湯陰も通過、宜溝鎮も無事、大益村にて一泊す。重い背囊で兵は皆非常な疲労おす。

十三日

一時半頃、いつでも出発し得る如く準備し置けとの命令で、以後良くねむる事も出来ず、五時大隊は出発。一里西方より前方の淇河を渡って前進す。鉄道の東方に出て南進、淇県も夕方通過、西南方一里半位の北陽部落に八時頃到着す。附近は湿地帯で、暗くなり非常な困難を感ず。一泊す。

十四日

七時半大隊は出発。沙庄にて砲の掩護。野砲、重砲が砲列を敷いて、前方大双附近の敵陣に向けての射撃は見物であつた。相当に抵抗せる敵も、夕方には我軍の占領する所となり、大隊は夕方郛村にて宿営す。

十五日

七時出発。大隊は以然旅団の予備隊として逐次南進、前方の敵も相当抵抗して居るものか、汲県前方河の線に居るものか、敵情は不明なり。夕方になって大隊は西方に前進、山地に入つて輝陽方向に前進するものゝ如し。連隊主力の一部とも合つた。夕飯はカシメンボで、夜間になって更に前進、十時頃山地の一部に宿営す。附近には、二大隊、三大隊も宿営して居つた。

十六日

七時出發。いよ／＼R隊の指揮下に大隊は入って、輝県に向って前進す。猛烈な寒い風が吹いて砂埃を巻揚げて、前進なか／＼困難なり。山又山、木とて更に無く、敗残兵が頂上に居つてたま／＼抵抗せるも更に前進、輝県東方二軒の地に到着。輝県城に敵姿をみとめずとの事で、皆勇躍いよ／＼隊伍を整へて入城す。民衆は歓迎の旗を持つてこれをむかへた。今晚はこゝで宿営に決す。

十七日

本日は一日輝県にて休養。いろ／＼の洗濯をしたり、足の手入をして兵は休養せり。午後日直を腹務す。十一時巡察す。明日午前五時半出發、西方三十里、心陽にむかつて追撃に決す。

十八日

五時半大隊は前衛となりて前進。二時間行軍して十五分の休みの強行軍で、皆非常な疲労を感じ。午後六時頃第一日目的地呉村に到着す。

十九日

大隊は以然前衛、心陽に通ずる支那には珍しい新道を前進。十一時頃不意に敵に遭遇、三中队は第線<sup>(一隊)</sup>となり、小隊は又一線となり、河によつて抵抗する敵を攻撃す。野砲の砲撃に始まり、中戦車の活動と相まつて一きに攻撃。空には空軍の活動偵察ありて、実に近代戦らしい快愉な戦闘を行ふ。中隊に負傷二名のみ。三小隊は一名もなく、前方には英国旗の翻へつて居る炭坑あり、それより一里位前方の部落に宿営す。

二十日

七時出發。本日は大隊は本隊となり、博愛に向ひ前進。砲兵行李等軍輪隊と同じく、春風と共に砂埃で実にひどい行軍だった。顔が誰の顔やら判明しない様な汗と埃だ。夕方早く博愛に到着、大隊は城内に宿営す。相当よい街だ。

二十一日

心陽附近の敵、がん強に抵抗。廿七旅団も昨夜より相当の戦闘をして居るとの事で、大隊主力は右つかい隊となり前進せり。中隊四中隊は、旅団の本隊となり前進せるも、途中にて心陽に敵なしの情報入り、安心して前進。心陽直前の河岸にて昼飯、入城せずして更に西方二里、十八里村部落に中隊は旅団と宿営す。自分は半小隊を指揮して、旅団本部の警備に就く。

二十二日

この地より西方更に六里、遠山部隊は涪源に向ひ追撃す。中隊は大隊に帰り、先兵中队となり前進、昼頃になつて前方部落より射撃を受けて大隊は応戦、大した敵でないのもまもなく砲の威力により敗退。続いて追撃又遭遇と三回も同じ事をくりかへして、涪源城に十数名の最後の敵の抵抗を見るも、宮坂少隊<sup>(耐力)</sup>を先頭に入城す。午後三時なり。城内を掃蕩して宿営に就く。夜となりて敗残兵の襲撃あり、西北方にて盛んの銃声。八時頃になりて自分に砲兵掩護の命あり、よい宿舎をすてゝ十時頃、西門外に宿営の砲兵隊におもむく。宿舎がないので困難だった。十一時頃より銃声やみ、敵は敗退の様様なり。村松伍長の戦死を聞き驚いた。

二十三日

朝連隊長巡視され、警備の位置悪く非常にしかられた。引揚げる事となり、昨夜十二時、一時頃までかゝって運んだ荷物を、又中隊に運ぶと小語を云ひ乍ら帰る。○時より連隊長の全般の講話あり、酒井閣下も来場、支那酒にて祝宴す。二月も下旬の為か、南へ来たせいか、ほんとうに暖となった。麦なども彰徳よりづつと青々として居り、柳の青くなつたのも目立って、日中の行軍は熱くて仕方ない位だった。本日は休養。十二日朝戦死者の後かたづけに行つた。伊藤伍長、林市治郎帰る。

二十四日

本日も休養。九時頃入浴あるとの通報に、早速入浴に行く。非常に<sup>(マ)</sup>潔い湯なるも十数日ぶりだ、そんな事を言ふていられない。野戦らしい気持で入つて来る。明日いよゝ曲沃平地に前進、各隊はいろゝ準備を行ふ。

二十五日

午前七時出発、中隊は大隊とはなれて尖兵中隊の後方を工兵と共に行動すべく出発。午前十一時頃、いよゝあい路に入つて進むと、突如敵の射撃を受け中隊でも負傷者を出す。前兵の三大隊が攻撃、中隊も工兵の任務をとかれて参加、右山頂の占領を命ぜらる。中隊にて負傷者合計六名、小隊にはなかつた。敵は次の山、山と抵抗するので、今晚は三中隊は山頂で対陣となる。半小隊づゝ各小隊山頂に出して警戒、自分は二回小隊をつれて行く。

二十六日

午前七時半頃より、二、三大隊にて山頂の敵を攻撃、敵の後退を一大隊は一きに追撃隊となつて進む。峠の頂上、城壁によつて抵抗せる敵も、ついに工兵の爆破と突撃に退きたり。この戦に城壁一番乗りの内川少尉戦死、小池准尉戦死、内藤中尉負傷された。追撃となり、自分は尖兵小隊となり、逐次抵抗の敵をおつて無名の部落に宿営す。

二十七日

なんだか腹痛の気味で具合悪く、而も道は急坂となりて、いくつもゝ陵線を越へての前進には、ほんとに疲れはてゝしまった。いづれを見ても山又山の大行山脈、木とて生へて居ず実に心細ひ。二月の下旬でも内地と異り暖い。のどは乾いて水は無し。内地の山の水が思い出す。敵と接しての追撃だ、相当つらひが、逃げる敵は直更の事だらう。

二十八日

無名の部落で夜が明けた。大きな村でも井戸がない。あつても石が入つて居るそうだ。敵のなした仕事だ。暗くなつて兵は水をさがすに気異の様だ。やつと一個所出て居る所は、まるで戦場より物猛ひ位だったと兵は言ふて居る。前兵となつて大隊は前進。腹の具合悪く、身体がだるひ。こつ言ふ時には内地を思ひ出す。十二時頃第一目的地、恒曲<sup>(恒力)</sup>に到着。四千米位前方を敵が退撃して行くのを見て、一時間おくれたばかりににがしてしまった。右には黄河が見える。見たいゝと思つた大黄河よ、而し水は今はいさ少い様だ。こゝを敵は盛んに逃げる。見て居てなんともならない。山

砲でうつて見るだけだ。午後二時半恒曲西門より入城す。宿舎に就て早くやすむ。

三月一日

大行李続かず、いよ／＼米は終った。夜中に連隊命令で徵発隊を出して、いろ／＼なものを集め米の代用とする。午前八時いよ／＼<sup>(曲沃)</sup>沃曲にむかつて進撃す。而し糧秣が来ないので、四里位前進して宿営に決し、いろ／＼なものを徵発して代用にし、夜になってラクダ隊の食料運搬来り支給された。

三月二日

一人前一升二合の米で三日に食ふ、と言ふ命令で支給された。誠に心細ひ。而し皆元氣となつて、朝五時半大隊前兵となつて、一路山のあい路を夏県<sup>(夏)</sup>の北方三、四里の地点にむかひ前進す。十二、三里との事だが、本日中は行かれそうもなひ。昨日は日蔭で休む程の暖さなりしも、本日は又曇つて風寒く、行軍には丁度よい日だ。腹の具合も幾分良くなった。涼しいので元氣を出して前進す。夕方山西の平野に出る。四、五里手前と思れる谷の部落に宿営す。二十丁方面の砲声が盛に聞へる。

三月三日

七時半出発。いよ／＼山西の平野が近くなつたか、川の流にそつて午後二時頃一週間ぶりで平地に出た。而し山又山の一寸した平地だ。敵の退却するのを見たが、一寸遠くて大隊砲でうつたのみだ。朝より強行軍で非常につかれたが、夕方になつても目的地には着かない。暗くなつて八時頃、聞喜県の南三料の地に着き宿営

す。門がとざしてあり、工兵の爆破で漸く入る事が出来たが、本日の行程十二、三里と思れる程の強行軍だった。

三月四日

三小隊は五時に城壁上に昇つて、夜明けて退却する敵を射撃との命令で、ねむ<sup>(い脱)</sup>の<sup>(い脱)</sup>に起きて見るも、せまくて城壁上は駄目だ。仕方なく夜明けまで待期、八時になつて聞喜県に前進、堂々入城す。この街は相当な所だ。三小隊は駅の警備に就く。mg一ヶ小隊配属さる。清水少尉だ。本日はこゝで一泊と決す。

三月五日

連隊は二十師団長の命令により、いよ／＼<sup>(い脱)</sup>黄河畔芮城にむかつて追撃に決し、七時大隊は本隊となりて聞喜を進発、三家庄にむかつて前進す。雲低くうすら寒い日だ。午後には霧さへ降り出して来た。本日の目的地、三家庄の一里手前の部落に宿営せり。山岳に囲まれた山西の平野だけあつて、相当大きな部落がある。

三月六日

六時半解県にむかつて進発。昨日来の雨は雪と変り相当ふつて来た。高邑運城と大きな城の街を通過、昼食して午後四時頃、本日の目的地解県に到着す。雪は幸午後は晴れて日もさして来た。解県の東方には、大きな岩塩の出る所があり、事変の為役人が逃げて居らず、支那民衆はあらそつて無断で塩を持つて行く様も、支那の特色を表して居る。中隊は北門より入城、自分は斥候として

入城せり。  
(後筆カ)  
昭和十三年



三月七日

本日一日解県に休養に決す。連日の行動に、兵に足の損傷者続出、思へば彰徳出發以來長い作戦だ。朝起きて見ると、又雪で銀世界だ。明日の山を越へての行動が思いやられる。午後より部隊日直を命ぜらる。休養す。

三月八日

午後七時出發。芮城にむかひ前進す。解県南方の山岳地を前進するも、雪相当多く、道路悪く、峠の頂上で昼飯となる。而も気温寒く、一望の中に見える大黄河を眺めてふるえ乍らの飯だ。それでも皆元気となつて山を下り、一里余り来た部落<sup>(ママ)</sup>で宿営に決す。

三月九日

四時半整列にて大隊は五時出發。芮城より西南三里、黄河の渡河点、蔡村<sup>(に脱)</sup>むかひ前進。二、四中隊欠。午後二時目的地に着。幸敵も居らず、眼前に横る大黄河の畔に立ちて眺むる時、たゞ感慨無量だ。河の南には敵の列車が安心しきつた様に走つて居る。水量は思つたより少い様だ。而し有数の大河だ。今晚はこの部落にて一泊に決す。

<sup>(後筆力)</sup>  
昭和十二年

三月十日

陸軍記念日。黄河の畔、蔡村に眼をさました。将校斥候として八時、部下と河の偵察す。対岸には敵陣あり、敵兵の物言ふ音がする。列車が走つて居る。水は対岸を流れて、その前北岸の小流あ

り、行く事が出来ない。中隊もその中に黄河見物に來り、何を射

つて居るのか対岸の敵は、陵線のむこうで何か銃声がして居る。

十二時大隊は、芮城にむかひ前進、宿舎につく。九時頃命令あり、三小隊は明日八時より連隊通信班と解県までの架設電話修理の援護せよに接し、一日の休養も出来ない事を残念に思ふが仕方ない。各分隊に準備さす。

三月十一日

八時出發。途中なか／＼破損箇所あり。陌南鎮附近で日没となり宿営す。

三月十二日

陌南鎮より前方は、電話線非常に破損して居り、歩兵通信の手口<sup>(ママ)</sup>に行かず。本日は又芮城に歸るべく七時半出發、二日間の掩護が無駄だった事を残念に思ふ。十二時半頃芮城着。明日又連隊はいよ／＼涇源に歸るとの報に、三小隊の一日も休養出来なかつた事は、實際兵はなくなれず。それでも皆疲れていながら洗濯をして、しらみたいじだ。頭髮ものびたので、幸支那の理髪屋にて行ひ休養す。

三月十三日

本日は陌南鎮を経て、解県方面より歸る予定なるも、三大隊方面平陸、夏県間に相当の敗残兵居り、三大隊の状況も不明の為、連隊は目的を変更、平陸方面の敵を攻撃、夏県に出る進路をとりて本日は陌南鎮東方三千米位のきうとう村に宿営に決し、午後四時頃到着。昨日と同じ道路を歩くのでいやになつた。左に見える山

の雪も消へて大変暖となり、春らしい感を一増思せる。

三月十四日

七時大隊は第二梯団となりて、平陸の北方に茅津方向の三大隊の攻撃を掩護すべく前進、大きな地げきをいくつも越へて後南呉に宿営す。中隊は山砲の掩護なり。夜になって茅津方向で砲声盛んに聞へた。この部落も井戸が深くて水に不便なり。

三月十五日

午前五時半大隊は平陸東北にむかひ前進。先ず平陸を経て黄河にそつて進むと、対岸より敵の野砲の射撃を受ける。まぐれにも飛んで来る弾が、旅団長閣下のそばに落ちたが、幸不発だった。我部隊には負傷者無きも、最後尾より前進せる二大隊大行李にて一名戦死、負傷二、三名との事だった。茅津の敗敵も三大隊の攻撃で退却、連隊主力は茅津北方二里位の地に宿営。部落は無く、皆穴に入つてゐる状況だ。三小隊は水車屋にて一泊す。

三月十六日

本隊は七時出発夏県にむかふ。三小隊は輜重の掩護となりて九時出発。道路は非常に良く、幾分の上り坂で行軍には相当こたへた。氣候は暖く、菜の花は咲いて居る。タンボ、柳の葉の青くなった事、春らしい感を一増思せた。峠を下つて平地に出ると、杏の花の今や咲かんとして居るを見て驚いた。故郷の杏の時期は四月中旬、一ヶ月も此の山西の地が氣候の早いには驚いた。午後七時太陽の没する頃夏県に着、中隊は南門外宿営す。

三月十七日

本日は休養。解県出発以来、三小隊始めての休養だ。兵は皆洗濯に多忙だ。しらみ駆除に沸とう湯の中に入れて居るものもある。油小麦粉、砂糖も多くあり、てんぷらを揚げて居る分隊、ぼた餅をこさへて居る分隊、それぞれのもので栄養食をとつて居る。實際ぼた餅にはつまかった。午後部隊日直を服務す。

三月十八日

春らしい暖い風が吹いて、路外の柳の葉は一増青々として来た。何の花だか万開となつて居るを見た。垣曲にむかつて前進。本日の予定地一里手前にての情報で、前方に約一万五千位の敗敵居り、更に新郷平地方向の敵は黄河を渡河して北上の気配にあり、連隊は山西の敵をさけて速かに新郷平地に帰るとの事で、進路を變じて今晚は中隊は裴杜村に略一小隊と宿営、部隊の最後尾で警備する事となり、午後四時頃目的地で警戒にあたる。

三月十九日

六時裴杜村出発。旅団本部宿営の村に至り、後続部隊輜重中隊を待つ。一里半位の長きに渡る輜重隊は、午前九時頃漸く其の後に続く。道路悪く峠あり、午前中に一里位歩いたのみ。本日の目的地まで七、八里あるので、心はあせつても前進出来ず、而も午後になって歩行速く、實際歩兵は続くに困難だ。途中約五百の敵の不意をついて、多大の損害をあたへた。部落は大火事となつて居た。朝より危んだ空はついに小雨となつた。暗さは暗く、峡谷を渡るに非常な困難、午後九時頃漸く目的地につく。小隊は二千米前方の一家屋にて小哨を務む。

三月二十日

小雨は幸朝になつてやんだ様だ。以然輜重隊の後尾だ。午前中に又一里程来たのみ。午後長い峠を越へて、夕方垣曲の北方、出発時宿営せる村に至り、更に夜行軍を以つて前進、九時頃垣曲北方一里の部落で宿営す。午前ゆるく、午後になつての強行軍で、足も非常にいたむ。雨模様の天候だったが、幸ふらずにすんだ。

三月二十一日

四時半起床、垣曲より二千米前方の大隊の位置に復帰との事。六時出発、垣曲にて三分の糧食其他を支給されて、大隊の位置に至る。輜重中隊を先頭に、来る時と異つた工兵隊の新しい道路を通過、小隊は太行李の後方を夕方早く、来る時水の無かつた部落に宿営す。小雨ふりの悪い天候となる。

二十二日

昨日同様の準で九時頃出発、大失鎮にむかつて前進す。この附近には敗残兵居りて、輜重がたま／＼襲撃されるとの事で、本日はこれを覚悟して前進、十五連隊の一個小隊が警備、今応戦との事だったが、大隊が至つたころは何もなく大失鎮に迫る。糧食運搬の重任を帯びて襲撃され、名譽の戦死した輜重兵の新しい墓標をながめて、敵のにくさを一増感した。

二十三日

午前六時いよく済源に前進、朝よりの雨模様は、うらみの封門口附近に來るとふり出して、峠の上りに車輪隊の困難は非常なものだ。峠を下つた頃は幸雨もやみ、日が照つて来り新郷平地も見

える。懐しい。行く時不意の射撃を受けた附近にて昼飯。午後七時頃漸く済源着、南門附近にて宿す。山西より暖な為か、麦も伸びて柳の青々として居る様、春の感一増深し。

【第二冊】  
(後筆力)

昭和十三年

三月二十四日

昨夜十時頃の命令で、連隊は明朝猛県附近の敵を討伐するやも知れず、今晩中に準備せよとの事であつたが、夜明けても何の命令もなく皆安心す。本日は休養、一ヶ月ぶりに入浴も出来た。今日は朝から快晴、昨日あの雨の難行軍を思ふとうらめしくもなる。新郷平地に出ると、種々な会報がある。京漢線も後方附近には敗残兵の襲撃あり、なか／＼討伐が困難との事だ。百五十連隊が石家庄附近に来て居るとの事も、退院者より聞く。

三月二十五日

本日も休養。第二大隊が本日、猛県附近を討伐との会報あり。

三月二十六日

七時半済源出発、懷慶にむかふ。途中の道路は雨後のふみかためでかく、足裏の痛みに皆なやむ。むし暖い雨模様の天候だ。心陽北方の部落に宿営す。

三月二十七日

中隊はR本部と共に第一梯団となり九時出発、清化鎮にむかふ。途中絡店附近で、先日来しば／＼敗残兵が出没との事、本日も若

干居り、一中隊掃蕩して居り、三中隊も連隊長の命で攻撃、戦死一名 指揮班の東外とう 出す。附近はひどい竹林で、敵の潜伏には好適の地なり。清化鎮にて夕方、輜重中隊の掩護 自動車隊で七里位東方まで行けの命令に接す。而し準備して行くと、敵多く夜の行動不利の為中止となる。大隊も夕方自動車で二里半位の東方に、野重隊の掩護におもむく。情報によると、この博愛県知事が指揮して、約四千清化鎮奪取の目的との事だ。

三月廿八日

午前昨日の命令通り自動車隊の掩護、八時出発、修武にむかう。途中で敵と遭遇、中隊は任務にもとづいてこれを攻撃、まもなく敵は退却、幸負傷者無し。輜重隊に若干の犠牲者ありたり。午後二時頃修武着、ここに宿営に決す。

三月二十九日

任務も終り、中隊のみにて清化鎮に帰る予定で、午後八時半修武出発するも、第三梯団の掩護たる大隊が修武へ来た為腹帰、二里後方大王鎮にて宿営す。

三月三十日

二時頃より銃声突如あり、日直の為起きて巡察すると、駅附近へ若干の逆襲ありたる模様なり。城内に異状なし。東方、西方にて銃声盛に聞ゆ。午前九時大隊は清化鎮にむかひ前進す。本日は敵も居らず、天候は快晴、無風で非常に熱く、内地なら五月中旬の様なり。博愛に帰ると、五十日ぶりで懐しい便りが山程来て居た。早速むさぼり読んで、二月中旬以後の内地の情勢を知る。

三月三十一日

博愛にて休養。懐しい手紙、新聞を見いつて、わずか数旬の間にいかに国際情勢の変るかに驚いた。近中<sup>(マ)</sup>に自分は連隊の彰徳残置荷物運送の為出張、其の打合せで連隊副官殿と打合せをなす。

四月一日

午前四時大隊は、清化鎮北方一里近くの部落に、敗残兵の討伐をなす。二大隊は後方より山砲も配属されているく準備、攻撃せるも何も居らず、午前九時帰城す。午後三時より、各大隊よりの彰徳出張の下士官を集めて打合せ、明後日出発に決す。七時より将校集会所にて、遠山部隊附の東日記者石月氏の送別で、座談会を行ふ。途中R本部よりよばれ、彰徳行明日に決す。

四月二日

午前十時清化鎮発の第二列車に乗り、途中各所で停車長く、午後六時頃漸く新郷着、兵站にて宿営。自分は兵站指定の日本ホテルに。新郷は近代都市だ。電灯は赤々と洋館は並び、内地の様な感じせり。

四月三日

午前八時列車発、彰徳に向ふ。昨日と異り、列車はなか／＼混雑だ。石月記者の依頼で車中の座談会をなす。午後三時思出の彰徳着。石月氏が記念の写真をとってくれた。兵站到宿営す。自分は荷物かん視として残した中沢の宿舎に泊る。懐しい。電灯の明るひ下で思出を語る。

四月四日

兵は皆疲れて居るので、本日は列車の都合も悪いので休養す。

四月五日

R本部第三大隊の荷物運搬を実施、夕方までに漸く終った。なか

／＼熱い日で初夏の感あり。

四月六日

午前十時頃貨車の配車終り、荷物の積み込みを実施す。

四月七日

午前九時いよ／＼第一回の貨車出発す。其他残りの準備を行ふ。

四月八日

本日も荷物の運搬其他、いろの準備に終った。猛烈な風が吹いて

砂埃を巻揚げ、眼を開く事が出来ない。北支特有の春の風だろうと思ふ。

四月九日

朝から雨模様は相当の太ふりとなり、駅の荷物を心配している／＼と運んだり、シートを覆ふ。午後荷物積み込み。雨は幸やみ、相当早く終った事はうれしかった。

四月十日

午前九時発の列車にていよ／＼彰徳出発。天気良好、列車は事故もなく午後二時新郷着、自分は新郷ホテルに兵站の指示にて宿泊す。

四月十一日

八時四〇分発の列車にて清化鎮にむかふ。焦作鎮にて二大隊の荷物をおろし、途中鉄道の破壊で若干の遅延を見たのみで、無事午

後三時頃清化鎮着、荷物を下す。連隊本部に行き隊長に挨拶、一中隊が駅附近で警備の為そこに宿営す。

四月十二日

R本部本部其他<sup>(余力)</sup>に行きて、荷物運搬の為種々連絡す。二、三日は自動車も出られないらしい。

四月十三日

旅団本部にて岩間副官に自動車を依頼す。この附近は、毎日の敗残兵の討伐、襲撃で勤務烈しく、荷物運搬の兵を新郷へ警乗兵として本日出す。伊藤伍長。

四月十四日

第一中隊が三大隊と共に討伐に行つた為、自分の部下を歩哨に立てる。午後吉岡君と面会す。特別志願兵は不採用なり。

四月十五日

本連隊の軍旗祭なるも、いろ／＼な事情で延期さる。明後十七日晋城へ自動車行くとので、種々自動車隊長殿と打合せなす。午後篠原少尉と吉岡君と会合、語る。夕飯に塩瀬酒保へ招待され、市村軍曹と行く。九時頃帰る。

四月十六日

午後荷物積み。彰徳より持参の荷物は、大隊が近日中に清化鎮へ引あげる為、持参せぬ事に決す。封書、小包、酒類を持参。

四月十七日

五時半自動車隊は、第十一中隊、砲一個小隊、大隊砲一ヶ分隊警備のもとに出発、晋城にむかふ。相当の里数あるも道は良好、十

一時頃晋城着。山地の街としてその立派さに驚く。人道、車道あり、<sup>(街)</sup>外路樹を植へてあり、今まで見た事のない支那街だ。話によると、三千年の歴史のある城だそう。小隊の川手完二上等兵伍長に任官、二小隊の中村伍長と新設師団要員として明日行く事に決定。自分としてはなしたくないが、命令で仕方ない。晩に久方ぶりで川手、井口、加藤と麻雀をやリ、午前三時頃手紙を書いて寝る。

四月十八日

川手伍長出發、中村伍長は自動車に遅れとうわくす。入浴して休養。十二時頃になると、晋城北方四千m、中山村に匪賊出沒、リやくだつ中との事で、自分が一ヶ小隊とmg小隊、大隊砲一ヶ分隊と討伐に行くも、敵影を見とめず二時頃帰城す。

四月十九日<sup>(日勝)</sup>

起床同時に入浴して、さはやかな気分となつて居りしも、突然中隊は、昨日新設師団要員として自動車に乗りおくれた中村伍長とmgの伍長をつれて行く事となり、十一時出發す。初夏の日はんくくと照つて、久方ぶりの行軍だ。<sup>(夜)</sup>一里近く歩むと三名の落伍者あり、晋城に帰す。旧道を通つた為、瀾東鎮へ午後六時頃到着す。中隊が一週間警備せる所なり。

四月二十日

午前五時出發。漸次暑くなつて来り皆相当つかれた。昼頃漸く平地に出る事が出来た。今回の行軍は、自分は今までにない疲れを感じ、山西作戦にも出来なかつた足に豆も出来、非常に苦痛を感じ

ず。午後二時半頃清化鎮着。先日來列車不通の為、川手伍長達もまだ居り、送つて來た中村達の間に合つたのは幸だつた。一中隊の警備せる駅附近に行き宿營す。

四月二十一日

休養す。

四月二十二日

連隊本部は本日焦作鎮に移転せり。一大隊の晋州引揚は遅れた模様なり。連隊は逐次新郷附近に集結の模様、中隊は大隊の指揮下となり、別に勤務もなし。

四月二十三日

昨日來の曇天は本日は雨となつた。しとくとふる雨の気分はやはり氣持が悪い。入浴後、小池、伊藤、加藤分隊長をつれて、城内塩瀬酒保にて遊ぶ。午後二時頃帰る。雨も幸やんだ。大隊の酒保の近藤に依頼せる写真機来り、映す。

四月二十四日

塩瀬酒保、本日焦作に行くので列車の心配をしてやる。休養す。

四月廿五日

自動車隊の掩護として、中隊は午前七時出發、晋城に向ふ。途中山に入つてすぐ、不意に敵の射撃を受け、一小隊で戦死一名、負傷三、四名を出し、而も手投弾の為二台火災を起し、三台使用不能になりしは残念だつた。交戦三時間にして撃退、出發す。午後四時頃晋城着、大隊も心配して居りたり。

四月廿六日

本日自動車中隊は、荷の都合で休む事となりしも十一時頃、昨日の敵の居った附近に討伐隊が出て居るので、本日帰れの電報ですぐ準備、午後一時出発帰途に就く。十五の二ヶ中隊が昨日の場所に居りたり。午後七時頃清化着、前の宿舎に入る。

四月二十七日

休養。

四月二十八日

同様。兵には夏服が支給さる。暑さは烈しくなる。大隊本日晋州出發せり。

四月廿九日

天長節だ。宿舎には国旗をたてゝ祝ふ。本日はなかなか暑い日だ。大隊は午後四時頃到着せり。大隊の荷物<sup>の</sup>為<sup>に</sup>駅へ貨車を請求す。

四月三十日

本日焦作へ出發の予定なるも、大隊準備の為明日に延期さる。

五月一日

今期作戦の為、新郷集結の部隊は清化鎮出發、焦作に向ふ。十二時頃到着。焦作南方部落に宿営。大隊長加島少佐殿は、急の命令で旅団副官となり、二時の列車で出發さる。十五連隊主力と三大隊は、津浦線を迂迴<sup>(徐)</sup>、除州方面に行った。

五月二日

中隊長は大隊の指揮をとる事になる。本日より自分は軍旗小隊を命ぜられ、七時に焦作R本部に行きて七中隊より交代す。新郷、焦作間に於て宿営す。

五月三日

なか／＼熱い日で、二時間続けての行軍で、皆相当の疲労を感じる。新郷城の東方部落にて宿営す。

五月四日

一日位の休養あるも<sup>(の脱)</sup>と思ひしもそれもなく、本朝九時中央梯団として出發、道口鎮に向ふ。本日は先ず、汲県城内にて宿営す。城壁外には池あり、なか／＼立派な城なり。一本四〇錢のサイダを皆氣異の様で求めて居る。又何より味良い。安藤辰雄、高橋武二郎入院。

五月五日

道口鎮に向ひ前進。三梯団となり、連隊は中央となり新郷出發、途中の部落にて一泊す。沙埃は非常にひどひも、風があるので幸<sup>だ</sup>った。

五月六日

昼飯は道口鎮の手前にて行ひ、更に一里東方滑県城に午後三時頃至り宿営す。なか／＼立派な城だ。休養は更に無く、明日濮陽に向ひ前進との命あり。二分隊長岩下伍長、今泉周一、珍断の結果入院せり。

五月七日

五時頃より久方ぶりでしたと／＼と雨がふつて居る。九時二十分本部の出發の頃は幸やんだ。師団司令部と共に第五梯団に別れて、濮陽にむかひ前進す。約五里東方の白道口より、更に一里東方へRは宿営す。

五月八日

八時四〇分濮陽に向ひ前進す。附近は塩分の含んだ水で、茶を入れても茶の味ない位なり。午後三時頃濮陽着、非常に大きな城壁なるも土でこさへたもので、街は立派ならず。師団も共に城内は非常な混雑なり。こゝは河北省なり。

五月九日

本日は夕方まで休養の予定なり。からりと晴れた熱い日だ。洗濯などやらして、今後の行動の準備をす。夜行軍を以って行動すべく、二〇時出發、濮県に向ふ。

五月十日

三時濮県三里位手前の部落に部隊は大休止。七時出發、午前十時半漸く濮県着、いよゝ山東省だ。街は貧弱だ。城壁は土だ。いよゝこゝで黄河の渡河準備の為、本日は休養。十七時准尉以上R本部に集合、今後の行動を副官より聞かれた上、隊長訓示ありて祝宴す。

五月十一日

日中は相当熱いも、夜間はとても冷へて仕方ない。十時頃荒井克君に面会、野砲のR本部にて遊ぶ。本日珍断の結果、竹内忠雄入院となる。指揮班の県伍長、二分隊長として小隊に来る。二十三時半黄河渡河の為出發、三時頃午前の部落にて休止す。

五月十二日

朝早く渡河の予定なるも、遅れた為十八時半まで休み、夕方出發、渡河を開始。自分は連隊長殿と軍旗と部下若干を乗って渡る。だ

く流は河上に来て見て驚いた。内地の夕立後の大水の出た時の位な、にこりさだった。南岸にて二十二時頃まで休み、二里南方の集結地に三時着、休養す。補充隊の将校数名来り、大田一郎君も見えた。

五月十三日

十時Rは師団の予備隊として、司令部の後を曹州に向ひ前進す。本日はなま暖い南風非常に強く、砂埃を巻上げて物猛く、内地でとつてい見られぬ程、而もむかひ風で行軍は非常に困難。自分は腹の具合悪く、水を飲みたくても良水無く、不潔な水をつんと飲んで漸く続いた。實際今日の砂埃には皆疲れ、兵の中にはたをれたもの続出せり。七時頃曹州の三里位北方の部落に宿営す。

五月十四日

昨夜より曹州方面では、猛烈な銃砲声がして居り、情況なかゝゝ急だ。三時R隊は急に出發となり前進す。曹州の一里半北方の部落で飯を食ひ、十一時まで休憩す。猛烈な砲声きこふ。十一時出發、頑強に抵抗する曹州北方に達す。十六時頃猛烈な雷鳴と共に大夕立来り、銃声、砲声、大雷鳴、大雨と、猛い程の戦闘だった。曹州南方一里位の部落に露営す。雨は幸止んだ。

五月十五日

曹州北門外に集結、雨上りのなかゝあつい日を、連隊は昨日の道を引かへし、午後三時小隊は、軍旗小隊を五中隊の一個小隊と交代して中隊に腹帰す。

十六日



本日は休養の予定なりしも、夜急に命ありて明日出する事となり、<sup>(発脱)</sup>中隊は五時出発、曹州南方でいぼう上に出て、野砲の出發を掩護す。それより前衛の最後尾、迫撃の後を南方にむかつて前進す。

十七日

昨日は迫撃砲と共に畢塞に宿営。六時出発、本日の行程十里、<sup>(隴)</sup>海線の近くまで前進する。大隊の命で連隊の行李を一緒にし、中隊はそこで宿営す。

十八日

払曉と共に敵の敗兵と遭遇、<sup>(残脱)</sup>相当に居るらしく、大隊は攻撃中。十時頃中隊は大隊腹歸となり、第一線となり、午後二時半より中隊は左一線となり、部落に居る敵を砲の掩護射撃と共に攻撃す。敵は退却せり。本日大隊腹歸の前進中、柳沢袈裟雄胸部貫通にて名譽の戦死す。午後大隊は旧黄河の砂地隊を通過して、内黄、林坡に向ひ前進するも、<sup>(隴)</sup>灌海線には頑強に抵抗して居り、二大隊は攻撃中なり。夜間になり、中隊は第一線の八中隊と交代して、夜を利して鉄道二百米近くまで接近す。壕を掘って明日の突撃にそなふ。猛烈な射撃を受けるも、犠牲者幸なし。非常に寒くなるも、睡眠不足の為よくぬむり、眼さむれば夜が明け始めて居りたり。

十九日

いよ／＼灌海線にむかつて突撃の日だ。六時二〇分より砲の猛烈な射撃と共に七時を期して攻撃、我猛烈な砲撃、敵は内黄まで退却、大隊は一きにこれを二大隊と包囲、西門を開けて数百名の敵が雪崩の如く退却して行くを猛射、愉快だった。十時頃更に西南

方一里、林波<sup>(坡)</sup>に向ひ前進、宿営す。

五月二十日

大隊は七時出発の予定で中隊が整列して居ると、突然頭上で爆音と共に敵機七、八機と友機七、八機が、入みだれての空中戦だ。皆観戦と言ふ気持でこの激戦を見る中に、三機の敵機は火をはいてすぐ前につい落、一機は不時着、南方につい落せるは実に愉快なり。大隊は西に向つて前進す。中隊は砲の観測を掩護すべく、大隊と別れて双塔附近の原を前進中、突如として敵のルロー型戦車の攻撃を受け、始めてでは在り、一寸皆あはてた感ありしも、<sup>(中)</sup>中隊の兵の勇敢により、三台の戦車を全部分取りしは愉快なりしも、中隊で五名負傷中三名小隊、小池伍長、伊藤伍長腕を負傷、宮下競上等兵は下敷となり、顔面其他に重傷をおったりしは残念なり。それより命令通りの部落に至り観測を掩護、中隊は本夜こゝを警備する事となり、夕方となると四、五百米の村へは敵が入り、戦車は来り、偵察砲は射つ、中隊全員は死を覚悟して守る事とし、樹木を<sup>(倒)</sup>倒して障害物として防備をかためる。十時頃となり大隊より、敵が逆襲の気配あるので引揚げよの命あり、暗を利して一里半後方の大隊の宿営地に至る。

五月二十一日

一時間位の休みの後、一時頃大隊は林坡を通過、敵の主陣地を宇廻して西南方に前進、部落／＼によつて抵抗する敵を駆逐し乍ら、其夜は敵と対し乍ら青空の下で露営の夢をむすぶ。

五月二十二日

五時頃になつて大隊は昨夜の陣地を後退、更に異つた方面に前進す。第六中隊の兵に、深沢敏康君の戦死、吉沢保治君の負傷を聞き驚いた。六中隊は中隊長戦死、各小隊長も戦死或は負傷で、中隊の指揮は軍曹がとつて居るとの事である。いかに二十日の激戦だったかが知られる。大隊は午前中はR隊の予備隊なりしも、午後大黒村部落の攻撃を命ぜられ、これを夕方占領せり。

この戦闘に於て四中隊方面は敵の測射を受け、戦死、負傷多数出てたり。中隊でも戦死二名、負傷四、五名を出す。珍しく敵の十五糎砲の射撃を受けて、小隊でも大和周二顔に負傷せるも軽傷だった。今晚はこの部落にて宿営。夜孫県村に斥候に出て偵察す。二晩ねずの行動で疲れて居り、ぐっすり眠る事が出来た。後程知つたが、本日の敵の砲は列車砲との事だった。

五月二十三日

陳留口と言ふ黄河の渡河点をおさへる目的の師団は、隴海戦を横ざり、羅王の駅を確保、大隊は更に北方花火店の部落に浸出、午後二時頃三義砦東北の部落に前進して宿営す。渡点も他部隊のかく保するところとなりたり。師団司令部は三義砦の街に在り。

五月二十四日

本日は休養との事だ。清化鎮出発以来始めての休養だ。河西伍長を長とするlg一ヶ分隊を大隊本部に差出し、水和主計少尉の指示を受けしむ。蘭封は未だ落ちず、二連隊が攻撃に行く。午後小隊の人員を以つて、北方ていぼう上に壕を構築さす。附近にも相当の敗残兵が居る。夜間急に命令あり、明朝自分は將校斥候として

連隊長の指示を受ける事となる。

五月廿五日

部下二十名を引率して黄河畔に出で、更に東方の部落の偵察に行き、南北庄の部落にて敵前三百で不意猛射を受け、引かへす。午後は休養す。夕方急の命令ありて、大隊は約二里西方、一、四中隊の今まで警備し在る曲與集の街に行く事となり、直に出発す。途中にて日没となる。曲與集は毎夜の如くに夜襲を受け、砲撃も相当受けて負傷者も出た模様だ。十一時頃漸く、「山」「河」の合言葉で連絡付き、城内に入る。相当の良い街だ。直ちに一中隊受持の抵抗線に付く。敵の射撃も相当受け、夜明まで防備す。

五月廿六日

師団は陳留口の渡河点と鉄道をおさへて防備する事となり、廿八旅団は西方に対し、五〇連隊は右第一線、大隊は左一線となり、曲與集を警備す。夜は敵襲のおそれあるので日中眠つて休む。此の街には相当の物資あり、砂糖、粉類多数ありて支給さる。夕方より珍しく降雨となりたり。小隊の兵をして抵抗線の構築をなさす。河南の首都開封までは六里余だ。敵もせつきよく的に出て居る。

五月廿七日

海軍記念日だ。雨も幸やんだが、払曉西南より又猛烈な敵野砲の集中を受け、中隊事務室にも落下、市村軍曹顔面其他に負傷、荒井伍長も腕に負傷せり。第二分隊長梶伍長を指揮班にやり、第一分隊長井口上等兵、二分隊長北沢上等兵、伊藤伍長は、負傷も良

好なので四分隊に腹帰す。

五月廿八日

毎日曲與集に向つての敵の砲撃には實際困る。各分隊はそれ／＼穴を掘つてひなんすべく、適當の場所へ穴を掘る。此の場所はどつしてもまもらねばならぬのだ。この情態は一週間若しくはそれ以上になるとの事で、各小隊は砲弾の合間を利用して防備に余念ない。

五月廿九日

夜明けと共に又猛烈な敵野砲の集中火を浴びる。四中隊では下士官四名死傷、mgでも数名負傷との事である。友軍には弾薬が不足がちで、思ふ様に野砲の活躍が出来ない。たゞ時々友軍飛行機が飛来、爆撃をして行っただけだ。十一時半頃よりは一時間半に渡つて、猛烈な集中火であつた。暑さは猛烈にやつて来て、内地の真夏の様だ。蠅は／＼して居る。ねむれない。夜は敵でねむれない。十六時頃二分隊の浜一等兵、北門にて小行李の掩護射撃中頸部に貫通、速死<sup>(即)</sup>せるは残念なり。

夜間立哨中石橋二等兵、顔面に貫通を受け負傷せり。敵の益々攻勢に出る気配あり緊張す。<sup>(徐)</sup>途州方面より前進中の十六師団、混成三師団は、本日十八里東方衛輝出發とのニュース入り、一同安心す。初年兵も黄河右岸に到着せるとの事だ。

五月三十日

夜明と共に又敵の砲撃を覚悟せるも、本朝は何もなし。話によれば、敵は逐次後退せる模様だ。而も昨日敵砲兵陣地に我重砲命中、

三門を使用不能にせしめたとの事だ。午前十一時頃新任の我大隊長海野少佐<sup>(精)</sup>殿を北門に迎へる。北門外は敵の射撃を受けるので、igの掩護下に入城されたは、第一線の大隊長着任らしい風影だつた。なま暖い南風吹きて気持の悪い日だ。夜間は例により兵を陣地<sup>(に脱)</sup>つけて置き、警戒を密にす。師団司令部附近にも砲彈落下、副官戦死、参謀重傷との事なり。

五月三十一日

敵の砲撃は無くなり、一同幾分昼間は安心して休む事が出来る。十一時頃新大隊長の各陣地巡視あり。彰徳南方高地で重傷の中沢三喜雄上等兵全快、天津より帰隊す。連隊の初年兵も明日頃には来る予定との事なり。

六月一日

南へよつた為か、雨期が近ずいた為か、最近天候が悪くなつた。本日朝からし／＼と小雨だ。曲與集の警備もな／＼退屈だが、敵砲弾がなくなりて日中は楽となりたり。午後中隊長の本に集合し、功績の事其他の打合せをなす。十五時より城内の掃蕩をなす。六分隊の高寺嘉与一郎退院、帰隊す。各隊の初年兵が来たそうであるが、五〇連隊の初年兵はし／＼う／＼熱の出た為、二、三日遅れるとの事だ。夜間は以然銃声時々暗夜の夢を破る。

六月二日

五分隊で立て／＼くれるかめ風呂に、起床と同時に入つてよい気持となる。天候は以然悪い。はだ寒い感じを思せる。野菜は何もないので、各分隊は豚を食ふのみで、油ばいもののみであきても来

るが仕方ない。夕方になって又雨がしとくどふって来た。夜間九時頃まで盛んに銃声がしたが、それ以来朝まで久しぶりで物静かだった。

六月三日

昨夜二、三百米で一週間も対陣せる敵が、退却せる模様だ。十時頃将校斥候となりて、前方約三千米の王砦の敵情を搜索す。やはり何も居ず、昨夜退却せる模様で、たゞ彼等の陣地のみが無気味にあつたのみだ。夕方、明日大隊は出発の予定との通報あり、準備をさす。今晚は曲與集に来て始めて兵を宿舎に休ませ、警戒は下士哨を以つてす。夜も何も聞へず実に静かで、たゞ夕方より降り出した雨の淋しい音のみであつた。

六月四日

一晚ふり続いた雨は朝になつてもやまず、七時半出発はそれく雨具をつけて泥濘となつた道路を、先ず魯砦に向ひ前進す。こゝにも敵なく、大隊は一里半前方馬尾牆に向ふ。自分は尖兵小隊となつて前進す。こゝにも敵を見とめず。雨は幸やんで砂地の道路は良くなった。昼飯をすまして更に一里、小門村に向ひ前進す。開封まであと三里だ。良くも敵は退却したものだ。今晚はこゝで露営。

小隊は小門村の前方約千米の庄に、mg一ヶ小隊と一小隊の半個小隊を指揮して泊る事となり、十六時これに至り、工事をして警戒に就く。前方部落にも敵が居らないらしい。所が二十時頃中隊より急の命令あり、二十一時出発との事だ。開封に敵なしとの事

で前進するらしい。皆元気となつて準備、出発す。約一里半前進露営す。

六月五日

四時半急の命令で、五時攻撃の目的を以つて出発、開封北方に向ふ。途中幾線にもなつた陣地には敵影を見ず、開封城壁によつて抵抗し居るらしい。大隊は東北角附近に進み攻撃を準備す。朝より野砲、重砲の砲撃物凄いが、敵はなか／＼頑強だ。二連隊なぞ昨夜より城壁三百米近くまで接近し居るも、どうする事も出来ない。而し師団は八時半はく暮を利用して一整に突撃する事となり、大隊は東北角だ。三中隊は右第一線、自分の小隊は左第一線となり突撃だ。

夕方敵前五十米まで、樹木を利用して地形を偵察して来り、部下兵には背囊を下させて軽装させ、いよく覚悟をす。皆も悲そうな決意を以つて、二十時半砲兵の掩護射撃のもとに、弾丸飛雨の中を前進、工兵の鉄条網破壊と共に突撃す。幸これにおそれをなして敵は退却。二十一時頃大隊は、河南の都、大開封の東北角を占領せり。思ふ万歳の叫びだ。それより隊形を整へて、千米近く掃蕩し乍ら前進、河南大学にて夜を明す事となる。

六月六日

夜が明けた。流石大開封だ。一里に一里半近くの大城壁、中にはビルデング、公園、なんでもある。九時頃小隊をつれて街の中央を歩いて見たが、立派さにたゞ驚いた。内地の東京、大阪の様に比したらおとるが、而し支那風の建築は内地では見る事が出来な

い、たゞ驚いた。兵火の中よりすくはれた民衆は、安心そのものゝ如く、朝早速日章旗をこさへてかけ歩いて居る様も愉快だ。十四時頃の命令で、連隊はこの開封を準備する事となり、大隊は北方の警備だ。自分は部下小隊を以つて北門の警備を命ぜられ、その位置に就く。夜間となつても銃声はせず、平静であつた。

六月七日

どんより曇つた梅雨気味の天候だ。時々雨となる。宿舎の整備を行はず。警備する区域を巡視して、警戒の配備をきめる。

六月八日

八時半勤務員<sup>(以)</sup>意外の兵を集合させて、陣地を構築さす。午後は苦力を集めて陣地の補修す。天候は以然悪く時々霧雨がふつて来る。もう雨期となつたのだろうか。自分達が血を流して占領せる城壁其他の撮映をして歩く。

六月九日

午前陣地構築の作業を行ふ予定なりしも、都合で中止す。午後一部の兵をして陣地を作らしめる。巡察將校の為、武重、黒岩上等兵を引率して、城内南門附近にて見物をかねて行ふ。城外駅附近も相当の立派な街だ。中隊主力の運動場附近も又、公園なぞで静かな良い場所だつた。師団長閣下城門を巡察さる。

六月十日

午前、中隊の兵器検査を実施、小隊の手入は他小隊に比し良好だつた。午後二時より種痘を実施す。又雷雨気味の降雨となり、夜に入つて猛烈となる。

六月十一日

昨夜の雨も幸やんだ様だ。開封にて長らく駐屯の様な話だ。皆喜んで居る。別に何もないので勤務の合間には休養さす。

六月十二日

初年兵が来るので受領にこいとのことで、行つて見るも明日に延期さる。北門外に巡察下士官及駐止斥候を出す事となり、各中隊より<sup>(互)</sup>交<sup>(互)</sup>に小隊も複務する、との事を中隊長より申渡さる。

六月十三日

十一時頃中隊より初年兵四名をつれて来る。中隊へ十四名来たのみで、小隊へ四名だけだ。二、三、五、六各分隊へ配属す。

六月十四日

清沢三分隊長以下十名を巡察に出す。午後將校以下にチブスの接種を行ふ。正午より日直將校を服務す。鄭州附近にて敵の敗残兵が、黄河の堤防を破壊せるタル中<sup>(マ)</sup>牟<sup>(マ)</sup>は水浸となり、廿七旅団は引揚の模様なり。

六月十五日

午前宮田をつれて大隊警備区域を巡察す。暑くなつて来た。接種の為か、目まいがしてならなかつた。午後射撃競点会 R、北門西外兵営裏にて実施、向山辰雄 R の一番となる。

六月十六日

午後駐止斥候として河西軍曹を長とし、以下十五名を出す。午後の命令として、十五日黄河以北に向ひ移動予定との命令あり。開封に長らく駐屯との事で準備せる為、皆がっかりした。夕飯より

小隊炊事を実施す。

六月十七日

十一時よりR本部に於て慰霊祭を行ふ。師団長閣下、旅団長閣下  
来賓として来られ、各隊小隊長以上と下士兵代表者により、僧  
侶出の兵の読経により静しく<sup>(肅)</sup>に施行され、〇時頃終る。良郎君に  
会し、飯店にて井口上等兵と支那料理を食つて帰る。

六月十八日

四月十五日、光輝ある軍旗拝授の日だが、いろ／＼な事情でのび  
／＼となつて居り、本日十時より開封城内に於て行ふ。式典のみ  
燦として輝く軍旗を拝して、将士の目には光るものがあつた。<sup>(マ)</sup>りよ  
う／＼とひびく喇叭の音、出征以来あの軍旗のもとで護国の神と  
なつた戦友の事を思ひ、たゞ感激のそのものだつた。祝宴は後日  
となる。午後分隊長を引率して外出、支那料理を食つて城内を見  
学、帰る。附近に画家あり、入城紀念に一枚書いてもらふ。明日  
八時中隊は、迫撃砲の掩護で黄河以北に出発の事となり準備す。

六月十九日

一、二大隊は六時半出発、中隊も出発の予定なりしも、迫撃隊が  
水の為、中牟より来らず延期となり、本日は一日何もなし。

六月二十日

午前八時迫撃と共にいよ／＼開封に別れを告げて、新郷に向ひ前  
進す。黄河を渡る。あれ程の水の黄河が、今はわずか五十米位の  
川巾で、ひざ下位の水深、他は一面砂原だ。あの水が中支の平野  
に流れ出て居るのだ。可愛そうなのは民衆だ。午後になつて幾分

雨となつたが大した降もなく、五時頃封邱城に着く。三大隊本部  
が来て居た。

六月二十一日

七時半出発、雨は晴れてよい天候だ。行軍にはこたへる。行程は  
みじかいが本日は五里半、延津城にて一泊、明日出早朝出発、九  
里の行程を新郷に向ふ予定なり。こゝには十二中隊が警備に來た。

六月二十二日

五時出発、どんより曇つて微風あり、行軍日和だ。午前中に五里  
半を歩き、午後は新郷まで三里だ。足を引づつても皆元気で続行  
一里手前のR本部の泊つて居る部落にて宿営に決す。迫撃掩護の  
任務とかる

六月二十三日

本日より猛家営に行き、野砲隊の掩護に任ず。二時半出発、この  
前軍旗小隊として一泊せる村なり。夕方塩瀬へ行つて面会して來  
る。多忙の為、明日を約して帰る。

六月二十四日

午後皆に外出を許可す。四時頃自分も新郷に出て、塩瀬にて種々  
饗宴にあずかり、夕方帰宅す。部隊の人変りで非常な賑ひだつた。  
夜の命令で、猛家営宿営の十五連隊の大行李兵一名、真症コレラ  
と決定、明日より交通を遮断して外出を禁ず。

六月二十五日

いよ／＼暑くなつて來た。土用の様だ。宿舍内では暑く、外にね  
て居る兵もある。午後新郷へ出て、現像、焼付を依頼せる写真を

取りに行つて見ると、不出きの為他の写真屋に依頼して来る。明日十三時列車にて清化鎮に出発と決す。

六月二十六日

十時三十分宿营地出発。新郷駅にて昼飯をすまして上車、一時四十分頃清化鎮に出発、上車隊は旅団本部、三中隊、野砲一ヶ中隊、衛生隊の一部で六時半着。城内外は百八師団其他の部隊で一ぱいとなり、九時頃一応南門外部落に宿営に決す。暑くて早くねむれず、体はだるくて仕方ない。こゝは飛行場なり。

六月二十六日

給油の為飛行機の着陸あり。封門口附近の百八師団の協力にて出発せり。

六月二十七日

本日も清化鎮南門外に宿営、中隊は城内に宿舎を見付に行く。猛烈な暑さで、夜は十二時前はねる事が出来ない。

六月二十八日

午前各小隊長と旅団本部附近に宿舎を見付に行き、それぞれ決定午後部隊を配宿す。城外と代り風なく、かん／＼照りつける夏の日に苦しい位だ。

六月二十九日

久方ぶりで城内の入浴に入る。旅団長閣下新郷より来られる為、本部前に土嚢を築き歩哨の位置を定む。連隊長も焦作より来られ、中隊の宿舎を巡視さる。

六月三十日

天候は以然続いてなか／＼暑い。中隊の警備区域決定、小隊は旅団の直轄指揮下となり、衛兵を担任す。行動間に撮せし写真出来て来る。

七月一日

昭和十三年も半年終つた。七月となれば、内地とても暑い盛んだ。<sup>(マ)</sup>今行動中の百八師団が思いやられる。今度任官せる佐藤伍長が、二分隊長として小隊に配備となる。

七月二日

夕方中隊長は中隊より一ヶ小隊編成、宮坂少尉一中隊より二個小隊を以つて、焦作東北方に討伐に行く。

七月三日

三大隊本部にて坂田大尉に、軍旗祭の打合せを行ふにつき来との<sup>(い脱)</sup>事で、隊長不在のため代理で出席す。午後中隊長帰る。

七月四日

軍旗祭の祝宴を行ふ予定なるも、<sup>(井関隆昌)</sup>新師団長閣下来清につき中止す。

午後四時閣下到着。旅団本部にて伺候式を行ふ。終りて自分は閣下宿舎の衛兵長ノため、半小隊をもつて警備に行く。<sup>(迫力)</sup>清源より恒曲方向に前進せる百八師団は苦戦との事で、十五連隊にあの方向に前進の命下る。

七月五日

八時閣下宿を出られ、九時発で新郷に歸られた。自分は任務終り宿舎に歸る。昨日より幾分風邪の気味で、のどがいたむ。

七月六日

軍通信隊の掩護として小隊より半数、二小隊より半分を出して、自分が指揮し晋州方行山のふもとまで、更に懷慶まで補修の掩護す。午後二時半頃帰る。頭痛していよ／＼風邪となる。而し大した事もなさそうだ。

七月七日

頭痛も大した事なく、たゞ幾分気分が悪い。午前中手紙を書く。

七月八日

雲勝のむしあつい天候だ。本日は午前吉岡少尉の本にて遊び、昼飯を食って帰る。R本部が清化鎮に来るとの事だ。修武の一大隊本部も来る。夕方久しぶりで夕立あり。

七月九日

三中队主力は、自動車掩護として沁陽、済源方面に行く。小隊より二ヶ分隊を出す。自分に残りて中隊の取しまりす。済源は未だ敵居り、十五連隊が入らぬとの事で、掩護隊は沁陽まで二回運んだのみだった。

七月十日

清化鎮城外部落にもコレラ発生との事で、各隊増々防工きにつとむ。明日又中隊は済源への自動車の掩護との命令夜おそくあり、準備す。

七月十一日

昨日掩護の二、四中隊帰りてより、行く予定なしも午前中(り脱)に來らず、中隊隊の本日の行くは中止となる。昨日よりの暑さは非常に猛烈だ。なか／＼ねむれない。

七月十二日

本日も自動車の掩護なし。種々なデマが飛び、一大隊が済源へ行くかも知らずとの事で、自分も私物をまとめて準備す。

七月十三日

四中隊が済源に行き、三大隊の指揮下となり、同地の警備にあたる事となる。夜になり、明日兵站自動車で済源へ行く事になる。

七月十四日

八時中队は自動車隊掩護で済源へ向ふ。沁陽より漸次道路悪くなり、済源見へて居て三、四時(簡脱)をついやし、九時過ぎ漸く済源へ着く。思出の済源、幾回も彼我軍の駐屯により、荒れはてゝ見るかげなし。全くの死の街であった。土民は一名も居らない程だった。

七月十五日

七時半済源出発帰路に着く。沁陽、済源間には三個所に警備隊居り、幸敵撃を受ける事なく、午後二時頃清化鎮に帰る。夕方より胃の具合悪いが、痛みをおぼゆるも大した事なし。岩下軍曹、竹内、宮下政元、渋谷の四名北京より退院、小隊に復帰せり。

七月十六日

腹痛はなきも猛烈な下痢あり。而し大した心配もいらぬと思ふ。どんより曇った梅雨気味の悪天候だ。

七月十七日

下痢の為休んで居る。友一君が遊びに来る。

七月十八日

別にこれといふ仕事もなし。どんよりくもった悪天候で、内地の



梅雨気味だ。午後七時より清化鎮公署に於て、旅団長閣下今度交代せらるに付き送別会を実施す。下痢なるも出席、何も食はず飲まずで午後十一時頃帰る。

七月十九日

昨夜は相当腹の具合悪く、よくぬる事が出来なかつた。下痢も猛烈だ。今までこんなにやんだ事がない。絶食して休む。朝R長焦作に帰られ、東門外に送る。

七月二十日

猛烈な下痢の為休養。本日工兵隊の掩護で、一小隊を引率して行く事となつて居るも、病氣の為宮坂少尉に依頼す。夕方は幾分よい様に思ふ。博愛、心陽門、心河の橋は、毎日の猛烈な夕立の為流失したとの事だ。こゝ二、三の夕立は猛烈だ。山に樹木ない支那の事で、すぐ増水するから無理ない事だ。

七月二十一日

七月もはや二十一日だ。今月は非常に早い様な気がする。腹の具合も幾分よいかと思ふ。入浴をして腹をあたくめる。体は依然だるくて仕方ない。本日も昨日同様工兵の掩護隊を加藤軍曹以下十一名出す。今日は雨なし。七月上旬の様な暑さはなくなり、内地の梅雨の様な天候と思ふ。

七月二十二日

天候は依然悪し。腹の具合も大変よくなり下痢もなつた様だ。

七月二十三日

明日大隊は、修武方面に移動するに付き準備す。午後七時より、

大隊の会食を商務会に於て行ふ。旅団副官の前大隊長殿も臨席され盛大なり。第四中隊も清源より帰る。非常な大夕立あり。

七月二十四日

出発は延期となる。心河付近の架橋が、毎日の雨で思ふ様に行かぬとの事だ。十一時急の命令で、中隊より一ヶ小隊を編成、指揮して有線の掩護となり、自動車にて懷慶に向ふ。六時帰る。

七月二十五日

本日新旅団長森村閣下着任の予定なるも、都合で延期となる。宮坂少尉は旅団の命で、石家荘に行く。

七月二十六日

大隊は季河へ移動に就き、準備して設営者を二名第二中隊と共に出す。天気は以然梅雨の気味にて、時々雨をまじへる。午後巡察将校にで、夜間兵の外出の有無を取締る。

七月二十七日

七時半大隊は季河に向ひ前進す。どんより曇つたむしあつい日だ。長い間の駐屯の為か、焦作へ着く頃は落伍者も大変あり、自分も下痢の為大変つかれたが頑張る。季河の手前で夕立来るもまもなくやんだ。これが為冷しくなり、皆元氣となり、三時頃英国経営の炭坑季河着。至る所石炭の山だ。話では三十万頓も掘出しあり、一頓一円との事だ。

七月二十八日

八時頃酒井前旅団長閣下新任地に向れるにつき、駅通過見送りに集合す。装甲列車にて来着、下車、十分の休憩をされて出発され

た。家よりの夏物の小包着、妹の件を聞いて驚いた。小隊は今度mg一ヶ小隊と待王鎮に行き警備する事となり、列車にて二時半発車、待王に至り、五中隊と交代す。

七月二十九日

朝五中隊と勤務の交代を行ひ、配営して警備に就く。昨日修武の東方にて鉄橋爆破され、本日は又待王の東方二千米の地点にて鉄橋を爆破さる。列車は昨日より不通、勤務交代せる五中隊は、駅にて露営との事だ。いよゝ梅雨気味、天候もあがつたか本日は快晴となり、夏らしい暑さとなった。

七月三十日

本日も途中の鉄道爆破された為、列車が通らない。毎日の爆破に警備のて薄すを物語る。

七月三十一日

列車が通つた為、岩下班長等糧秣をもつて午後小隊に帰る。入浴は毎日二円五十銭で、支那人に入浴場あり、依頼してある。

八月一日

いよゝ八月となった。梅雨気味の天候もあがつて、いよゝ快晴続きの夏らしい天候となった。自分はこれと言ふ仕事もなく、責任は重いが身体は楽だ。夕方二千米西方へ出す駐止斥候へ巡察して見る。

八月二日

毎日同じ様な日を過す。駅警備の五九連隊の小隊にて、修武よりピーをつれて来り、mgの隣へ入れ許可す。本日も列車の運行は、

順に行かなかつた様だ。

八月三日

以然快晴が続く。淋しい独立の警備もなれたら静かで非常によい。汽車の音のみがなによりの楽だ。

八月四日

別に変つた事とてなく、毎日の日課の入浴、昼寝だ。岩下軍曹を中隊へ連絡にやる。

八月五日

有刺鉄線来たので、午前障害物の補修をやる。mgの馬にて乗馬の練習をやる。始めての馬だ。なかゝ思ふ様に行かぬ。而し運動の為になかゝ良い。

八月六日

七夕祭だなぞとだれかが言つて居る。早いものだ。八月に入つた為か、夜間なぞ幾分涼しくなつた様に思ふ。この附近は夜間も平穏だが、砲声は毎日の様にどこかできこへて来る。向山を中隊へ連絡にやる。又移動の様な話をもつて来る。温泉、猛獣附近より、二十五万の敵が北上して居るとの事だ。大した事もないだろう。而し勤務員に特に警戒をげんにする様申渡す。

八月七日

別に何もなし。暑さは幾分うすらいだ様な気がする。故郷をはなれて幾百里、而し気候はやはり大した異なる様にも思へない。一天の雲なき快晴日、木にはせみが鳴いて居る。ぼんやり眠つて居ると、家に居る様な気持となる。

八月八日

駅警備の五九連隊の軍旗祭にて招待され、mgの雨宮班長とよばれて行く。それ前中隊より隊長来る予定なりしが、都合で宮坂少尉小隊へ来り、十時頃帰ったので駅へよばれたのに間に合った。野戦とは言へ、それぞれの余興あり愉快だった。午後三時帰る。後駅の小隊長と待王館にて祝の二次会で、夕方まで日をすこす。近中日に隊は移動との話もあるが、真偽は判明せず、準備おこたりにく完了して置く。

八月九日

加藤軍曹は大隊へ連絡にやる。移動はおよそ十四、五日頃となる(の脱)ではないかとの話である。

八月十日

三時半麻雀をやつて遊んで居ると、突如南門外方行より敵の銃声せり。直に全員起床を命じ警戒に任ず。あちらこちら、季河、焦作方面でも銃砲声盛なり。全線的に敵の襲撃らしい。幸少しのチツコ小銃の音したのみで、まもなく夜明けとなる。

八月十一日

朝飯はぬきにして一ねむり、目がさめたら昼だった。午後八時頃佐藤伍長、渋谷、島田の三名東閉鎖に行くと、拳銃を射つたる便衣隊二十名近く居り、発砲され直救援に行き幸無事だった。夜間は敵襲を覚悟をして居ると、一時頃西門外で銃声、皆起床、警備に就く。大した事もなく、西方千五百地点の鉄橋破壊さる。

八月十二日

出発近くではあるが、本日午後は鉄条網を道路上に構じて敵襲にそなふ。最近又暑さ烈しくなり、行動が思いやられる。

八月十三日

昨夜は幸無事平穩なり。昨夕中隊より山口軍曹俸給を持参す。午後普通列車不通の為、装甲列車にて中隊長殿巡視に來待す。直に歸られた。開封攻撃の感状を連隊でもらひ、其の祝の支給品を渡さる。今晚より内地の盆だ。分隊では戦死者の霊を祭り、心ばかりの(黙)もく禱をす。

八月十四日

十六日大隊は出発との命令あり、細部は不明。大隊本部經理室よりコレラ発生との事なり。最近の暑さは又特に烈しく、行動が思いやられる。

八月十五日

思い起す一年前、感激深きあの動員下令の日だ。あわたしくあちらこちらと、準備でとんで歩いたあの日の事が、まぎ／＼と頭に浮んで来る。起床同時に行李をまとめて出発準備、多忙だ。大隊は明日午後六時出発の予定なりしところ、明朝五時半と決定電話あり。小隊は本夕大隊へ帰るべく準備す。装甲車にて中隊へかへる。

八月十六日

宮坂少尉の室にて一泊。五時半大隊は先ず焦作に向ひ前進、一休もせず七時頃到着。朝飯後中隊は左側衛となり、本道南方部落をぬぐつて清化鎮に向ふ。途中二、三十名の敵が、前方を横ぎつて

南方へ移動せるのみにて、其他異状なく○時半頃清化鎮に着。相当暑く、行軍に落伍せるもの若干あるも、はげまして全部無事なり。宿舎は前の中隊の居った位置へ、小隊は指揮班の前へ宿営す。清化鎮へもこないと思つたが又来た。

八月十七日

七時半大隊は前玉となり、先ず心陽に向ふ。小隊は砲兵掩護で後尾続行、敵の抵抗を受ける事なく、○時懷慶着。快晴とは言れないがむしあつい日だ。二時間近くの休憩後、心陽南門外に宿営。家とてなく、青天井の下で星を眺めて一夜の夢だ。昨年の本日は感激の入営の日、すっかりわすれて居た。過去一年のふりかへつて感慨深きものがある。夜間蚊にせめられて眠られず。

八月十八日

蚊にせめられてうつら／＼として眼がさめた。暑き事、支那家屋の特殊の臭で實際平口す。昼間今度は蠅にせめられて眠られず、困惑す。

八月十九日

団体長会議一日おくれ、本日R長、旅団長心陽着。小隊の加藤、高寺、下向の三名も来る。昨夕より将校行李からかやをもつて来たので、蚊にせめられるだけはたすかった。而しむさ苦しい臭と暖の為困る。連隊長が巡視さるも、警備情況を見たのみ、宿舎の巡視はせず。

八月二十日

八時半より懷慶東北角上にて准尉以上の集合、事変一年目に御下

賜せられし御勅諭の朗読、感状の伝達、其他R長の訓示あり。一小隊が前方部落へ警備の為出たため、三小隊もどうやら各分隊宿舎を決定、二、三日なりとも警備の体型となる。こんなきたない部落に宿泊した事ない位の不良な所なり。明日二、三大隊が行動を起すとの事だ。

八月二十一日

二、三大隊の温泉方行への前進の音で眼がさめた。まだ暗い朝の冷しさは又格別だ。八月も下旬だ、やはり初秋の感じがする。入浴ありとの事で、城内に入つて見るもなかった。別に仕事もない。昼ねより他なし。午後麻雀をやる。平凡なる一日がくれた。

八月二十二日

本日は入浴しようと、城内第一浴場にて幾日ぶりがよい気分となる。久しぶりにて支那料理にありついて帰る。開封の様な立派なものとなないが、油気がかけて居ては仕方ない。午後は別にない。

八月二十三日

連隊長が感状を授与され其の授与式、○時軍装にて城内広場に集合。本日は又特に暑い。一時間もかん／＼てりつける中にて立つて居る事のつらい事、ぼつ／＼倒れるものも出て来る様だった。式終つて帰つた時は、實際疲労を感じた。今度の感状は連隊としてもらつたもので、山西作戦終るまでの行動であつた。

八月二十四日

別になすことゝてない。昼近くなりて、岩下、加藤、井口と城内

支那料理店にて昼飯をやる。この二、三日来の暑さは実に猛烈だ。ねても起きてまた汗がだく／＼と流れ出る。行動して居る部隊が思いやられる。

八月二十五日

暑さは依然たり。日蔭にて涼みながらも、昨年今日この頃を思い出す。動員完結、いつにても支那大陸への準備全きを期して、腕をさすて居た当時だ。もう一年、長い様な早いものだ。午後命令あり、二十七日一時以降いつにても出発出来得る様準備の事。十八時より城内心陽食堂にて、准尉以上の連隊長の送別会を行ふ。過去一年の我隊長、いよ／＼別れるとなると淋しさがこみあげて来る。城内を中隊長と散歩して帰る。十二時頃になりて、突如南門附近より敵襲あり、チツコ二銃位もつ少数の敵らしい。

八月二十六日

出発準備全きを期す。九時頃城内理髪店にて理髪つを実施。新入隊兵が来るのでとり急ぎ帰る。中隊へ八名の兵、小隊へ二名三分隊、五分隊、昨年或は今年五月頃心召となつた補充兵なり。明朝早く出発となる。命令なし。

八月二十七日

眼がさめて見ると、久方ぶりで涼しい西風が吹き込んで居る。寒さを感じる位だ。秋の感を一増思させる。夜ともなればコウロギが良い音で歌ふ。十時頃か、雷雨と共に幾分の夕立あり、一増涼しい。夕方となつても未だ出発の命なし。五時。六時になつて、本夜九時半大隊は先ず三大隊宿营地三里南方、崇義鎮に向ふに決

す。中隊は尖兵、小隊は尖兵小隊として出発、約一里半南方にて不の敵の射撃を受く。十六時出発の工兵連隊が激戦中だった。これを駆ちく、二十八日五時頃漸く三里の崇義鎮着、大休止となる。

八月二十八日

九時中隊はR本部と前工本隊となり、猛県道をそれて西方に向ひ前進、約一里進むと小流あり。昼飯の後、中隊は独立にて又一里西方、若干の高地の一部落にて警戒にあたる。猛県まで二里位なり。木蔭の涼しい場にて、昨夜の不眠をとりかへすべく若干の睡眠をとる。秋らしい涼風で、ね心地良し。夕方なりても連隊より別に命令なく、この部落に露営に決し、分宿す。

八月二十九日

午前二時半R本部より連絡あり、東部の位置に帰る。まだ夜明けまで時間あり、木の下にてかりねの夢をむす。夜明けてより十時後は、いつにても出発準備し置く事の命あるも、急に変更、恒曲作戦延期せられ、当分の間各隊は現在地にて警備すべしの命となり、各宿舎を決定、準備完了、一休。

まもなく又急の命にて、中隊は大隊長と猛県へ行く事となり、直に出発す。猛県にては夕方、明朝五時後は出発準備し置くべしの命あり、宿舎はかたんにして休養す。昨年(原)の本日、懐しの現隊の後に、歓呼を浴て征途についた日だ。当時が頭に浮んで来る。

八月三十日

午前五時半小隊は、尖兵小隊として北方谷匡に向ひ前進す。それよりR本部の右側隊となり崇義鎮に向ひ前進、途中本隊方面より

退却の敗残兵と二、三回衝突、これを駆逐す。途中にて命令変更となり、崇義鎮東方の敵の本拠を攻撃すべく続いて前進。十五時頃本隊と合す。三大隊は前面の敵を攻撃中。大隊は夕方まで休養、崇義鎮に帰る。つらひ行動中でも皆は、昨年の今日、大阪での歓待を思い出して、せめてあの時の一品でも今こゝにあればなと、ため息をついて居る。

八月三十一日

遠山連隊長と御別の日だ。中隊はこれを懷慶まで送って行く事となり、八時半崇義鎮北門に整列、其他の各隊も御見送りしていき、出発、心陽一里手前にて、折から南進中の重砲隊と共に新連隊長御出となり、共<sup>(伴)</sup>なつて又心陽へもどられ、午後三時出発の予定なり。加藤軍曹、高寺嘉与一郎、宮下政元、島田等、向山辰雄、松尾忠勇、中沢三喜雄、安藤辰雄は、他小隊の兵と合計十六名にて、前連隊長の護衛として天津まで行く事となり残置す。三時出発、新連隊長と共に崇義鎮に向ふ。帰りは馬があいて居たので乗馬で来る。楽だった。本日は曇って居り、而も風ありて秋らしい、行軍日和なり。

【第三冊】

昭和拾参年

九月一日

昨夜より霧雨がしとくとふり出し、涼しくなり心地良し。新連隊長殿の命謀布達式、八時半より行はれる予定なるも、雨のため

め午後に延期となり、それも以然ふり続いて居る為中止となる。将校の伺候式のみ、五時より崇義鎮城内本部にて行はる。雨はふり続く。長らくの眠れ不足で、実に良くねむる事が出来た。明日又温泉方面の敵掃蕩、出発準備をなし置く。

九月二日

夜となつてもしとくと雨ふりだ。明日の出発を気づかひ乍らねむり、五時半出発。幸雨はやんで居るが、雲低くどんよりとした悪天気だ。南門を出発、路上の悪い事支那特有だ。其の上又雨となり一増悪い。而し一同元氣。午後には崇義鎮東南方二里、呉橋附近の少数の敵を撃破、工兵隊の架橋によつて小流を渡り、直少数の敵を掃蕩。夜十二時近く漸く敵の根拠地、招賢集西方の部落に達し露宮、明弘曉攻撃の準備をなし休む。本日呉橋附近の戦闘で、一中隊長青木中尉殿戦死をされ、誠に御氣毒だった。

九月三日

いよゝ五時半大隊は攻撃の為出発。暗を利用して搜敵するも敵の居る模様なく、昨夜中に退却せるものゝ如し。かくして七時半頃、難なく招賢集を占領せり。敵は東方及南方に退却せる模様なり。温泉まではこゝより三里位と思れる。本日はこゝにて休養の事となり、西門付近に宿舎をとりて休む。十四時小隊は、昭小隊、工兵小隊と共に西北方一里、小流の線に行き、砲兵の渡河をくひとめて居る敵を駆逐せよとの命に接し、直に軽装にて出発、同部落に至るも敵なく、架橋は終るところだったので直に帰る。

九月四日

九時までに出發準備完了との事が、情況により変更となり、十三時三十分部隊は招賢集北方二里、黄庄附近に散つて居る敵を掃蕩の目的で出發、約一里前進せると早くも敵と衝突、これを攻撃し乍ら次から次と部落を占領し乍ら前進、黄庄部落に抵抗せる敵を野重、野砲の猛烈な掩護射撃のもとに攻撃前進。この猛烈な火砲のため敵は早くも退却、なんなく夕方七時頃黄庄を占領せり。小隊は黄庄南の小部落に略小隊と警備に就く。

#### 九月五日及六日 戦闘

十時出發の予定なりしも、十五時と変更となりゆつくり休養す。温県城を豊島支隊と明弘曉攻撃をする目的をもつて、大隊は小田討伐隊となり、温県東北方にむかつて先ず前進、温県西北方後張庄附近で先ず敵と遭遇、これを驅逐。四中隊長久保中尉殿は心蔵貫通で名譽の戦死をとげられた。更に東方西林肇には直有力な敵あり、中隊はこれを攻撃、小隊は右一線となり前進するも、非常な頑強な抵抗ぶりで本討伐中最初のものなり。最後に突撃喇叭と共に突撃を行ひ、漸く一部を占領す。直残敵在り、掃蕩し乍ら前進、夕暗せまる頃R本部も来り完全に占拠す。

小隊は岩下軍曹負傷せり。中隊で四名の負傷ありたるのみで幸だった。速射砲隊長笠原中尉は頭部貫通で名譽の戦死をされた。部隊は先ずこゝで集結、朝飯を準備して目的地に前進する事となり、十二時頃出發。小隊は尖兵小隊となり、敵と衝突を覚悟して前進するも、幸何の抵抗もなく夜明頃目的地南張差に到着、敵の約六十名が眠つて居るを捕へたるは愉快だった。全部刺殺す。

昨夜より霧雨でうすら寒い日だが、行動は楽だ。一睡もせずいよ／＼温県攻撃。包囲体形で攻撃せるも、いずこに退却せるものか敵姿なく、二連隊は早くこれを占領、連隊も何の抵抗を受ける事なく、六日十三時頃温県東南角に入城す。かくして一休の後城内に露営に決し、十六時頃宿舎に入り先ず休養す。

#### 九月七日

本日は出發ともならずゆつくり睡眠をとつた。夜が明けて見ると、秋雨がし／＼とふつて寒さを感じる。寝心地は誠に良く、一日すつかりねむつた。急に寒くなつた為か、兵には風邪、高熱を出すもの多し。恒曲方面へ又作戦のうわさがあるが、信疑不明なり。

#### 九月八日

七時大隊は前衛となりて懷慶に前進する事となる。雨は未だふりやまず、霧雨だ。敵と遭遇を覚悟して前進するもそれさへなく、あれ程の敵はいずこに逃げたものやら。たゞ悪路の為非常な困難を感ず。疲労も又はなはだし。十四時頃には懷慶南方三千位のところまで来るも、附近は湿地帯の為前進不可能。二里近くも廻り、十八時頃東門外の大隊の宿営地に至る。三大隊は城内なり。大隊宿営地附近は支那民の病人も多く、各衛生に特に注意さす。

#### 九月九日

疲れもすつかりとれて朝の冷い風で目がさめた。本日は入浴をと城内に行く。不潔な入浴場だが、入つて水を浴びた気持のよさ。友一君に会つて信次君の応召を知る。手紙、小包も渡された。い

つもの様に皆大喜だ。大阪岩田氏より又小包を送られ恐縮す。新町よりの小包も入手せり。それぞれ礼状を書く。青木文男氏の負傷は片目は駄目らしいと、父よりの便りに在り驚いた。

九月十日

入浴せようとして行つて見るも、きたなくてぬるく入る気にならず。兄弟写真屋に現像を依頼す。中隊長と共に、野戦病院に先頃の負傷者を見舞、皆元気だ。小隊の岩下軍曹も元気で安心す。快晴だ。而しすこし前の暑さはどこへやら、日蔭は寒い位で秋の感一増深し。十八時より連隊将校団の宴会、城内心陽食堂で行ふ。連隊長着任の挨拶あり、篠原、大田、吉岡等も大いに語る。

九月十一日

城内にて入浴、理髪して帰る。加藤軍曹以下、小隊の前連隊長を送つて行きし兵帰隊す。昼飯時吉岡少尉のコレラで入院を聞き、我耳を疑ひ、大隊本部に行きたしかめ、真実を知り吃驚す。昨夜宴会より自分と一緒に元気に帰つたのに、一時頃より下痢、嘔吐を始め、今朝はもの言ふ元気なきまでやせたとの軍医の言だった。此の上は一日も早く全快を祈る。小隊各分隊長を集め注意 衛生のす。

九月十二日

明日いよ／＼ 渚源へ向つて前進に決し、それぞれ準備をする。十五時、分隊長以上に中隊長の学科あり。夕方大隊副官と横沢准尉と、師団司令部兵器部長岡島少佐の許へ行き、今度独立の警備の事に就て種々訓示あり。一中隊には其後もコレラ患者発生、中隊

も本日一小隊より本日発生の状態で、夜間急に大隊の検便をする事となる。mg一ヶ小隊を検便の結果、六名の保菌者ありたりとの事で、全員実施と決定せる模様なり。

九月十三日

六時半大隊は懷慶出發、途中十三里店に四中隊の一ヶ小隊とmg一部、柏肖鎮に四中隊主力、mg小隊、大隊砲と警備する事となり、苗店には自分の小隊とmg一分隊で警備する事となり、七中隊の小隊と午後警備を交代す。相当大きな部落のため四ヶ所に下土哨を配置、警戒をげんにす。本夜はこの部落に輜重兵中隊露営せり。

九月十四日

重要任務の警備第一夜も、変つた事なく平靜だった。早朝、露営輜重隊の後は部落民も居らない。この村は実に静かだ。午前抵抗戦を築つて敵襲に備へる。どんより曇つた憂鬱な日だ。淋しい秋風が音を立て、樹木をゆすり、独立の淋しさを一増思せる。

九月十五日

昨夜も静かだ。たゞ遠く南方孟県方行で盛に砲声がして居た。長距離砲をもつて対岸瀧海線を射つて居るのだらう。昨年今頃が頭に浮んで来る。宛平県城内に思出の一泊をして、いよ／＼ 保定への第一歩、前進開始の時と思れる。十時頃歩哨線の巡視を行ひ、星空の本で大陸夜の静さを犬の遠ほえで一増淋しく感じらる。

九月十六日

本日は好天かと思れた天候も、昼頃からは秋雨となり、皆の立てゝくれたかめ風呂に入り、良い気持となる。一昨日よりコレラの



症状をていした久保田忠美の、其後の経過良好で安心す。別に何も仕事がないので、麻雀をやつて時をすごす。懷慶よりの自動車の連絡も、本日は無い模様で、今だ何もなし 午後三時。

九月十七日

どうやら本日は好天気となると思れたが、又しとくと秋雨となつて来た。故郷でも今頃は、涼しい雨がよくふる時だ。そして一雨々々涼しくなる。今日は十七日、昨年の今日はどうだった。する事とて何もなく、日記帳を出して見て、泥濘の中を保定へくと前進、大石橋の戦も今日だったのだ、早一年だ。所も同じ北支の地で、當時を思出して無量の感にうたる。

九月十八日

夜幾時頃から、又しとくと淋しい音を立てゝ雨となつた様だ。憂鬱な天気はあきくした。秋晴れの天気はいつなるのだろう。それにしても大行山脈を越へて、恒曲へ行動開始して居る二、三大隊が思いやられる。糧秣も終る。済源の本隊より、今日いつは（か脱力）何らかの連絡がある事と思ふ。

九月十九日

秋晴れとまでは行かぬがどうやら天気回復、久しぶりで日の光を見た。部落民が出入して蝶法上（蝶報）思し（面白）くないので、その個所を鉄条網をはる。昼頃になつて、懷慶より自動車の連絡あり、病氣中の久保田を赤羽衛生兵をつけて、大隊に送り安心す。糧秣も終つたので、自動車隊より十日分の米、味噌其他副食物を受領す。路が悪い為、昨日心陽を出発の自動車隊は、昨夜柏肖鎮に一泊せし

との事である。恒曲へ行動の二、三大隊は、昨日出発せしとの事である。

九月二十日

懷慶へ毛布を取りに行く。大隊の大行李が二中隊一小隊と朝通過す。続いて自動車隊も帰つた。久保田を送つて済源へおもむいた赤羽看護兵帰る。富田も共に。久保田はやはりコレラとの事だった。昨日一中隊の兵の話によると、吉岡君其後の経過良好との事で安心す。夕方又夕立性の降雨ありたるも、大した事ない模様だ。

九月二十一日

昨夜はどうした事がよくねむられず、四時半頃だった、突如の銃声にすぐはね起きる。西方下土哨の様だ。全員武装させてよくたしかめると、西門下土哨所が十数名の敵に襲れたとの事だ。立哨中の高寺上等兵が早く背後の気配に気付く、誰何せると同時に手榴弾を敵は投げ発砲せり。腕に命中せる手榴弾は、幸運にも不発で無事なるを得、下土哨全員の危機を救つた事は何よりだった。北方西側の堤防より入つた模様で、本日は早速障害物をこさへる。午後毛布を取りに行きし大行李来り、酒保品、毛布も渡され、駒津福七帰る。金井寅繁を腕の負傷治療の為済源にやる。封書、小包若干来る。大阪の伯父よりカステラの上等、思がけなく何もない現在実によかつた。差出の伯父よりも便りある。今晚は昨年の事を思出すと、大冊河突撃、前進の夜だ。昨夜にそなへ（ママ）緊張して寝に就く。

九月二十二日

何事もなく夜が明けた。昨日有刺鉄線来たので、本日は先ず宿舍の裏一帯に鉄条網を張る。快晴とまでは行かぬが上天気となった。二十一日の襲撃があつてから、各下土哨は長以下五名で、夜間のみ複哨にて警戒を密にす。

九月二十三日

午前東方に対し鉄条網を張る。十時半頃突如、東方より下土哨に狙撃する敵あり、<sup>(擲弾)</sup>igてきだん筒をして射撃せしむ。午後二時半頃、東方二千米の地点で砲声せり。すると利村附近より南方に約二百名の敵退却するを見、射撃するまもなく自動車隊心陽より来り、これの砲声だった。三時半頃、済源の中隊より吉岡軍曹長にて二十名、今日銃声を聞いて連絡に来る。報告を中隊長に出す。入院せる久保田は病死せるとの事、出征以来の元氣者を亡ひ、誠に気の毒だ。

九月二十四日

昨日吉岡軍曹の話によると、恒曲出発の二、三大隊は、目下招源鎮に集結して居るとの事だ。山岳地を二〇師団が山西より、北方より百八師団が、恒曲へ掃蕩し乍ら前進して居るとの事だ。午前、西門下土哨附近の障害物を完全にす。附近のクリークで魚つりを始める。木綿針でこさへて魚つりだ。なか／＼良く引張が、針が悪いので思ふ様につれない。それでもつりの味は又別だ。四時頃までつりで終った。

九月二十五日

幾時頃からか又霧雨となつて、朝起きて見ると驚いた。こんな日

こそ炬燵がほしいなと思ふ寒さだ。今まで撮したフィルムを、購入せるフィルム入れに入れて午前は終りだ。日もみじかくなつた為か、何するでもなくて日の暮るのが早い。黒岩上等兵の炊事当番を阿部上等兵と代へる。午後魚つりをす。大雨もふらないが憂鬱な天候なり。

九月二十六日

以然として霧雨だが朝になつてやんだ。而雲<sup>(低)</sup>抵くたれてうつつしい天候だ。朝飯を食つて魚つりだ。皆と池をかこんでのつり又格別だ。相当多くつる事が出来た。午後もつりに出かけたが、午前の様に行かぬ。機関銃の馬で乗馬演習をやる。夕方となり又雨ふりとなつた。雲つた雨ふりの晩なぞの暗い事、一寸先も見へない程だ。今は丁度暗の時期だが、まもなく月夜となるだろう。

九月二十七日

やはり霧雨となりてうつつしい天気だ。別にする事もない。将棋でもやつて退屈をまぎらはす。この苗点へ来て十余日となつた行動中の二、三大隊は、この悪天候で相当苦痛を感じて居る事だろう。夕方乗馬演習をする。

九月廿八日

午後一時頃だった。連絡の自動車来り、済源守備隊に視察に行かれる旅団長閣下も同乗、下車されて状況を聞かれたので、最近の苗点附近の状況を報告す。直閣下より煙草、朝日大箱一個戴く。西沢連隊副官も前部隊長を無事送つて帰った。佐藤伍長をして済源へ糧秣を受領にやり、夕方自動車隊帰り、閣下も帰られた。家

へ手紙を出す。今日は二十八日、八幡社の祭礼など、故郷の事も思い出して一増懐しくなる。

九月二十九日

数日来の憂鬱な天気も回腹か、いよ／＼秋晴れの好天気となった。晴渡った大陸の秋、北方真近に見える大行山脈の岳、秋の感じは一増深く思れた。昨日清沢上等兵を長で、数名附近の部落へ鶏、豚なぞの徴発にやり、久方ぶりで肉にありついた。冷気の味の味も又格別だ。

九月三十日

今日は一分隊の沼をかへて魚捕へを見て半日終った。毎日こんな事でもして日を暮すより仕方ない。而し独立して一ヶ小隊での勤務は、責任も又重大だ。午後突然自動車連絡あり、安藤上等兵をして中隊に連絡にやる。酒保品も若干、日支酒、煙草、来る。石油も欠乏して来たので、中隊より分配してもらふ。手紙も若干来る。新聞なぞで見ると、漢口作戦部隊も大分進展したらしい。二、三大隊は、本日恒曲へ入城したそう。まもなく帰るだろう。晴雄君より便りをもらったので、自動車にたくして出す。

十月一日

午前、一、六分隊の魚捕へを見たりして平凡な毎日だ。昨年今日は、第二作戦として石家庄に向かつて、いよ／＼保定を出発した思出の日だ。これと言ふ仕事もないので故郷の事も思出す。秋晴れの好天気、小学校の運動会、幼き日の愉快な事が頭に浮んで来る。昨日の安藤上等兵の連絡で、本日温泉方面の友軍は引揚す

るので一増警戒を現充にす。(厳重)

十月二日

二、三日来すっかり秋晴れの好天となり、気候も暖くなった。新聞を見て漢口方行の友軍の行動も思いやられる。この頃は食欲も進む。天高く馬肥ゆるの秋だ。身体も幾分ふとった様だ。

十月三日

いつ手紙の連絡がつくやら知れないが、久しぶりで手紙を書いて見た。又本日も快晴、而も非常な暖さなり。附近には柿がたくさんあり、渋いのでなまぬるい湯で一昼夜位入れておくと甘くなる。故郷の美しい、味よい柿を思出して食ふが、なか／＼うまひ。銀翼を連ねた爆撃機が、十余機南西の空に消へて行った。

夕方この部落の支那人の言によると、東南方の部落に敵がlg二銃兵三、四十名来たとの報告あり。今晚は襲撃を覚悟して、障害物壕なぞを新に構築、寝に就く。

十月四日

うつら／＼としてよくねむられず、十二時少し過ぎた頃だったと思れる、突如の敵の銃声にぱつとはね起き準備す。下土哨よりの報告によると、南方の部落よりの敵の射撃だ。直に機関銃と小銃二ヶ分隊を以って、東南角堤防上に至り射撃す。敵は直に沈黙、敗退したらしく、犬の遠鳴きのみ。

西方にかたむきし十日位の月光物凄く、大陸の夜の静さは淋しい。一時間半位待期せるも其後異状なし。皆を宿舎に入れて仮眠さす。払曉又敵襲を予想せると、何もなくて夜が明け安心す。

十月五日

もうまもなく本隊より連絡のある時と思ふが、今だに何も通報もなし。恒曲のR主力の消息も不明だ。月日のたつのは実に早い、もう十月も五日となった。夜が長くなつた為でもあろう、昨夜も敵襲を覚悟するも異状なかった。

十月六日

本日は曇りとなり、又うすら寒い日だ。午後は若干の雨さへまじへて来るも、大した事もなし。午前木下軍曹以下十三名、西北方部落に徴発がてら斥候に行くと、一つむこう東馬頭部落より敵小銃の射撃を受けたり。被害なし。三十名位の敵だつたとの事だ。

十月七日

秋雨しとくとふつてうすら寒い日なり。何と言ふ仕事もなし。昨晩も敵襲をあるものと覚悟するも、異状なかった。

十月八日

昨夜は一時相当の豪雨ありたるも、朝となつてやんだ。而しどんより曇つた憂鬱な天候なり。昨夜南方下土哨へ二、三発の発砲を敵がせるとの事だつたが大事なかった。最近附近には敵が多くなつた様思れるが、大した襲撃ないのは幸だ。もうそろそろ、済源より連絡のある頃と思ふが、本日は何もなし。

十月九日

雨はどうもやみそうもない。しとくとふり続いていやな日だ。雑誌なぞによみふけて日を暮す。夜となつてしーんとした時、しとくとふる雨は一増淋しい。本日も連絡なし。

十月十日

又雨ふりだ。午後八時半頃、雨の中を大隊本部の伊藤軍曹が、二中隊の一小隊と糧秣三日分を持つて来る。中隊より梶伍長と井口が、連絡として小隊へ来る。今回自分達八月出征の少尉は、九月三十日付をもつて中尉に進級せるとの事だ。雨は夕方になつてもやまず、ふつたりやんだり。小田支隊は昨日恒曲<sup>(大)</sup>出發、明日済源着の予定との事だが、毎日のこの雨でどうたら、あの山地の行軍が思いやられる。

十月十一日

今日も一日雨ふりで終つた。小田支隊は本日済源に来たろうか、封門口附近の坂は上れるだろうか。而しよくふる雨だ。もう幾日も雨で入浴も出来ない。しけくする天気だからよいそう思ふが、露天のかめ風呂ではどうする事も出来ない。夜に入つても直ふりつゝいて居る。明日は天気としたいものだ、希望をもつて寝に就く。

十月十二日

一晚中ふり続いたが雨は未だやまない。昼頃となつて、北門下土哨所も水びたしとなり、居られなくなり宿舍の付近へ移動す。南も同じ。これといふ排水路のない支那の事だ。至る所水となつてしまつた。出發準備を完了させる。警備の我々は未だよいが、中支の戦友達は同じく雨でなやまされて居ないだろうか。水害となつて作戦に支障を来たしはしないかと、いろくな事が心配となる。幸夕方になつて雨もやんだ様だ。夜便所へ行つて見ると、久

しづりで月が見える。これでやっと天気となるかと思へば安心だ。

十月十三日

この大雨では本隊も来ないだろうと思ふが、出発準備だけは完備し置く。曇つては居るが漸次天候回復の模様だ。東門西方を廻つて見て驚いた。堤防四方の畑は一面の水となり、西方は特に甚大なり。これ位の雨だつたら内地なら異状はないが、平野の支那の事だ、涪源本隊もいつ来ることやら予想がつかない。幾日ぶりかで入浴、しけしけせる気持を一掃、気持がよい。友軍偵察機が西方に飛んで行つた。小田支隊本部の状況を偵察に行つたのだろう。夕方懷慶より、糧秣を道路を馬の背に積、師団輜重二ヶ中隊来る。人馬共に疲労其極に達し、あへぎ／＼漸く苗点に来るも、更に夕暗せまる頃涪源に向ふ。三日分の糧秣を交付さる。落伍者十三、四名小隊に宿る。

十月十四日

幸雨はふらないがはつきりしない天候だ。山地方面より漸次増水する為か、宿舎四囲は水を増し／＼あり、警備にはよい障害物となるもなか／＼不便なり。夕方輜重帰る。苗点にて露営せり。こゝより涪源まで二里なるに、今朝四時漸く集結終つたとの事で、なか／＼の困難な行軍だつたらしい。金井寅繁退院し来る。村松猪太郎君晩遊びに來り、久方ぶりである／＼と語つた。話によると、広東へ陸海軍部隊不意に上陸。香港、広東付近は大混乱との事だが、漢口の敵も大動搖の事と思ふ。家へ手紙を出す。小田支隊は未だ招源鎮に居り、天候の回復を待つて出発との事だ。した

がつて我々のこゝを引揚も、いつになるか予想がつかない。

十月十五日

八時輜重隊は懷慶に向ひ出発せり。東方三千米位の場所で銃声せり。若干の敵が居つたらしい。以然悪天候なり。

十月十六日

夜幾時頃だつたが、又々雨のし／＼とふる音がして、夜明と共に相当猛烈だ。又い／＼な不安が頭に浮んで来る。幸夜明となりて小降となるも、非常にうすら寒い日だ。炬燵をこさへてもらつてよい心地、いつしかねむつてしまつた。四囲の水は減水せり。これでふらないなら道路もよくなり、小田支隊も早く帰られると思ふが、どうもはし／＼しない天気なり。

十月十七日

半月ぶりか、からりと晴れた秋晴の好天気、昨日までの憂鬱な心もふつ／＼とんで皆明かだ、歌の音も聞へる。今日は僕の満二十六年の誕生日だ。そして神嘗祭だ。何か祝をやりたくてもこんなところだ、毎日同じく菜汁と飯だけ。心ばかりの祝だ。それにしても本隊はいつ来るだろう。糧秣も又終りとなつて来た。夕方には何か連絡あると思つて、心待に待つたがついに何もなし。一日快晴、日陰はなか／＼寒い位だ。これで当分天候も続くと思われる。

十月十八日

同様快晴なり。附近の水も大分減少して道路も良くなつた。昼頃になつてもどの方面からも連絡なし。い／＼米も携帯糧秣を使用する事となり、心ほそくなつた。風呂をたて、快晴、青天井

の下で入浴するも心地よい。夜明となればめつきり寒さを感じ。内地なら毎日霜を見る頃だもの。而し北支、この附近は暖のほうだと思ふ。夕方となつても連絡なし。明日に希望をいだいてねむる。

十月十九日

九時半頃になつても何の連絡もないので、心配のあまり西門下土哨に行き、済源方行を眼鏡で見ると、漸く部隊らしいものが見え安心す。これは中隊長が一部を指揮し、懷慶へ勤務の交代に行くので、小田支隊本部は今朝二時漸く済源へ到着との事で、今日中は主力の集結を終るらしい。

小隊は明後日引揚との事だ。糧秣三日分受領せり。東方部落では幾分敵が居るらしく、銃声せり。部隊通過後、敵の斥候苗点附近に來り、我々が引揚たかを偵察に來たらしい。

十月二十日

本日は二大隊と衛生隊輜重通過せり。本隊よりの通報あり、明日いよ／＼引揚と決定せり。いよ／＼天候も回復、秋晴の快晴なり。部隊通過後又敵の斥候出沒、射撃せり。特に今日のは積極的に出て來り、鉄兜をかぶつたなか／＼の敵らしく、夕方まで続き、本夜は相當な敵襲をと思ひ準備、緊張してねむる。

十月二十一日

四時半頃突如銃声あり。西北部部落よりらしく、すぐ起きて略に命じ射撃せしむ。大した事なくまもなくちんもく、又一眠りす。いよ／＼出発の日だ。準備完了してまつ程に、まもなく先頭部隊

の通過あり。連隊長殿も來られ、苗店部隊を出られる時、南方よりの銃声、自分は直に略を指揮して堤防に至らしむ。後方では砲兵の射撃あり、敵も敗退せるものゝ如し。

昼近くになりて大隊來り、思出多き四十日の長い警備地、苗店よさらばだ。それにしても此の敵の中で、よく完全にも任務を全うし得たものだ。重任をはたしていよ／＼帰る事となると、実にうれしい。二中隊は後衛尖兵だ。苗店より二千も來ると後方より敵の射撃だ。我々を退却とも思つて居るのだ。なか／＼しつこくついて來る。我々はたま／＼自動火器で猛射して、一路懷慶に前進だ。

苗店にはもう敵が入つて居るだろうと思ひ乍ら、柏肖鎮よりは敵もこなくなつた十三里店では、二中隊と略大隊砲が残つて守備する事となつた。こゝで日没となり、懷慶まで二里たらずだが、路は悪く暗くてなか／＼困難なり。十一時頃漸く北門に至り、中隊長の迎へを得て宿舎に入る。十二時過ぎ四十日振りでゆつくりとして寝に就く。

十月二十二日

午前進級の挨拶に大隊本部に行くと、コレラで入院せる吉岡中尉が退院して來て居たのには驚いた。二人で連隊長其他に挨拶す。(長野県)十四時より二大隊を除く部隊は、県代表の慰問使節として來られた、北村甚兵衛、塩川清兵衛、降旗徳弥三氏の慰問を、時計台後広場で受く。銃後の状況其他慰問の言を聞いた時、一同感激、益々任務の重大を感じず。

吉岡、篠原と三名で支那料理を食ひ、久しぶりで腹の虫もおさまった。三中隊は懷慶北西方二千、馬坡に行つて警備する事となり、直に出発の準備、夕飯をすまして出発す。こゝは一小隊が三日前より警備して居る所にして、北方心河に面し、警戒は相当楽な様に思れる。今晚はかり宿舎にて、明日各分隊を分宿させる予定なり。

十月二十三日

昨夜自分の宿つた支那家屋は、立派ではあるが病人があるので気持悪く、隣の家へ移る。一、二、五分隊をここに移し、だんく寒くもなるし、完全なる宿舎をこさへさす。中隊長と村の地形偵察を行ふ。

城内の通信隊の兵、午前此の部落にて支那婦人に暴行せり。小田部隊の不名誉なので、何とか事件を解決する法を取る。昨夜は十三里店の二中隊正面及一中隊方面の、大部隊の敵襲ありたとの事だった。負傷者なき模様なり。

十月二十四日

各分隊には宿舎の準備を完全にさす。兵には本日より冬服を支給となる。氣候としてはまだ一寸早い位と思れるも、時期は十月も終るのだ。特に夜間相当寒いのでよいと思ふ。

十月二十五日

幾日か入浴せず気持悪いので、城内へ入浴に行く。中隊長と共に隊長は中耳炎の診断のため、<sup>(マ)</sup>潔い湯なるも気もちよい。昨夜来雨模様となつて来たが、帰る頃はついにぽつ／＼やつて来たので、

だいそぎ宿舎に着くと大雨だ。夕立気味でまもなく晴れた。夕方、本日午後〇時半漢口陥落とのポスターが張れ、宣伝ではないかと思つたが、会報に出たので真実だ。それにしても早かつたものだ。待望の漢口陥落、宿舎では思はず万歳だ。<sup>(マ)</sup>さざめし母国もわきたつて居る事だろ。

十月二十六日

十時より城内旅団本部前に於て、吉田幹子嬢の慰問舞踊あり、中隊も半数の兵を残して行く。長らくの慰問ではあり、一時間ばかりで終つたが一同大喜びだった。柳沢竹美君に会つた。午後中隊の分隊以上集合、馬坡の地形、陣地偵察を行ひ、防御構築の準備をす。本日は武昌陥落との事だった。

十月二十七日

午前、清明村独立下士哨へ十数名をつれて行き、陣地構築、鉄条網をはつて警戒を密にする。入院中の川口寅之助北京より帰隊す。手紙を書く。夜間南方にて若干の銃砲声せり。

十月二十八日

第三下士哨附近に陣地構築をなす。秋晴れの好天気となり日中は暖なり。機関銃の高橋中尉退院す。故郷へ手紙を出す。晩に珍しく中隊長殿と麻雀をやつて、十二時頃まで遊ぶ。<sup>(に脱)</sup>別これといふ慰安とてないのでこれもよい。

十月二十九日

午後分隊でこさへてくれたかめ風呂に入る。苗店以来のかめ風呂も又新しく気持ちよい。

十月三十日

十時より連隊本部に於て、<sup>(ママ)</sup>最各作戦陣亡勇士の慰霊祭行ふにつけ、中隊長殿と下士官、兵若干をつれて参列す。篠原、吉岡と三人にて、漢口陥落の祝で三大隊酒保にて祝宴をす。篠原の宿舎にて話して帰り、野砲の荒井君のところ遊び、夕方帰る。

今日慰霊祭の勇士は百七柱なり。悪疫でなくなつたものも多数あつたのだ。二月十一日彰徳南方高地で重傷せる大沢麻夫伍長全快退院、帰隊す。

十月三十一日

午前、中隊長室にて、開封附近の戦闘の兵の功績に就て協議す。午後二時半大隊本部よりの命で、旅団長閣下に進級の挨拶をするとの事で、中隊の馬で至急かけつける。中隊の兵器検査を行ふ。

十一月一日

連隊の兵器検査なので朝より準備す。午後一時連隊長馬坂へ来られ、警備情況、宿舎を巡視さる。旅団長閣下も来り、巡視されたり。入院中の宮坂中尉帰隊す。

十一月二日

別にこれといふ仕方もなし。午後五時半まで大隊本部に集合、県公署に連隊長殿の招宴あり、中隊長、宮坂中尉と三名で出席す。七時半頃より会<sup>(開)</sup>会となり、旅団長閣下も御来席、盛会なり。十時頃、中隊の兵迎へに来てくれたので共に帰る。

十一月三日

十時より大隊本部にて明治節の拝賀式あり。自分は各小隊より一

ヶ小隊を編成して参列、直に帰る。外出を兵に許可す。午前、午後共に、城内には朝鮮女軍の余興あり。夕方自分は篠原中尉のこへ遊びに行く。吉岡も来る。

本日はやはり明治節な為か快晴だ。遙拝式をやつて遠く故郷の空を思ふ時、全国各学校で歌はるゝ、あじやの東日出る国の「聖天子、明治大帝の御聖徳が偲れ、国家非常の時一増の覚悟を必要とつくづく感ず。

十一月四日

大隊けいり室にて朝飯をやり、いろ／＼と私用をたし、城内の入浴をして、吉岡のもとにより昼頃帰る。

十一月五日

毎日の好天気で気持よい。これからが北支の雨量の少い時期となるのだ。漢口陥落してより、附近の敵も消極的となり、夜間はつとめて平穩なり。夕方中隊全員に御賜<sup>(恩)</sup>の煙草と御酒を賜ふ。

十一月六日

午前、中隊事務室に小隊長集合、これから若干の教練をやる事について打合せ、初年兵、補充兵の上等兵候補者を決定、教官宮坂中尉とし教育する事とす。部落東南方に運動場をこさへる。若干風邪の気味でのが具合悪し。

十一月七日

熱ばくて風邪の気味なるも寝て居る程でもなく、ぶら／＼して居るがなか／＼退屈なり。晩に大隊の伊藤軍曹遊びに来る。荒井班長と十一時近くまで遊ぶ。君の兄嫁に、自分の村の中島弘馬氏の



娘が嫁して行つたので、いろと語<sup>(脱)</sup>つてつい十二時近くになつてしまつた。

十一月八日

馬坡西方部落に、中隊の勤務者以外のものをもつて行軍を行ひ、地形偵察をなす。具合悪いも大した事もないので自分も参加す。午前十一時頃帰る。

十一月九日

各小隊よりの勤務者以外のものをもつて各個教練を行ふ。風邪の気味も大した事なし。午後六時より城内心陽食堂に於て、大隊准尉以上の会食あり。中隊長、宮坂中尉と参加す。

十一月十日

今日は演習もなく休養。いよゝ北支那の雨天無き時期となり、毎日快晴続きなり。風は幾分強くなつた様に思ふも、やはり内地よりは暖だ。

十一月十一日

午前体操及運動遊技を実施す。

十一月十二日

大隊の外出行となつて居るので兵の外出を許可、休養す。夜、討伐作戦の功績に就て、中隊長室で協議す。今朝は今年始めての降霜あり、相当の寒さなり。

十一月十三日

午前、分隊の村落攻撃の教練を実施。馬坡西方部落への攻撃を実施、十一時終る。今朝の霜も昨日より多く、いよゝ寒くなつて

来た。

十一月十四日

中隊長指揮の小隊教練、清明村に向つて自分が小隊長で行ふ。終つて若干の講評あつて十一時終る。

十一月十五日

本日は午前、吉岡中尉のもとに分隊長教育の件に就て聞きに行き、留守するため篠原のもとに行くといふ計画あり、借用す。大隊の伊藤軍曹、井口上等兵等三、四名と、心陽食堂にて支那料理を食ひ、連隊本部にて篠原獣医と西沢副官と加藤軍曹と話して、夕方帰る。

十一月十六日

二十一日実施の教育計画を作り、清明村に現地偵察す。

十一月十七日

九時より体操競技を実施す。

十一月十八日

九時半より、中隊長の大隊、中隊附将校の教育。堅固なる陣地に対する攻撃あり。旅団長閣下、連隊長、大隊長の參觀あり、小隊長は宮坂中尉。十一時半各隊長の講評ありて終る。実戦と異り、演習はなかゝむずかしい。味岡政雄君より慰問品を戴く。

十一月十九日

休日なり。最近幾分寒く冷い風が吹く様になつた。而し柳其他の木の葉はいまだついて居り、故郷より余程暖だ。中島政太氏、一久君より手紙を戴く。教育計画を大隊本部に提出す。

十一月二十日

久方ぶりで雨模様となったが快腹、快晴となる。夕方、明日の演習、仮設敵の動作の予行をす。

十一月二十一日

九時三十分より、清明村北方附近にて、大隊新任伍長の村落防衛の教育を行ふ。大隊長も来られ、講評の結果、未だ研究の余ちありとの事だった。吉岡君見学に来り、昼を食い、宮坂君と雑談す。

十一月二十二日

十時頃外出、吉岡のもとにて昼を食い、連隊副官西沢中尉のもとに行き、<sup>(更農卒を以て)</sup>更農卒業生の会を行ふに就て相談に行き、二、三時間打合せ雑談、帰り二大隊略若林光男君の許にてその事を依頼、帰る。

十一月二十三日

十五時より中隊の二類兵器検査を実施す。

十一月二十四日

大隊二類兵器検査、午前準備、午後準備終り、一時より大隊長殿来馬されて実施す。

十一月二十五日

明日大隊警備区域の討伐を行ふにつき、いろ／＼準備を行ふ。どんなより曇つて来り、雨が心配となる。

十一月二十六日

六時出発。中隊は尖兵となり、先ず西方に向ひ前進す。天候も回腹、なか／＼寒く身に浸みる。途中皇協軍に<sup>(の力)</sup>居る大きな部落で十三里店の部隊と合し、皇協軍二百名位も同行、南尋に向ふ。皇協軍の服装はいるとりどり、仮装行列の様だ。目的の南尋には敵な

し。こゝで軽装となつて、西北方一里の部らくに敵ありとの事でこれを攻撃すべく出発す。大した敵なく、それでも黄槍会匪若干居り、五、六十名の死体をのこして敗走せり。而しこれは銃は一発もつたず、部落自警団らしく思れた。気の毒の様に思ふ。同行せる皇協軍は後から来て、この部落の掠奪、放火をほしいまゝにし、昔の支那軍の本性を表し、実にあきれた行動だった。帰りに南尋にて露営す。寒くなつての始めての行動だ。久方ぶりで火をたいた。粟がらの中で寝に就く。

十一月二十七日

八時南尋出発。柏肖鎮の東南方一里附近に若干の敵居るとの情報に接し、先ず柏肖鎮を経て目的地に向ふも敵無し。更に次の部落北川村に若干居り、今退却中との事に、大隊は直に出発。中隊は独立で西南より攻撃する事となり、而し敵は居らない。少数の敵なので早くもにげたものらしい。三時頃より北川村に露営に決す。どんなより曇つて来たため暖で何よりだ。

十一月二十八日

大隊の討伐を知つたものが、附近には大した敵も居らぬらしく、大隊は八時出発、西南方心陽渠の各村を宇廻して、<sup>(マ)</sup>宗義鎮北方に宿営と決し出発するも、泥濘地多く思ふ通りの行動出来ず、宗義鎮にて昼飯、二千米北の部落にて露営す。この村より三千東北方小金郷村に敵居り、大隊は明弘曉攻撃に決す。

十一月二十九日

六時大隊は出発、南方より攻撃する事となり小金郷村南方に達す。

冷ひ風が吹いて来る。払曉を待つ事しばし、村よりは避難民が南へ避難して来る。我軍が伏して居るのでびつくりしたらしい。この村民に聞くと敵は逃げたらしい。いよ／＼払曉となった。攻撃体勢をとつて前進、やはり敵は居らず。小休止の後露営の部落に帰る。十一時出発懷慶に帰る事となる。四日ではあるが長い様な気がする。十五時頃一同無事馬坡へ帰る。入浴して四日間の汗を流してよい気持となつて居ると、小池久左衛門が大隊より航空便、家よりのものを持つて来た。封を切るまでは心配だった。何か家になつた事でもと。而し読んでみて又驚いた。僕が十一月十八日夕方、役場より家へ戦死したとの報だとか、実際あきれた。(東京朝日) 屋代支局よりの電話で、誤りだと知れたが未だ心配だ、着き次第便り出せとの事で、早速書いて出す。

十一月三十日

本日は休養をあたへる。家から来た手紙により、親類、近所へ便りを出す。

十二月一日

いよ／＼十二月となつて、国は相当な寒さと思れるが、こちらは暖だ。別になす事もないので手紙でも書く位だ。

十二月二日

各小隊の兵を集めて体操遊技を実施す。終りて小隊のみで野球を行ふ。秋晴れ的好天気、室にのみとじこもつて居るより余程愉快だ。腕がぬける程痛い投げ続ける。

十二月三日

将校以上の特殊発煙弾の教育あり。中隊長、宮坂中尉と参加す。曇つてうすら寒い日だ。素原中尉の話にて旅団長閣下も参加さる。終りて吉岡、篠原、宮坂各中尉と、三大隊長と五名にて三大隊酒保で昼飯をとる。

十二月四日

別にこれといふ仕事もない。相変らずの快晴、手紙など書いていと冬の日だ、すぐ暮れる。中旬頃に又移動の話がある。別に作(マ)あるのではないが、警備の上に変更あるものと思ふ。

十二月五日

寒気なか／＼烈しく薄氷がはつた。十時より体操を実施、心河堤防上のかげ足なぞして体の運動を行ふ。野球も行ふ。久しぶりの野球だ、なか／＼好きな道となれば面白い。時間のたつのもわすれてやる。

十二月六日

午前野球を実施す。一、三、五分隊対二、四、六分隊だ。なか／＼對抗となると又面白味がある。外出者に外出を許可す。父より手紙を入手す。

十二月六日(マ)

すっかり毎晩おそくまで起きて居るので疲れ、十時過ぎまでねむつてしまった。午後又野球を行ふ。風がなか／＼つめたい。曇りとなつたと思ふと、夕方には又快晴になつてしまふ。昨日より二大隊は東方へ討伐に行つて居る。そのためか東の方で盛んに銃砲声がる。

十二月七日

昨夕はおそくまで起きて居たためねぼうしてしまった。十時近く起床、別に何も無い。月日のたつのはなか／＼早い。日がみじかくなつて来たので、特にそんな様へ感ず。

十二月八日

特殊発煙彈の教育あり、中隊より河西軍曹以下十名参加す。昨日より河西軍曹を中隊指揮班にやり、県軍曹を代りに四分隊長に迎へ、佐藤四分隊長を五分隊長に代へる。一年有余五分隊長として動いてくれた河西を他に移すはおいしいが、君将来のためにはよいと思ふ。午後中隊長と特殊発煙彈の實際に行ふを見学に行く。南門外にて行ふ。防毒面をかぶり、ガスの中に入つて見るも何の異状もなかつた。

十二月九日

大隊長指導の将校教育、朝から東風強く珍しい寒い日だ。北門附近に集合、旅団長閣下、連隊長も来られ、小隊の部落攻撃。講評時の寒さ、手がはにかんで何とも仕方ない。一時近く終り、帰つての入浴又格別だ。ついに夕方となつて、二、三雪が舞つて来た。大した事もなさそうだ。

十二月十日

夜明頃になつて寒さを感じと思つたら雪ふりだ。積るといふ程でもないが地上は真白だ。初雪やはり寒い。而しまもなくやんだ。内地の寒さを思い出す。

十二月十一日

昨日の雪も消へたがなんだかうすら寒い日だ。心河堤防上に至り、河風の吹くところで体操を実施す。懷慶城附近より砲兵の射撃演習が行れ、物凄いい砲彈がうなりたつて心河々原に炸裂している。

十二月十三日

十三時中隊長室に幹部集合、移動に就て中隊長の話あり。大隊本部は二ヶ中隊を以つて宗義鎮に、四中隊は柏肖鎮に、中隊は宮坂小隊を以つて清源道季橋に警備する事となる。小隊より塚田賢隆を、金田、大和、清水の四名を二小隊にやる事とする。残り中隊は旅団予備として城内に移る事に決す。十八時より県公署にて、中、少尉の宴会あり、出席す。将校団の總會と代り、三大隊と共に連隊長討伐に行き遅れ、七時頃より始まる。中隊長と迎へに来た有井と共に十二時頃歸る。

十二月十四日

二小隊は明日出発する事となりたり。今度の分散警備の目的は、心陽果の治安の確保に在り。着々として民衆が、新政権を信じて明朗化して行く事は愉快だ。晩に中隊長遊びに來り麻雀をす。

十二月十五日

七時二小隊出発するので起きて見送る。なか／＼寒い朝だ。十五夜の月、昨日、今日と思つて居たら、もほんの少しの残月が地上を照し、一増の寒さを感じる。早いので又一ねむりす。十五時より城内に慰問漫談あり、皆を外出さす。

馬坡部落の民衆が、今度自分達移動につき行つては困るといふので、中隊長殿が大隊の通訳山田をよんで、民衆を集め一言挨拶せ

り。か程まで我々を信頼して居る事を思ふ時、この地に他の部隊を駐屯させたい様な気がする。うすら寒い日となり、夜になつてついに水雪みたいなものがふり出して来た。

十二月十六日

加藤、県軍曹をつれて、移転する旅団本部前の設営に行く。うす暗い憂鬱な日、いまにも何かふりそうな天候だ。小田部隊酒保で昼飯をとり帰る。六中隊の勤務交代員を出す。荷物は一部自動車二台にて運ぶ。

十二月十七日

十時までに移転の準備完了。荷物は自動車数台にて運び、旅団司令部前<sup>(衍)</sup>六中隊後に移る。自分の室も改造、炬燵を作つて保温の設備を行はしむ。雪模様のうすら寒い日となつて来た。

十二月十八日

八時に起きて城内の入浴に行つて見る。時間の不利<sup>(履)</sup>行で兵の多く入つて居るのには驚いた。高級副官清化鎮に行く護衛の事で遅れたとて、岩間副官より種々小言をうく。午前良郎君の許を尋ねると、討伐に行つて留守、夕方帰るとの事だ。連隊副官西沢中尉たんせき病で入院して居るので、これを野戦病院に見舞、漸次経過良好との事で安心す。元気だった。ちら／＼と雪舞ひ非常な寒い日となつた。

十二月十九日

各隊大行李石炭取りに行く掩護のため、四ヶ分隊を編成八時出発す。良郎君より馬をかりる。雪ふりとなり白銀の世界だ。馬の足

がすべつて歩行なか／＼困難。心河橋梁附近で馬諸共ころんだがけがは別になく、それから気をつけて行く。清化鎮にて飯を食ひ、二時帰途につく。雪はます／＼強くなりいやな日だ。五時半無事懷慶に帰る。若林誠喜君夕方来り遊んで行く。

十二月二十日

雪ふりは今日も朝からだ。大変ふるでもないがなか／＼寒い。昨年は非常に雪は少かつたが、此の附近は雨量が多いのかなか／＼ふる。休養を行ふ。始めて長い間の馬でもつが、今日はつかれた友一君遊びに來り十二時まで話す。

十二月二十一日

一小隊の吉岡軍曹長で、大行李石<sup>(炭力)</sup>灰運搬掩護に行く。九時三十分よりこの附近の匪賊約四百帰順したり。その巡視が旅団長閣下行ふので、自分は一ヶ小隊を編成、掩護す。本日の寒さはなか／＼烈しく木花が咲いた。而しこれは内地と異り水気が多いので、寒気がなるくも咲く。方面軍派遣の軍樂隊慰問に來るも、いろ／＼な掩護のため中隊は聞く事が出来なかつた。たゞ兵が送り迎へをやつたのみだ。

午後良郎君遊びに來り、写真を二枚撮す。うすどんよりした天気だが、夕方となつて又雪が舞ひ出して来た。内地の冬が思出される。

十二月二十二日

八時の起床と同時に入浴す。時間以外に兵が入つて居り、まるでこつたがへして居り、芋を洗ふ様だ。自動車隊が宿舎を移した後

へ二ヶ分隊 一、二 を入れて、今までのところを広くす。理髪屋に行く。途中高橋柳之助君にばったり会った。昨年八月以来だ。君は衛生隊に居るとの事で、今城内に居るところへ小林行則君来り、入浴の帰り遊んで行く。

十二月二十三日

木下軍曹を長にして、大行李石灰輸送の掩護に任せむ。他に自動車の護衛としてlg一個分隊を出す。幾日ばかりで快晴となったが、なか／＼寒さ烈しい。朝宿舎前広場にて、新に来た補充兵三百名に連隊長の訓示あり。

十二月二十四日

一大隊へ糧秣輸送の輜重中隊の掩護に一ヶ小隊を編成、十時西南方温県道に集合、一時間半も遅れて来り、十一時半崇義鎮に向ひ出發。自分は又良郎君より馬を借りて行くも、寒気なか／＼烈しく足がつめたくて困った。二時頃二中隊一ヶ小隊警備の二郎廟にて昼飯、三時過ぎ崇義鎮着、三、四十分にして帰途に就く。連隊長各一線を巡視、崇義鎮に行つて居られた。帰りは一休もなく、丁度暗くなつた時無事帰る。

十二月二十四日

自動の掩護あり、lg一ヶ分隊出す。他は何もな休養す。

十二月二十五日

昨夜上原上ト兵が露営衛兵として勤務中、料理屋に一寸行つたところ憲兵に発見され、同隊本部に引置さる。星野准尉とともにいる／＼大きな問題としない様行つて見たが、法は法としてそつ

ふ様にならず、仕方なく憲兵隊に一任す。長は木下軍曹なり。大正天皇祭、他の兵に外出を許可す。

十二月二十六日

清化鎮の石炭掩護あり、二ヶ分隊出す。

十二月二十七日

自動車掩護を出す。いよ／＼今年も残す数日となつた。家に居たら何かと暮の多忙さが何人もあるのだが、野戦の暮は全然そんな事はない。平常とすこしも変らない気がする。それがよいのであるう。支那人には日本の様な正月がないのらしい。それに變る様な何かがあるかも知れないが。

十二月二十八日

今年最後の石炭受領の掩護を出す。旅団長閣下の内務巡視があるので、午前より準備さす。十八時頃巡視終る。崇義鎮より大隊長殿来る。柏肖鎮を廻りて来られたのだ。季橋の宮坂君も、元気で居ると手紙をよこしてくれた。

十二月二十九日

午前時計台北方の東部より続く道路を修理さす。大隊副官遊びに来る。午後二時大隊長崇義鎮へ歸られた。

十二月三十日

いよ／＼本年も今日、明日となつた。兵には休養、外出を許可す。竹を飾りて門松をやり、各分隊の前は皆正月らしい感じを思える様になつた。

十二月三十一日

本年最後の日となった。今年の正月はあの彰徳で、そして一ヶ月半の栄気を養った二月中旬、あの南方高地の堅陣を突破、多数の戦友を失ひ、息つくまもなく一路南へくと敵を追って新郷平野へ、更に西方へ大行山脈の剣を越へて幾十里、大黄河のふちに立つて敵陣を眺めた思出、更に帰って休むひまなき折、<sup>(徐)</sup>除州戦の参加、五月、<sup>(マ)</sup>日の大黄河の渡河、十数倍の敵の真中へ突入ったあの日の事、二旬にわたる苦戦の後の開封の攻撃、又新郷平地に帰って、警備に、討伐に、思えば業多き一年だった。一生忘れる事の出来ない年だった。

微傷だに負ずして本日まで来た事、神の御蔭と思つて感謝の念で一ぱいだ。今その年も暮れなんとしている。すべては過去の思出として此の年も送ろう。来るべき明年は又どんな事があるつか、すべては神のみ知る事だ。思出多き一年よさらば。

#### 【第四冊】

昭和十四年一月一日北支河南省心陽<sup>(沁)</sup>県城内二テ。

一月一日

戦場で年を迎へる第二回目。午前一時頃やはり各警備隊方面は、皆若干の敵襲あつた如く、銃声が盛んにしたそつだが、自分は昨夜の酒がきゝすぎて全く知らず、いつしか夜が明けた。和かな新年だ。国に居ると同じくやはりぞうにだ。この戦線まで日本人らしい正月を迎へる事の出来るのも、あらゆる輸送陣の完全と銃後のしつかりしている事で、感謝の念に耐へない。

十時より先ず中隊だけの拝賀式を行ひ、旅団長閣下に新年の挨拶に出かけ、それより連隊本部へ将校の簡単な祝宴あり、続いて連隊将校全員にて旅団本部に出頭、閣下と祝宴、大いに新年の祝賀と相互の武運長久を祈つて散会す。快晴とまでは行かないが雪はなく暖かな新年、内地の気候はどうであるつか、そんな事も思ひ出す。夕食は各分隊長と祝宴す。

二日

昨日、今日と、毎日各隊兵の外出で街は大変な賑が、内地のあれを思い出す。商売始め、大売出し、それと同じ様な感じがして愉快だ。支那人の新年は今でない様だ。自分も宿舎にばかり居つても退屈だ。街を少し歩いて写真をとつて歩く。午後友一君、良郎君が遊びに来てくれた。行則君も来る。夕食は各分隊長と又祝宴の予定なるも、中隊指揮班で来てくれといふので出席す。

三日

何だかんでもう三日となった。今日は閣下が新郷へ連絡の為行かれるので、その掩護のため一ヶ小隊をつれ自動車にて清化鎮<sup>(五)</sup>まで送る。帰りには駅より石炭を十五、六俵、自動車につけてもつて一時頃帰る。

今晩は中隊前広場に於て方面軍派遣の慰問映画あり、先日のと異り相当よいもので、皆の慰安には充分であつた。特にその中に出て来る木曾節、伊那節、民謡集の中に、我信州の風影その他が出た時は、一増の懐しさを思せた。十二時近くに漸く終つた。足がつめたくて仕方なかつた。而し戦場だ、この寒中露天での活動も、

平気で見て居るのもなか／＼おもしろい。

#### 四日

閣下が新郷より帰られるので、又中隊より一ヶ小隊を出す。今日は星野准尉が行ってくれるので自分は休む。連隊本部にて篠原中尉、河西中尉等と話し、西沢副官とも話して帰る。

軍人勅諭の御下賜の日なので、清化鎮よりの部隊帰ると共に奉読式あり、中隊長の訓示ありたり。本夜も活動あり、相当な賑である。宿舎の前でやられるので又今晚も少し見る。

#### 五日

五時非常呼集あり、全員起床、軍装して北門外に六時十分前に整列終る。砲兵なぞの来る頃は中隊は引揚げず。八時だった。入浴す。なか／＼の寒さであった。大隊長及各隊長、功績の事に就て打合あるため崇義鎮より来らる。晩に中隊にて隊長と祝宴す。中隊に在るラチオによると、近衛内閣総辞職し、平沼内閣本日成立との事で驚いた。その他懐しい内地の演芸を聞き、一増の感激を新にす。

#### 六日

午後別に何もないので、荒井充君のところにて一時間ばかり遊び、帰って見ると、重慶に反乱起り、蒋介石は監禁され生死不明との事でびっくりした。それは師団よりの電報とかで信実らしい。七時のラチオニュースを聞いたが、その事は別になかった。

大隊副官内山中尉遊びに来る。十時十分前頃だ、火事だといふので出て見ると、連隊功績事務室の入口が真赤だ。ガソリンが発火

したらしい。中隊をすぐ出し消火につとめた。その中に他隊の兵も来り、幸事務室には火が移らず無事なるを得た。十一時半頃終わったので帰る。ポンプなぞないので実際支那の火事は困る。而し煉瓦と土の家なので大きな火事にはなか／＼ならない。

#### 七日

旅団長閣下、十中隊の居る西向鎮に巡視に行かれるので、自分は一ヶ小隊を以って掩護、十時自動車にて出発す。十一時着、篠原中尉、大田少尉も元氣だ。十四時帰途に就き、十五時三十分無事帰る。

#### 八日

本日は陸軍始めだ。而し別に部隊として催しもなし。二、三大隊が、三日間の予定を以って討伐を行ふとの事だ。夕方軍旗小隊の林中尉のもとにて遊び、酒をふるまってもらひ帰る。

#### 九日

閣下が本日は崇義鎮巡視なので、九時半整列、一ヶ小隊を以って出発す。途中別に変りなく、二部廟の一ヶ小隊警備を巡視され、十一時頃崇義鎮着。自分は、吉岡中尉が具合悪く伏して居るので行つて見る。元氣であつたが耳も悪く困つて居た。昼飯を吉岡のところであり、十五時出発帰途に就き、無事宿舎に帰る。

#### 十日

本日は閣下が柏肖鎮の巡視なり。小隊長は星野准尉。李橋の宮坂小隊の巡視もあるので、中隊長も行かれた。河西軍曹の父上より慰問袋を戴いた。重之さんよりもいろ／＼と送っていたゞいたの



で、早速礼状を出す。

十一日

閣下が北龍盤の五中隊と馮翊の六中隊を視察されるので、一ヶ小隊を指揮して掩護す。十二時頃五中隊を終つて六中隊に至る。保治君と会つて写真を撮す。毎夜の如き夜襲で、堅固なる壕を掘つて六中隊は猛烈な警戒ぶりだつた。十五時無事歸つた。

十二日

大隊長会議のため、昨日宗義鎮より大隊長来られ、本日午後歸れた。京漢線附近の黃河北岸の討伐のため、各隊の警備がうすくなり、心陽城内はR本部、一大隊本部と一ヶ中隊のみとなり、外は城内に警備する事となる。中隊は十中隊と交代して西向に行く事となる。自分は独立にて心河<sup>(沁)</sup>、<sup>(丹)</sup>たん河兩橋梁を警備する事に決す。

十三日

十五時いよゝ三大隊が明日出発するので、誠喜さん、友一君、良郎君をよんで自分の室で話し、小田部隊酒保にて新年の宴会とでもいふか、一こんかたむけて大いにやる。村の人達とこうしたもようしはなかゝ愉快だ。

十四日

三大隊主力本朝焦作附近に向つて出発す。新警備地心河附近に情況を見に行く。有井をつれて行く。

十五日

新年も十五日となつた。何するもなくして半月終つた。實際月日のたつのは早い。十時頃清化鎮行の自動車あるので、それにて丹

河橋梁を視察に行く。荒井をつれて歸りの自動車をまつと長いので、山脇少尉のもとで昼飯を食べ歩いて途る<sup>(マ)</sup>。

十六日

午後宮坂中尉の李橋警備隊引揚げて来る。

十七日

旅団長閣下、清化鎮の井上部隊視察するため行かれるので、半ヶ小隊を指揮して自動車にて掩護、十三時歸る。砲兵隊も本日引揚げたり。だんゝ城内がさびれて来る。十五時頃崇義鎮の大隊本部歸る。

先月末来り、大隊の総合教育中なりし補充兵、本日中隊配属となり、小隊へ四名編入す。菅沼松吉、小林鷹一郎、山田智、中川末広の四名なり。本日より中隊も、新操典草案により新編成を実施、県四分隊長を一小隊に転入させる。さゝやかの宴会を実施す。北門外にて自動車子供一名引き、横倒しとなるも異状なし。

十八日

閣下が清化鎮よりの歸られるので、これを迎へに半ヶ小隊を指揮して九時出発す。十時着。少休の後十一時半頃無事歸る。星野准尉、中隊の一部を指揮して西向に先行す。明日はいよゝ新警備地に出発するので、本日準備を完了す。

十九日

六時起床、出発準備をなす。八時半中隊の訓示<sup>(長脱)</sup>あり。続いて旅団長閣下に挨拶し、宮坂中尉の指揮をもつて、主力は大隊長の見送りをうけ出発す。自分は少し遅れ、目的地廟後に向ふ。中隊長は

自動車にて荷物と共に西向に先行す。宿舎には何もなく、全力をあげて宿舎の設備をなす。正午心河及丹河橋梁の勤務交代をなす。二時、佐藤軍曹、関、栗津、原をつれ、丹河波に行き状況を視察す。陣地障害物は完全にしあるのでその点は安心なり。

二十日

廟後第二夜は明けた。幾分風邪気味と思れる。苗店以来のカメ風呂に入って暖く寝る。郵便局に自分の印鑑をとどけて、以後こゝで中隊と別に出す事とす。酒が支給され、風邪をふきとばすつもりで飲んだがようってしまった。

二十一日

風邪気味も大した事もなく今朝は気分がよい。新警備地にすっかりおちついた。昨夜も異状なく平穩なり。分哨の報告によると、遠くでたまゝ銃声、砲声がする位との事だ。丹河からも連絡あり、異状なし。午後は久しぶりで麻雀をやつて時を過した。両橋梁が若干破損した所あり、工兵隊へ通報す。

二十二日

いよゝ新警備地にておちついた。大隊長殿が中隊主力の西向に行かれたが知らなかった。何か用があつたのに残念だった。荒井軍曹中隊より俸給をもらひに来る。木下班長より皐月の火事を知り驚いた。二十日の午後だったとの事だ。

二十三日

午後城内へ久しぶりに連絡に出掛けると、北門にて大隊長殿と会い、廟後に巡視に来られたので一緒に引かへす。一時間位自分の

室にて話して歸られた。

二十四日

午後丹河の警備を加藤軍曹以下十八名と交代さす。城内に遊びに行き大隊本部へ行つて見ると、大隊長殿柏肖鎮へ巡視に行かれ留守だった。

二十五日

最近退屈のため飯がまずくて仕方ない。何か運動をせめといけないと思ふ。新郷南方の討伐が始まつたためか、銀翼を連ねた友機数台東南方へ飛んで行つた。昨夜丹河、西向中間附近でチツコの銃声、二時間位盛んにしたそう。心河南方部落でも手榴弾の炸裂したそうだが、両橋には異状なし。

二十六日

十時少し前荒井軍曹来り、皆に俸給を支払ふ。西向より山口軍曹以下十名連絡に來り、十六時歸つた。木下軍曹をして經理室より一月分の俸給をもらふ。

二十七日

十時頃有井上ト兵をつれて丹河の警備を巡視がてら行く。別に異状ないらしいが、昨夜清化鎮附近で二、三時間猛烈な銃砲声がしたそう。最近二、三日の気候は非常に暖だ。丹河まで歩いて汗がでる位で春の様なり。夕方小隊の連絡者と共に歸る。

二十八日

午前宿舎裏の壕を修理後、本日も外出を許可す。何もなす事なく退屈で仕方ない。西向より星野准尉功績の打合せに大隊へ来る。

夕方手紙にて、上原広繁軍法会議へまはるので、明日自分につれて来てくれとの伝令来り、上原を丹河より呼びよせる。支給された酒でいささかよって早くねてしまった。

二十九日

十時上原をつれて大隊本部へ出頭す。早苗新郷へ用があつて行くので、新しい冬服の袖が長いのを短くするべく頼んでやる。大隊長殿と話し、軍旗小隊塩入中尉の許にて昼飯を食べ、大隊経理室にて遊び、酒保、臯月とよつて、木下達の連絡と共に帰る。一久君へ手紙を出す。

三十日

何もなす事がない。そろ／＼おちついたので、分隊教練でも行ひたいと思つて居るが、まだその様にならない。實際此の頃は暖だ。春の様な気がしてならない。どうかして外吹く風もほんとに春の感じがする。

三十一日

一月も終りだ。十時頃星野准尉来る。中隊よりの連絡者山口曹長の引率をもつて来り、星野君三時半一緒に帰った。早苗軍服をなおして新郷より帰った。此の正月も全く早い、夢の様に過ぎてしまったのだ。内地の事を思ふと今は全く寒い時期だが、戦線に居るばかりにそれも知らずに過ぎる。夕方村の尚武会、(長野市)安茂里の伯父よりの慰問品をもらった。

二月一日

もう二月となつた。実際一月をふりかへて見ると、何をしたかと

思ふ。午後城内にて遊んで夕方七時頃帰る。軍隊が減少しているので、新年早々の様な賑かさは見られない。

二月二日

午前、加藤、大津両軍曹と丹河へ巡視に行き、良く抵抗線なぞ完全にし、安心して勤務に就く様注意す。昨夜丹河南方部落へ匪賊が来たらしく、三、四発銃声せるにより、擲弾筒を射つとまもなくにげたらしいとの事だった。昼に帰る。雪がちら／＼舞つてうすら寒い日となつた。

二月三日

大津軍曹を長として丹河警備を岩下と交代せしむ。新町の伯父よりの新聞来る。手紙を出す。

四日

午前より久しぶりで外出を許可す。麻雀なぞやつて遊ぶ。午後城内にて遊び、夕方六時頃帰る。大隊給与掛伊藤軍曹功績の事について来り一泊す。

五日

今朝の寒さは猛烈だ、最近にない。而し天候は快晴なり。午後中山軍イ来り、小隊チブス予防接種を行ひ、丹河へは滝沢伍長が行つてやつてくれた。中山君、将棋や囲棋(碁)をやり五時頃帰った。

六日

九時半、加藤、佐藤両軍曹と丹河へ巡視す。鉄条網は各宿舍の四方に張り、警戒をげんにしてあり安心す。昼には帰る。木下班長が先日より風邪の気味で、城内の連絡は加藤軍曹にす。昨日勤務

下番者に外出を許可す。

七日

もうすっかり春となった様な気がする。朝夕は氷のはる様な事もない。夕方大隊本部に遊びに行き、大隊長殿、中山軍イと将棋なぞやって、十一時近くまで過してしまった。一泊す。

八日

西向中隊の連絡来り、手紙なぞもたしてやる。

九日

新編成となつて分隊教練もやらぬので、ぽか／＼とする春の陽光を浴びて西方広場で行ふ。昨年の今日、戦場第一回の新年を迎へた彰徳と別れを告げて、行動開始の第一歩を印した日だ。此の一年の間硝煙に暮れて、新東亜建設を目指して歩んで来たのみだ。

十日

昨夜よりどんより曇つて来たと思つたら、珍しく雪ふりとなった。気候はあまり寒くもないが、それ故雪もみぞれの様だ。昨日だからが大隊の酒保より蓄音機をかりて来た。久しぶりで聞くレコードも又格別だ。夕方木下軍曹と共に早<sup>(マ)</sup>遊びに来り一泊す。

十一日

紀元二千五百九十九年、紀元の佳節だ。十時より宿舍東の広場にて遙拝式を行ひ、聖寿の万歳を三唱す。

この目出度い喜の日を祝ふと共に、俺達にとって永久に忘れる事の出来ない思出の日だ。一年前の今日を思ふ時、今は無き故山崎軍曹、竹前、吉沢両上卜兵、あの彰徳南方高地に鬼人<sup>(神)</sup>も泣く壮烈

な戦死<sup>(マ)</sup>のつけた部下に対し、感謝の念にたへない。昨年の今日と一年後の今、皇軍の占領地域を見る時、東洋の盟主として永遠の平和確立に向つて正義の旗をふりかざし、支那四億の民に救<sup>(マ)</sup>への手をのばして居る事、これ一に我御稜威のしからしむるところと共に国民一体となつて向ふところはたゞ一つ、東洋平和にと進むからにして、日本帝国に生れた有難さをつく／＼感じる。

本日君は一泊せり。晩紀元節の祝の酒をやる。永久に思出つきない紀元節の夜だった。

十二日

早朝中隊の荒井、河西軍曹来り、本日糧秣輸送と共に西向に帰る。昼飯と共に木下と二泊した南君帰った。どんより曇つた憂鬱な日だ。午後中隊長殿功績打合せのため来慶され、廟後に立寄らる。

今度下士適上卜兵全部伍長に任官となり、清沢のみない為中隊長に聞いて見ると、字の間違らしく任官して居るとの事だ。小隊の新任官者は、井口、竹内、清沢、安藤の四名なり。

十三日

十時より分隊教練を実施す。木下軍曹額にせつ<sup>(ママ)</sup>をでかして城内の連絡出来ず、佐藤軍曹を交代に行はしむ。丹河警備を交代す。長加藤軍曹とす。

十四日

九時頃中隊長殿自動車にて西向に帰られたり。

十五日

分隊教練を実施す。本日種痘を行ふ予定なるも、都合により延期

す。午后有井をつれて城内に遊びに行く。夕方六時頃帰る。河西軍曹来り一泊す。二十二時大隊に命令あり、明朝七時までに小隊は、最少限の兵力を残置して沁河北岸西沁陽に至り、北孔庄附近の掠奪中の匪賊を攻撃中の二中隊に協力すべしとの命あり。

十六日

五時半出発目的地に至り、八時頃対岸にて銃声あり、三名渡河して来る支那人を捕獲、本部に連行取調べの結果、附近の土民なり。大隊本部にて大隊長殿と昼飯を食べ、R本部副官に報告、篠原中イのもとで一寸遊び二時帰る。荒井軍曹来り、小隊の兵に俸給を給与す。

十七日

別に何も無い。運動不足の爲か、飯がまずくて仕方ない。運動をやるうと思つてもする事もなし。午後麻雀をす。

十八日

朝から雨模様の天候は、午後になつて東風と共に雨となつた。丹河警備を交代す。大した雨もないので、交代と共に丹河警備隊を巡視す。若下軍曹長なり。四時頃城内に行き、野戦倉庫今井中尉のもとにて夕飯、R本部の篠原中尉も早苗君も来り、四名にて大いに愉快に飲む。相変らず雨がしとくふつて道路は悪い。大隊長殿とも会つた。

十九日

昨日来の雨は、今朝となつて雪となつた。支那の正月元旦、昨夜来爆竹を揚げて大賑いだ。路が悪くて平口だ。西向へ大行李連絡

あり。戦闘中もなか／＼苦勞だが、此の雪の中糧秣輸送も実に御苦勞なり。新年の爲宿舎の支那人が年頭の挨拶に来て、何やら祈つて行くのも可愛いものだ。しとく雪はふる。今頃は何となくぼんやりして居て仕方ない、何故か。

(ママ)  
二十一日

雪も昨夕よりやんで、良く晴れて寒氣加つた朝は相當な冷であつたが、それでも内地の三月下旬位なものだ。先日室内に入れておいたオオバイの花は万開となり、外の麦も青々として来た。午後大隊本部へ兵器検査の事について打合せに行き、副官と話し、帰り例のところで一寸話して、加藤軍曹と帰る。道は非常に悪く苦勞した。外出を許可す。

(ママ)  
二十日

昨日、中隊長殿隊長会議に來懷され、午後三時頃一寸廟後に寄つて馬にて歸られた。全員に種痘を実施す。

二十二日

今日はこの懷慶陥落<sup>(周)</sup>一週年とかで、城内では日本居留民会のいろ／＼な催しがあるらしい。外出を許可す。宮坂中尉西向より連絡に來慶、一寸よつて歸つた。どんより曇つた日だ。

昨年の今日、今居るこの沁河河畔にて懷慶城を眺め乍ら昼飯、あの城内で泊る予定だと喜んだのもつかのま、横に眺めて濟源方行に前進した思出の日だ。感無量なり。城内では居留民会の、及支那民衆のいろ／＼な催しあり、非常な賑かだったとの事だ。夕方城内に遊びに行つて見る。

二十三日

十三時より大隊長及工長来り、小隊の兵器検査を実施す。丹河警備隊交代の日なので、丹河は来てより検査をしたため遅れ、それまで大隊長いろ／＼話されて十六時頃帰られた。

二十四日

別になにもない平凡な日を送る。

二十五日

大隊演芸大会の日なり。小隊よりも二つ出す事となり、大沢、笠原、阿部の三名にてやる事となる。十三時より県公署に於て実施なか／＼成大<sup>(盛)</sup>だった。小隊よりのものは四等だった。八時より沁陽食堂に於て准尉以上の慰労会あり、出席す。

二十六日

二時半頃沁河方向にて銃声せり。はね起きて北門附近まで行つて見ると、別の方向なので安心す。中山軍イと朝飯を食べ、大沢軍曹と帰る。

二十七日

午後城内大隊本部へ連絡に行き、遊んで夕方帰る。

二十八日

本日で二月も終りだ。正午満鉄のバスで丹河警備隊の巡視をする。夕方大隊より命あり、明早朝小隊は西沁陽西北方二千、義合村にある匪ぞく姚克明の家を急襲せよとの命に接し、その家を知つて居る下士候補四名、今井軍曹以下来り準備す。

三月一日

四時半起床、小隊長以下三十名をもつて義合村に向ふ。手前の部落にて敵の監視に発見され、直に目的の家に向ふも暗くてその家が知れず、あちこち歩いて居る内に夜も明け始めて来た。それでも漸く見付けた時は、敵は家外に出てにげんとして居り、直に突撃するもにげてしまひ、一名の敵を捕獲す。それと支那のピー二名、双銃一、小銃一を捕獲す。午前中に本部に連行、引渡して帰る。午後内山副官、宮下、中山両軍イ、乗馬演習がてら遊びに来る。

二日

昨夜から春雨となり、風も相当烈しくいやな日となった。午後大田少尉 十中隊 懷慶に連絡に来り、本日自動車立たず一泊す。親友でやはり話が合ひ愉快だ。久しぶりで一ぱいやり、朗らかとなり早くねむってしまった。

三日

九時起床。雨はどうやら晴れた様だが、上天気とならずつとつしい天気だ。○時頃大田少尉帰った。

四日

又しと／＼雨ふりとなつたが、又教育のため宮坂中尉西向より来り、城内に泊まる。

五日

雨はどうやらはれた様だ。木下軍曹の連絡の車輪で城内に行くも宮坂中尉とは会ず、軍旗小隊塩入中尉のもとにて遊ぶ。六中隊秋山中尉も来て居った。一時間ばかりで三時半頃帰った。夕方にな

つて幾分日が照って来り、天候回復の様だ。

六日

久しぶりで天候も回復した。城内へ連絡に行く。宮坂中伊と会ふ。大隊本部にて副官と話し、皇月にて御茶をのみ、慰問の浪花節R本部前にて聞く。男二名なり。

七日

午後宮坂中尉自動車にて西向に帰った。星野准尉連絡のため来懐す。雨あがつてすっかり暖くなり、麦も一だん青々として来り、すっかり春らしくなった。冬服で歩くと汗が出る位だ。

八日

城内へ行く。竹内伍長と支那料理を食し、大隊本部にて大隊長殿と話し、吉君を見舞、木下連絡者と帰る。三大隊焦作附近の警備を交代。十五連隊と。今度済源、温県附近の討伐を実施するにつき、本日懷慶へ来る篠原中尉一寸立寄って行く。元気なり。

九日

起床して見ると、幾分風邪気味の様な気がする。入浴をせず、午後になって見ると大した事もなさそうだ。討伐に行く工兵隊廟後へ一泊す。大隊より伝令来り、明日の記念日廟後ケイビ隊は八時五十分までに城内大隊本部へ集合、大隊長の訓話を聞く事となる。夜西向に負傷者収容のため自動車二台行ったとの報あり、心配す。

十日

三十四年前の今日、国運をとじて戦ひ大勝をはくした奉天の記念日だ。九時より大隊長の訓話あり、廟後警備隊も城内大隊本部に

至り聞く。どんより曇って雨模様の天候はついに小雨となった。

十中隊篠原中尉、大田少尉と面会、支那料理屋にて遊ぶ。

午後城内にて運動会ある予定なりしも、雨天の為中止となる。明日早朝三大隊主力R本部は、済源方向の討伐に出発する事となる。<sup>(ママ)</sup> 晩星野准尉来り一泊す。

十一日

午前西向行の自動車来り、星野准尉帰った。西向、懷慶間軍有線隊電話を架設す。西向にて盛んに砲声せり。討伐隊の前進を思す。

十二日

沁河南岸に対し散兵壕を構築す。

十三日

各戦闘の功績を整理、中隊へ提出す。

十四日

城内に連絡に行く。武重上ト兵と城外ラマ塔の撮映に行く。天候も快晴、ぽか／＼と暖くて汗がにじみ出て、冬服では歩くと困難なり。

十五日

昨日温県方向に討伐隊。三大隊は無事温県入城との事だ。<sup>(勝)</sup> 武方面より来りし師団長閣下、本日來懐との事だ。今度の討伐はなか／＼大きく、旅団長閣下も来られて居る。最近天候なか／＼悪く、快晴の日として三月になって幾日もない。昨年より気候もおくれて居る様な気がする。

十六日

荒井軍曹小隊に今月分の俸給を支払ふ。夕方懷慶へ歸つた。

十七日

朝からばか／＼と春らしい好天候だ。連絡と共に城内に行く。西沢速射砲隊長の許に久しぶりで遊びに行く。昨日討伐より歸つたばかりで起きたばかりだった。一時間余話して大隊本部へ行つて見ると、大隊長も副官も居ず、清水少尉の許も尋れる。留守なので軍旗小隊塩入中イの許にて話し、木下軍曹と歸る。

十八日

基宜<sup>(弟)</sup>より八日出の便り入手す。十六日卒業式だからもう終つた。いよ／＼長い青春の学校生活と別れを告げて、いよ／＼実社会へ出た。当分家へ歸つて、五月上旬頃農林省へ赴任するとの事だ。今日もなか／＼暖だ。先日粟津上等兵のもつて来てくれた、杏の花の様に思ふが、不明の花も咲き出した。彼岸の入日だ。暑さ寒さも彼岸までと内地でもいふ位だ、実に暖となった。昨夜、中隊<sup>(り脱)</sup>よ小原軍曹来り、小隊にて一泊す。

十九日

夕方よりR副官鈴木大尉 師団へ の大隊の送別会あり、出席せよとの事で夕方出席す。

二十日

本日命令で、小隊は今度北方二里半、西向鎮東方二里、晋州へ通ずる道路上万善村へ、mg一分隊、大隊砲一分隊と独立して警備する事となり、西向より中隊長殿来り、大隊本部へ同行、種々打合せをなし、夕方歸る。

二十一日

午前、中隊長殿自動車にて西向に歸られた。陸軍記念日に雨天でのびて居た日支合同運動会、本日十三時より城内広場に於て催され、見物す。軍隊、居留民、支那人等のいよ／＼な運動で非常におもしろく、たゞ近頃にならない大風で砂埃が舞つて残念だった。而しあの風采を眺めて居ると戦線とは思はず、半日実に愉快な日を過した。

二十二日

午後大隊長に挨拶、經理室にていよ／＼打合せをなす。崇義鎮の吉岡中尉と電話で話す。十五時より小隊の下士官以上で、東亜食堂で始めて宴会を実施、愉快な日を過ごす。両橋梁の警備は六中隊と十三時交代、兵に外出を許可す。二十三時有井達迎へに來たので歸る。

二十三日

六時半起床、準備完了。大行李荷物を積みに来てくれたので、八時三十分いよ／＼思出の懷慶を後に、mg大隊砲を指揮し任地に向ふ。途中道路は良好、二、三個所修理を要する個所あり。十一時万善村着、中隊長も丁度来て居れた。附近の部落を偵察し乍ら掃蕩し、万善村は竹やぶの部落、而も地形悪く、すぐ北の盆<sup>(窟)</sup>を警備地と決定、夕方まで抵抗線宣撫なぞして終つた。西向の宮坂中イ以下は歸り、中隊長殿は二、三日残らる。通訳も共に。mgの高橋中尉、大隊砲の青木准尉も居り、何かと心強し。

二十四日



三時西北方一千位の地点より敵の射撃あり。始めてのため全員に起床をさせ準備するも、若干射撃せるのみにて何もないので、五時就床す。本日は陣地障害物を構築、十七時頃西北山頂及西方より敵の射撃あり、大隊砲を試験射撃かね十数発射つ。まもなく敵後退す。二十二時頃西方よりチッコ小銃若干の射撃あり。直手榴弾の炸裂数発ありたり。応戦せず。

二十五日

陣地構築をなす。障害物は終つた。「戦時読本」なるものあり。

抗日一色にぬりつぶしてあり、調べると最近まで開校して、十二、三才の少年に教育して居りたりとの事だ。二十二時今度は東北方より若干の射撃あり、応戦せず。

二十六日

十時頃西向より星野准尉の指揮する一ヶ小隊、mg一分隊来り、十三時中隊長同行帰西さる。中隊功績事務多忙のため、清沢伍長、大和上卜兵の二名をやる。一名もやりたくないのであるが仕方ない。十五時と十八時頃、東方より小銃若干の射撃を受くるも応戦せず。夜間は又来るかと思つたが、異状なく平穩なり。

二十七日

九時頃又東方馬庄及山麓よりチッコ小銃の射撃を受く。相当近くに接近した模様なり。而も晋州道路には、何だか不明なるも煙がぱつ／＼と上がるので、大隊砲をして射撃せしめlgも若干応戦す。まもなく沈黙す。十二時大行李糧秣輸送し来る。二十日分。先日来れる高橋中尉、青木准尉、大行李と共に懷慶に帰還す。

いよ／＼将校は自分一人となり、任務の重大を感じず。明日師団長閣下来懷され、一線を巡視されとの事なり。

二十八日

陣地構築、鉄条網の不完全なところ、西南方を補修す。昨夜二十一時及二十四時頃、二回に渡つて若干の銃声せるも、其後平穩にして本日も同様なり。衛生兵のなす施療所へは多数の支那人が来り、漸次皇軍を信頼しつつあり。

二十九日

昨夜は猛烈な犬が鳴いて、敵襲でもあるかと緊張して居たが、幸平穩なり。暖な日となつた。かん／＼照る春光を浴びて、外でのぼんやり物思ひにふける事もよい。誰かが桃の花の万開のものとつて来り、カメラにおさめる。

三月三十日

九時頃、東北方晋州街道を荷物も多く積んだ馬が通るので、大隊砲機関銃をして射撃せしむ。昨夜も変化なし。ただ犬が非常に鳴いたので緊張して居たが、異状なかつた。岩下軍曹の調べた土民の言によると、東方新店、山王庄、鹿波各村には、四、五十名位の土匪居るとの事だ。

三月三十一日

昨夜も異状なし。午前北門、東門の陣地を掩蓋とす。十一時頃中隊より荒井軍曹長にて二十数名の連絡者来る。昨夜よりむし暖いと思つたら雨模様の天候となり、ぼつ／＼やって来たが大した事なし。いよ／＼三月もさよならだ。全く早い。暖さも増して来た。

昨夜は蚊がぶん／＼やって来るには驚いた。柿の芽も出して来たとはいへ、内地なら五月上旬、蚊なぞ当分なのだがやはり大陸は異なる。

四月一日

今年も四分ノ一は終つて四月一日となった。寒い信州とても春となった事だろう。この附近はもう柿の葉も出て、桃の花が咲き競つて居る。最近敵も来なくなつて平穩、何よりと思つて居る。雨模様なり。而も若干ふつて来た様だが少くてすんだ。全国小学校の入学日、野戦に来ていつの間にか自分の子供が入学するなぞといふものもある。

四月二日

異状なし。

四月三日

神武天皇祭、節句だ。而し何もやる事もない一日、休養をさす。

四月四日

久しぶりで附近部落の巡察をやつて見る。先ず懷慶へ通する道路の偵察、機関銃大隊砲は馬運動をかねて南方三軒ばかり行つて見ると、道路の未だ不完全なところあり、保長に命じ修理さす。東方山王庄附近も、敵状を偵察して見るも匪賊も居らぬらしい。十時帰る。

夜、明日日没後警備隊の大隊砲及半ヶ小隊を出発出来得る如く準備せよとの命あり、北方山中の地形を偵察せよとある。

四月五日

部下二〇名をつれて、北方山中へ通する道路の偵察をす。直西方西南庄方面へ廻つて帰る。二十二時頃、討伐隊西向より中隊長以下七十名、大隊本部及他部隊到着。晋州通ずる常平村附近に五路軍居るとの状態で、これの討伐なり。敵状及道路の状況を大隊長に報告す。

四月六日

四時討伐隊は出発す。小隊より加藤、大沢軍曹以下十五名及配属大隊砲無線も参加、出発。連隊砲交りに残る。<sup>(代カ)</sup> 弘暁山中にて砲声せり。昨日より若干風邪の気味なるも大した事もなさそうだ。十五時頃、機関銃の兵一名昨日馬にかまれ、本日になつて痛み猛烈となり、熱も出て破傷風らしく、ほつておくとも生命にかゝはると思ひ、部隊は少い時ではあるが、略及小隊より安藤伍長、今井軍曹に指揮せしめ、十七名にて沁陽へつれて行く事とし出発せり。二十一時近くになつても懷慶へ行つた部隊帰らず、心配して居つたところへ無事帰還、安心す。

四月七日

西北方山中にて砲声せり。夕方部隊下山するを望楼上にて見えたりと。夕刻土民の言によると、北方山中に本夜敵若干来て居るとの事で、緊張せるも弘暁まで異状なし。

四月八日

本日西向西方の敵を攻撃する予定の大隊主力は、予定を急に變更、清化鎮西方白山附近の討伐中の二大隊、昨日来相当の敵と対し苦戦との事に、此の方面へ前進すべく九時万善村を通過、大隊長に

面会す。配ソクの大隊砲及小隊の兵は、行動を共にするべく続いて出発す。連隊砲は以然小隊に配ソクなり。陣地を構築、試射中、砲口十五米前で砲弾炸裂、兵二名負傷す。手と足にて大した事なきもすぐ懷慶へ送る。北方山頂には又敵の歩哨立哨中を見る。

四月九日

どんよりした天候は昼頃より幾分雨となつて来た。昨日白山方面に討伐に行きし小隊の加藤軍曹以下、正午無事帰還す。配属大隊砲は一時大隊に復帰、代り連隊砲一ヶ小隊警備隊に協力する事となる。明十日一時を期して第一戦区の敵攻撃に出ずるの企図あるらしく、一同充分の準備をし緊張す。

四月十日

三時ふと目をさますと突如の銃声あり。まもなく歩哨の報告ありたる故、全員起床準備をなし、先ず連隊砲をして射撃せしむ。敵は東北方及北方にして、東北よりは迫撃数発来るも盆窟には落下せず、異状なし。まもなく敵は沈黙す。十一時突如大隊長殿来られ、陣地其他を巡視され状況を聴取、十四時帰還さる。

四月十一日

こゝ数日は充分注意を要するので、全員に緊張さす。今朝四時又若干の敵山陵より射撃せるにより、R砲をして射撃せしめ、まもなく沈黙す。午前陣地を補修せしむ。十四時頃、西北千七百の山陵より敵の迫撃砲の射撃あり。先に煙弾にて弾着を見て榴弾数発落下、部落の前後になるため我に損害なし。連隊砲をして射撃せしめまもなく沈黙す。R砲中隊長昨日懷慶へ帰り、本日自動車に

て弾薬百発持来る。

四月十二日

昨夜は平穩なり。十一時旅団長閣下の警備隊巡視あり、大隊長殿も随行さる。陣地、兵室を巡視され、昼飯をすまされ十四時半頃帰還さる。大隊長殿は一寸遅れ懷慶へ帰還さる。西向よりの連絡も来る。昭和六年兵まで今月下旬頃交代、帰還になるらしく、そのいろ／＼な調査の事に就て星野准尉より問合せありたり。

西向よりの連絡者、野砲より借りて来た馬三頭放馬せるため、竹内伍長以下十四名西万庄方面の搜索にやるも、不明だつたこの事で心配せると、夕刻より無電来り、無事捕へたとの事で安心す。

四月十三日

昨夜も平穩なり。十二時又西北方より迫撃砲来り、数発部落前後に落下す。直に連隊砲をして射撃せしめると、まもなく沈黙す。被害なし。

四月十四日

昨夜も異状なし。十六時大行李糧秣運搬し来る。先日來配属となりし連隊砲、大隊砲と交代、帰還す。部隊の交代ありたる為、今晩は敵襲ありやも知れず緊張して居ると、十二時近く突如東方張庄附近より、チッコ小銃の猛烈な射撃あり。全員に起床を命じて先ず大隊砲をして射撃せしめ、MG、lgをして射撃せしむと、まもなく沈黙す。直山王庄には敵らしきものゝ焚火が見えるので、大隊砲をして射撃せしむも火も消えた。本夜は時間も早いのでいつ又敵襲あるやも知れず、全員そのまゝの服装にて眠らせる。

四月十五日

一時以後幸何もなく夜が明けた。本日は軍旗祭だ。懷慶の連隊大隊本部ではいろ／＼な催しがありて賑からしいが、こゝ警備地はそんな事も出来ない。昨日大行李の輸送して来てくれた祝の酒に折詰で祝宴をなす。夜間は酔ふては非常の場合に万一不覚あつてはならず、全員に昼祝宴を行す。

無礼こうの実に愉快な軍旗祭なのであるが、こゝは戦場だ、そんな事も出来ない。咲いて居る花一つない淋しいものだ。而もいつ敵の迫撃砲弾の見舞を受けるか知れないのだ。夜間は特に警戒をげんにす。

十六日

(<sup>状況</sup>脱力)  
昨夜は異なかつた。連隊砲、陣地のあとが土壁がなく危険なので、土民に言ふて修理さす。

十七日

九時木下軍曹、佐藤を長として、張庄、山王庄附近の敵状及土民の動勢を偵察さす。異状なく、北方山中を敵らしきもの二、三名とび歩いて居たとの報告なり。十一時西北方千七百米の、先日敵迫撃砲をうちし地点山頂に又監視らしきもの二、三名有るを発見、機先を制して大隊砲十一発射撃せしむ。土民の言によると、常平村及其の附近 北方山中 には又若干の敵在るものゝ如きも、詳細不明なり。

どんより曇つたと思つたら、雨がぱら／＼やつて来たがまもなくやんだ。ほんの少しだが新緑の樹木は生々として、雨後の初夏は

又格別だ。暖い風にゆらく万草木の音を静かに聞いていると、何ともいへない淋しい様な、こゝが戦場と思へない気がする。

十八日

どんよりくもつたむし暑い様な日で、天気雨とでもいふか時々雨がやつて来る。敵らしきもの西北の山にあるを発見、大隊砲を射たしむ。安茂里の杏の花盛りだと思れる、遠い故郷の事が思い出されて懐しい。

十九日

朝からしと／＼と雨ふりだ。珍しい雨といふてもよいが、これもまもなくやんでしまった。十時頃、河西軍曹の長で西向の中隊より連絡来る。別に用のあつた事でもないが、無線がこちらからうつ(マ)の暗号がよくくんでないらしく、小池上卜兵をしばらく小隊におく事となる。連絡者出發してより西万庄西方にて、友軍機関銃、擲弾筒などの音せり。心配して居ると、三、四十分にして銃声やむ。

夕方大隊よりの電報あり、河西軍曹以下は約三十名の敵と交戦、無事西向へ帰還せりと。午後になつて雨はやんだが、曇つてなか／＼晴れない。

二十日

昨夜も無事平穩なり。九時約二十名を引率して西北方の山頂、先頃迫撃の射ちし高地に巡察す。各個掩体ありしも、迫撃の陣地らしきもの発見せず、十一時帰還す。今日も曇つた日でバラ／＼と雨がやつて来たが、まもなくやみ午後は久々と晴れた。雨後の初

夏の気分又格別よい気分だ。夕方馬乗りす。

夕食をすまして十九時頃だった。シウ／＼といふ迫撃の音と共に一発又一発。又いつもの位に思つて大隊砲をして射撃せしむると、沈黙したかと思れたが、今度は三方より山砲二、迫撃二門にて集中射撃だ。而も弾着良く宿舍内外に猛烈に落下し始め、展望哨にて見ると北方山中にて信号弾の上るを見、今晚は相当な敵の攻撃と判断し、大隊本部へ無電をつつ。二十時頃自分も今晚の重大を知り、全員に覚悟をさせ重要書類を焼却すべく、ランプの下で自分は処分すべく作業中、山砲弾は室の屋根に落下、やられたと思つたが異状なく、煉瓦砂が頭上に落下せるのみで真暗となつたので、灯をつけて見ると机上にビール瓶様のものであり、良く見ると山砲の不発弾だった。実に幸運だ<sup>(た脱)</sup>のである。若干炸裂して居たら、当然駄目だつたろうと思ふ時、神の加護に感謝した。まもなく暗くなり砲弾はやんだ。嵐の前の静けさか、一同益々緊張。

一時間後二十一時、突如北門分哨で二十米まで接近せる敵と手榴弾の投合となり、分哨前に盛に落下、我又応戦まもなく撃退す。二十二時頃だった、部落東南角にて火災となつた家屋在り、夕刻の砲弾でもえ出したのだと思つて、二名にて消しに行く<sup>(た脱)</sup>と敵と衝突、手榴弾を投げられて敵の部落に進入せるを知る。火災は敵の放火せるものなり。我擲弾筒を<sup>(マ)</sup>部落内ヲ射撃、機関銃をして猛射す。本隊より電報にて西向より増援来るとの事を知せ来る。警備隊部落附近は相当なる敵にて包囲され居るらしく、進入せる敵は盛に手榴弾を投げて接近する。一同には各要所／＼を死守を

命じて一步も引かず。

急援隊の来る西向方向では銃砲声が始まつて敵襲らしく聞く。急援が来るのは駄目と思つた。こちらを而し敵の攻撃もこれ位で頑張れると自信がついた。無線班は中央望楼の下に移し、懷慶の本隊よりの電報、こちらの刻々の情況の暗号を組むに大多忙だ。

二十一日

二時頃には、部落に進入せる大部の敵は撃退されたらしく、直一部頑張つて時々手榴弾を投ず。かくして益々緊張の中に夜明近くとなつた三時頃だ、東張庄及山地より猛烈な急射あり。払暁を期しての攻撃でもあるかと思つたが、それもなく夜が明けた。

思へば実に緊張の一夜であつた。西向よりの急援隊は、夜明となつて西万庄附近で戦闘して居るらしく、銃声せり。まもなく連絡来り、時に八時だった。宮坂中尉の指揮する一小隊、mg一分隊なり、重傷二名。夜明けて自分は部落内の敵の侵入せる中を調べ、東南角をも調べて見ると、相当な二〇〇位は近接したらしく一面血だらけで、死体はないところを見ると収容したらしく、それにしても小隊に清水新の中傷、他三名の軽傷ですんだは何よりだった。

十一時頃懷慶大隊本部より宮下軍イ及各弾薬を積んだ自動車来る。二時宮坂中尉は西向に帰還の命あり、出発す。夕刻連隊よりの命令で、連隊砲一ヶ小隊万善警備隊に配属となるの指令あり、二十時無事到着す。今晚は兵力多くなり、一同安心の中にも油断なく警備を厳にす。

二十二日

二時三十分頃東方張庄及北方山麓一帯より、相当猛烈なるチッコ小銃の敵の射撃あり。かねて来るものと充分なる準備をして居りしたため、連隊砲、大隊砲機関銃に射撃を命じ、猛射を浴せ敵の企図を挫折せしむ。敵はまもなく沈黙、北方に退却せるものゝ如し。配属中の大隊砲、連隊砲と交代、昨日の掩護部隊六中隊の一部と九時出發、懷慶に帰還す。更に二中隊の半ヶ小隊、名取軍曹以下二十二名配属となり、十二時到着す。陣地の補修をなし万全を期す。高橋中尉も来る。

二十三日

八時三十分、部下十名を引率して張庄付近の偵察をなす。敵機関銃座その他陣地あり、二十日夜構築せるものならん。土民に命じて埋めさせる。警備隊は陣地の補修をなす。

二十四日

四時頃北方よりチッコ数十発の射撃ありたるも、それつきり止みたるにより応戦せず。駱店方向では相当な銃声せりと。機関の給与係軍曹懷慶に帰るので、掩護がてら佐藤軍曹を長として三十四名連隊砲よりも十名出し連絡にやる。出發して一時間ばかりすると、南方にて盛んな銃声せるので連絡者敵と交戦中と見て、小銃、略、伊芸少尉の指揮する連隊を、高橋中尉を指揮に依頼して急援に向はしむ。急援隊出發後まもなく大隊本部より無線で連絡、考葉頓北方千米の地点で約百の敵と遭遇、加藤軍曹以下三名乗馬にて本隊に知らせ、本隊よりも自動車にて急援に出勤とありた

り、心配す。十一時急援隊帰還す。懷慶連絡者とは連絡出来ず、損害不明なり。

二時電報あり、負傷兵三、馬一との事であり、葉頓附近まで万善村より迎へを出せとの命あり、二中隊<sup>(中隊)</sup>軍曹を長にて二五名出す。六時連絡者無事帰還す。午前戦闘せる地点で、拳銃を所持せる便衣隊一名捕虜として来る。私の損害は機関銃の兵一名大腿部盲貫、連隊砲兵二名頭と足の負傷にて、生命に別状なきとの事で安心す。

捕虜の件について本部へ問合せると、拘留し置けとの命あり。

二十五日

五時頃を期して大隊本部二中隊は、西向の中隊と万善西方四千米の校尉宮の敵を攻撃するとの通報あり、盛んに銃声せり。昨夜はこの警備隊も異状なし。機関銃にてレコードを持つて来り、久しぶりで聞いて、この殺伐な空気の中の生活も幾分なりと慰められた。

二十六日

西向鎮より夏衣袴其他を持参の連絡あり、八時出發との事で、西万庄西方まで佐藤軍曹以下二五名掩護を出す。西万庄西方にて北方高地より幾分の敵の射撃ありたるも、異状なく十一時無事到着俸給支払兵の衣服のへんのう終り十三時半出發、長は根津少尉、午前同様掩護を出す。西万庄西方にて連絡者<sup>(敵)</sup>を待かねて、遊撃せんとしたる<sup>(敵)</sup>に對し、機先<sup>(制)</sup>を製して攻撃、我に損害なく、敵戦死一との事なり。十五時頃、迫撃山砲数発北方より射撃し来

るも被害なし。

二十七日

異状なし。炊事場家屋に住む子供一名、天然痘らしく早速他部隊に隔離させ、大隊本部へ通報、炊事を他へ移転す。明日連隊長巡視されるとの電報あり、いろ／＼準備す。

二十八日

十一時連隊長大隊長同行、自動車にて到着、巡視さる。今までの経過を報告、陣地の視察を終つて昼飯され、兵に此の地の重要、而も小田部隊中の最も苦勞な位置である当警備隊の勞苦をいわれ(マ)、増重大な事を知る。一時三十分帰還さる。配属中の旅団無線、R無線と本日交代す。宮下軍イ来り、本日残りて兵に種痘及身体(検)検査を実施す。小林清三入室のところ帰還す。

二十九日

二時三十分南方を除く三方よりチッコ三小銃の射撃をうけ、尚迫撃を打ちこまれるも損害なし。二時間にして沈黙す。九時配属中の二中队二十二名、宮下軍イ以下懷慶へ帰還す。明日より済源方面の大討伐が開始される關係上。

今日は天長節、十時より南門外広場にて全員集合、皇居に対し遙拜式を行ひ聖寿の万歳を三唱す。平和な内地であつたなら、充分の御祝の出来る佳き日なるも、戦場の今それも出来ない。而しこれも今の国家としてやむを得ない事、支給された若干の祝品で昼連隊砲の伊芸少尉と祝宴をやる。非常に暖かい日だ。なまぬるい風の初夏、ほろ酔で午後はぐっすり後睡(午)、四時までやってしまった。

今日は又砲でも射込まれるかと思つたが、夕刻まで平穩なり。たゞ朝より丹河東方にて盛んに銃砲声せるも、いずれの地なるや判明せず。

三十日

西向鎮にありし電気隊、万善に協力となるとの電報あり。十四時二連隊を主力とする豊島支隊、清化鎮方行より来善、本夜万善に宿営す。なまぬるひ風吹いて、真夏の様な熱さでねぐるしくて仕方ない。夕刻、宿舍の二一の報告によれば、二、三、四日の間に敵は清化鎮、懷慶、西向、万善村を大攻撃するの企圖ありとの事で、本部へ報告す。

五月一日

四時頃二連隊の一大隊常平村に向ひ前進。まもなく敵と遭遇が、北方にて盛んに銃砲声せり。夜明けてより同隊相当苦戦らしく、負傷も若干あるらしく衛生隊出發す。十一時自動車の電気隊到着午後早速東張庄附近より作業す。常平村討伐部隊は終日激戦の模様にて、盛んに銃砲声せり。夕刻泌陽より豊島支隊の負傷者収容に自動車来り、日暮れと共に討伐隊帰還す。

話に聞くと敵はなか／＼頑強で、再三の突撃で敵損害甚大なりと死百数十との事だ。我軍にも相当な犠牲あり、戦死十一名、負傷多数なり。電流鉄条網に討伐隊の道を間違た一部東方より来りてかゝり、幸生命に別状なし。

五月二日

一時頃豊島支隊西方済源方向に前進す。二時懷慶より負傷者収容

に自動車七台来る。午後西方に電線を架設す。

五月三日

一時連隊本部より電報あり、許良附近に約四千位の敵集結、注意を要すとの事なり。電気隊居るので先ず安心なり。而し油断なく万全を期す。尚又電報あり、該敵を清化鎮部隊討伐するにつき、敵と間違へざる様となり。終日盛んなる銃声、砲声せり。夕刻山中に撃退されし模様なり。

五月四日

電気隊懷慶に連絡あり。警備隊より掩護<sup>(在脱)</sup>かねて二〇名連絡 大沢軍曹 以下を出す。私物品整理のため持参す。九時三十分電気隊張庄附近の電線を補修中、便衣隊の射撃を受けたるにより、直に撃退す。十五時懷慶連絡者無事帰還す。

五月五日

朝西方遠くにて約三十名位の敵の射撃ありたるも異状なし。夜十二時済源方面の討伐隊無事帰還せるの電報あり。

六日

密偵の報告により山王、張庄に相当なる敵あり、保長を集めて三日以内に当警備隊を攻撃の企図ありと宣伝せるとの情報を得、大沢軍曹以下十数名の斥候を出してそうさくの結果、敵なきも今まで相当居住し居りし土民は、保長を始め殆ど逃亡せりとの事で、二、三日中に敵襲あるものと一同緊張す。東部よりの電報で西向が千数百の敵に包囲され、懷慶より一ヶ中隊の増援あり、万善も注意すべしとの通知あり。明後八日、内地帰還者西向へ集合せし

めよの命あり。

七日

二時西北より重迫、軽迫の射撃あり、続いて西方よりチッコの急射撃あり、全員配置につける。南方を除く三方より猛烈な射撃し来るも、電流鉄条網架設しあるため接近せず、遠方にて射撃せるのみ。二時間にして退却せる模様なり。

明日は出征以来、或は第一補充として一年八ヶ月生死を共にとちかつた部下、木下軍曹以下二十三名交代帰還の日だ。最後の夜、なし／＼の酒 二升 で心ばかりの送別の宴をやる。たゞ涙が出て仕方なかった。戦場に来て生死の間をさまよったもののみ知る心境である。明日帰るそれ等兵も、戦場最後の一夜もゆつくり宿舎でねむる事の出来ない情況なのだ。歩哨に立ちて緊張の一夜を過ぎねばならぬのだ。夜になつてもいろ／＼な事が次々と思出されて、どうしてもねむれなかった。

八日

九時西向よりの連絡者を迎へに二五名西万庄西方に出す。まもなく同行で銃声せり。心配し居ると伝令来り、邢台<sup>(部)</sup>東南にて宮坂中尉の指揮する一ヶ小隊敵と交戦中にて、急援たのむとあり。伊芸少尉の連隊砲一分隊、機関銃一分隊を増派す。三四〇〇の敵に包囲されたらしく、漸くにして切りぬけ、西向より戦車二台来り、十五時三十分到着す。戦死一名、負傷九を出す。三十分にして出発すべく、戦車は西万西南に居りとして準備し居ると、戦車も包囲されて漸く警備隊西方までのがれ来り 負傷一名を出す、故障



を起こす。修理に相当時間を要するので、一旦出発せる宮坂中尉以下は又引かへす。

いよ／＼最後の帰還兵と敬礼した時の悲しさ、見送るもの、帰るもの、たゞ涙だ。弾丸雨飛の中をもとめせず奮闘した勇士も、たゞ声をあげて泣いた。これがほんとうの男の泣<sup>(涙力)</sup>だのだから、この事を経験せるものでなければ知る事が出来ないだろう。晴れの内地帰還の其日まで戦争をし、帰る時間さえ予定の如く行かぬのだ。而も目の前には戦友の死傷者が横つて居るのだ。これ等勇士の心境はどうであつたろう。

懷慶より中山軍以下自動車で患者収容に來り、夕刻になつて懷慶、万善間道路方向に敵の移動せるを見、歸れず、懷慶へ電報にて途中まで掩護隊を依頼す。戦車も日没頃には直つたので、夕飯をすまし二十二時戦車を先頭に宮坂中尉以下も泌陽方面を宇廻、自動車隊、歩兵の準に出発す。木下軍曹以下の小隊帰還兵も、数々の思出を残して暗の中に消へて行つた。又目がしらがあつくなつて來た。

帰還兵の交代として吉岡軍曹以下二〇名 中五名本日負傷、自分の間小隊配属となる。吉岡軍曹は今度小隊の連絡下士と決定す。初年兵は本日着隊式、星野准尉これが受領のため懷慶におもむいたと。而し当分中隊に於て教育する事となる。夜電報にて、明日野戦重砲一ヶ小隊配属との命あり。

九日

昨夜は別に異状なし。十二時頃より常平村附近にて銃声せり。敵

の同志うちか或は試験射撃なるか不明なり。十五時塩原少尉の指揮する二ヶ分隊の援護のもとに野重來り、大隊長 野重の も來られ、十七時出発す。野重には東方の連隊砲陣地附近に位置してもらひ、東南より西北にかけて射撃し得る如く準備してもらふ。常平村に向ひ、野重の射撃数發行ふ。

十日

密偵の報告によると、第四十軍々長龐<sup>(炳)</sup>丙勲常平村に居りと。兵力不明なり。丹河東方の山に陣地構築の敵を發見す。

十一日

大行李の糧秣輸送途中異状なく十時到着、伊藤軍曹同行す。十三時三十分出発す。

十二日

敵情に関し大なる変化なし。後方道路、沙灘園附近を修理を命ず。

十三日

異状なし。明払曉大隊主力景明村払曉攻撃するの命ありたるにより、密偵を派し偵察するも敵なし。懷慶へ電報にて知す。

十四日

小隊二十八名、mg一分隊を引率、五時出発西万庄南方に至り、配備について夜明を待つ。敵なく八時景明村北方にて大隊主力と連絡なり、大隊長と共にいろ／＼取調べ十三時三十分帰還す。二時より警備隊に於て演芸会を催し、各隊いろ／＼と芸あり、愉快な半日を過す。今警備隊の人員は二百三十名なり。

十五日

警備隊長会議出席のため、電気隊の自動車四台に掩護兵を分乗、出発す。道路悪い箇所も二、三あり、十時三十分無事懷慶着。途中新郷へ行かれる連隊長殿と会ひ、情況報告す。電気隊急の命にて配ぞくとかれ出発す。十四時より会議<sup>(開)</sup>会催、五時終了す。吉岡中尉と共に篠原中尉の許をおとすれ、帰り西沢中尉のもとにて宴会をやつて居るところで一話し、大隊の宴会を出席す。

十六日

連隊本部其他へいろ／＼と用を<sup>(達)</sup>遠し、大隊本部へ十時行く。昨夜は電気隊引揚た関係が、東より若干の敵襲ありたりと。十三時重砲、弾薬と共に自動車三台、二中隊の援護のもとに懷慶出発、十四時三十分無事帰還す。

十七日

一時東方張庄附近に信号弾上り、四時万善南方にて数発の銃声せるのみにて異状なし。又西北五千米の山頂に、二、三日前より相当なる陣地構築の敵あり。今朝はそこにて体操を実施居りたり。他変化なし。

十八日

最近山中の四十軍も交代せるか、今まで現れた事のない地点に敵を発見す。本日も三千米位北方に、二、三〇の敵陣地構築中を見、連隊砲をして射撃、命中し多大の損害を与ふ。死傷収容の敵を良く発見出来たと、伊芸少尉の報告あり。予防接種のため懷慶より連絡ある予定なるも、夕刻になるも音沙汰ないため電報をうつて見ると、道路破壊甚しく途中にて引かへしたりと。夜二十時

懷慶より一小隊、略<sup>(隊脱)</sup>一分道路修理に来るにより、警備より一部出せと命あるも、二十二時頃電報を入手せるため中止す。

十九日

六時大沢軍曹を長として、二五名道路修理のため出す。十時完了、無事帰還す。万善南方にて、東方よりチツコ小銃の射撃を若干受けたるも損害なし。十時中山軍イ以下赤痢の予防接種に來り、十一時三十分西向に向ひ出発す。丹河東方許良附近で夕刻より猛烈な銃砲声せり。利光君より軍人団員の住所、家族の写真なぞ送つてもらふ。友人達の全支に渡る部隊が判明し懐しく感じた。

二十日

四時ドン／＼といふ音に眠つて居たが目がさめた。而し数発にてやんだので夢うつゝに聞いて又眠り、夜明けて歩哨よりの報告によれば、迫撃砲だったと。幸部落に落下せず、我応戦せず。午後密偵の報告によれば、十数万の敵黄河を渡河して北上せりと。校尉宮に一千名、虎子村に五〇〇、邗台に便衣隊一千居り、五日以内に警備隊を攻撃すると土民に言ひたりと。真偽不明なり。尚後方石庄、王庄又山王庄附近には、常に便衣隊の出没あり、我行動を探り居るものゝ如し。一増緊張を要す。

二十一日

異状なし。

二十二日

配属野戦重砲の連隊長、同隊の巡視のため来善されるとの電報あり。七時大沢軍曹を長として、二五名途中道路の偵察に出發せし

む。十一時海野大隊長同行、野重の連隊長及同大隊長、中隊長、其他將校数名到着、野重隊の巡視あり。昼飯は警備隊本部にておこなふ。宮下軍イ以下の予防接種班も来り、十三時西向に出発。大隊長は連隊長と同行、十四時三十分帰還さる。

二十三日

十時懷慶出發、中山軍イ接種に来るの電あり、十二時三十分到着す。途中道路の破壊甚大のため遅れたり。二時三十分西向に向ひ出發す。夕刻北方山中一軒、養老湾に山砲を有する敵進入せりとの密偵の報告あり。

二十四日

敵状に關し新報を得ず。本日は帰還兵いよゝゝ懷慶へ集合との事で、木下軍曹より無事着の電報あり。

二十五日

最近敵も消極的となり、各警備地共に平穩なりと。毎日雨なくかんゝ照りつけてすっかり夏だ。土民は麦の刈取りに多忙の様で働いて居る。

二十六日

八時大沢軍曹以下二五名ヲ沙灘園附近まで出シ、懷慶よりの予防接種隊の掩護に任せしむ。十一時中山軍イ以下にて接種を実施、十三時三十分西向二向ひ出發、まもなく南方にて銃声せり。折から野重の連絡自動車一台来り、約一〇〇の敵と交戦、野重の連絡者下士官一名負傷との事だ。吉岡軍曹を城内へ連絡にやる。本日はピー三名来り開業す。夜間接種の為熱が出て苦しくて困った。

二十七日

午後接種のため軍イ来る予定なので、十三時佐藤軍曹以下二五名掩護に出し、十六時途中まで掩護に任せしむ。昨日十七時西北方より迫撃五発射たれたるにより、SA、RAにて射撃、沈黙せしむ。鳩通信新に配属となる。

二十八日

異状なし。珍しく雷と共に大夕立あり。

二十九日

雨後の清らかさ、何とも言へない。万木皆生かへつた様だ。十三時自分が戦闘一ヶ分隊を指揮、野重の田谷少尉以下觀測班、伊芸少尉のRA若干と西万庄東方に至り、山中敵の根拠地常平村に野重十数発射撃す。堅固なるトチ力陣地あり、砲弾のため敵の移動する様がよく発見出来た。田谷、伊芸少尉を招し会食を実施す。十二時頃万善南方にて、チッコ小銃の銃声三十分渡りせり。沙灘園附近へ便衣隊の入る威嚇射撃と判断す。

三十日

予防接種隊来善の予定なるも明日に延期さる。午前伊芸少尉と乗馬演習を実施す。午後南広場に、佐藤軍曹をして竹にて金棒代りとし運動を実施す。雨上りのどんより曇つた日だ。かんゝ照るより気持がよい。夕方になると乗馬演習、体操がたゞってふしぶしが痛んで仕方ない。二、三日雨のため涼しくなつた。十一時半頃まで雑談で終つた。

三十一日

一時頃万善南方で又銃声せりと報告あつた。何のためどこへ行く敵が知れないが、あきれたものだ。それでも最近こゝへこなくてうるさくなくて幸だ。今日は渉走にて接種に来るので、途中まで佐藤軍曹以下二五名を掩護に出す。別状なく十一時着、十三時出發す。竹内伍長具合悪いので懷慶へ診断にやる。泌河の橋が先日の雨で流れ、新橋は未完成、自動車通過不可との事だ。

二十七日の大夕立後天候が悪くなり、毎日ふつたりやんだりだ。雨季となつたのかと思れる。昨年の丁度今頃は曲與集でこんな天気だつた。米はなく、連日砲弾の雨に天候悪く、いやになつた時だ。あれから一年になる。MGより火野葦平の「土と兵隊」を借りて読んで見て、一増過去の戦闘が思出され、懐しく感じられる。連絡者無事歸つた様だ。雨が又ふつたりやんだり涼しくて凄ざよい。

六月一日

密偵の報告によると、敵は泌陽、博愛兩県民に、麦は六月十日頃までに刈取る様に、而る敵は日本軍を攻撃すると宣伝せりと。

六月二日

糧秣輸送掩護のため、佐藤軍曹長にて二五名途中まで派し、掩護に任じせしむ。十五時異状なく糧秣及野重彈藥到着。十六時帰還す。本日懷慶へ三五師団長閣下巡視に来られたとの事だ。酒保のすな元君にタオル十四枚を送り、縫ってもらつたネマキ到着。ゆる／＼した気持で今夜はねむれた。

三日

なんだかんだともう六月だ。数日來の悪天候もあがりからりと晴れた上天気、こゝ／＼と西風が青々した樹木をゆすつている。こゝへ到着頃は未だ芽を出さなかつた庭のザクロも大きなやつとなり、まもなく食れるかと思れる位となつた。いつまでこゝで警備するか知れないが、敵もやつてこなくなり何かと楽だ。

四日

八時三十名を指揮し沙灘園附近の敵情、地形及道路の景況を偵察、十一時帰還す。道路は最近良好なり。

五日

大隊本部より電報あり、西万庄に中央軍二連進入、注意を要すとの事で、直に警備隊に於て搜索の結果敵なし。そのむね懷慶へ打電す。尚山王庄に常平村より下山せる便衣隊若干ありと。三日以内に我を攻撃すると各保長に通報せりと。他敵情に関し新報を得ず。

六日

本朝得た情報は、本日より三日間敵は我を砲撃する事により、午後になつたら土民は避難せよとの事なり。油断せず警備を厳にするも、夕方になつてもそれらしい気配もなく、砲撃なし。

七日

大行李糧秣輸送ありとの電報に接し、大沢軍曹を長に二五名途中の掩護のため出發せしめると、入異いに万善村保長三名顔色をかへ、今万善南端に敵進入せりとの報告あり。残員に出動準備を命じ準備中万善にて銃声、大沢軍曹以下交戦の銃声せり。自分は一

ケ分隊を指揮急援に向ふ。此の時東方張庄及馬店<sup>(カ)</sup>附近より万善村は猛烈な射撃を受くるため、RA、MGをしてこれを射撃せしむ。敵はまもなく東北へ退却、此の時沙灘園附近にて大行李又敵と交戦の様子なので直に同方面に進出、東方に撃退す。万善南端にて路上斥候として前進中、村山上等兵民家二階に敵の居るを発見、手榴弾を投げられたるにより、これをさけんとして前方よりチックコの射撃をうけ、背、腕に負傷す。直連隊砲の兵十名も足に軽傷を負ふも、二人共生命に別状なし。主力万善南方にて戦闘中、RAは西万庄より五、六の敵の射撃を受けたるにより同方面を射撃、又北方千七百の関帝廟附近に敵迫撃の陣地進入を発見、野重を射撃、第一弾命中撃滅す。懷慶より高橋中尉以下歩兵一ヶ小隊、mg一分隊、大隊砲一小隊自動車にて急援に來り、山王附近を討伐、十四時帰還す。

八日  
本日<sup>(カ)</sup>の敵は二、三百の兵力らしく、万善を攻撃する意図で來たものと判断出来る。夕方は緊張して居るが異状なく、敵情に関して新報を得ず。

九日  
昨夜は至敵なる警戒をなし緊張し居りしも、異状なく平穩なり。密偵の報告によると、邗台、景明に若干の便衣隊居り、他は敵なく、其他新報を得ず。

十日  
異状なし。

本日より西向に無線一配属せらる。十四時より交信を開始す。

十一日  
二十一時北方より迫撃二門の射撃をうくるにより、SA、RIA二テ応戦、一時間にて撃退す。多くは部落外に落下し損害なく、落下数は数十発なり。夜間は異状なし。

十二日  
大行李糧秣輸送あるため、途中掩護として大沢軍曹以下三〇名、七時出発沙灘園附近まで前進せしむ。異状なく十三時大行李出発す。

十三日  
三五師団の西村星雄部隊長以下將校二十数名來善、山地方面の偵察をなし十二時帰還す。掩護として佐藤軍曹以下二五名、万善南方まで派し掩護に任せしむ。北方山中に敵の監視らしきの盛んに出没するにつき、RIAにて射撃す。其他変化を認ず。

十四日  
八時三十分西向より中隊長以下戦車、野砲一ヶ小隊來善、初年兵も十六名配属さる。明日警備隊長会議 連隊 につき、西向に中隊長と共に同行す。西向にて中隊長部幾日ぶりかで一諸<sup>(緒)</sup>となり、宴会なし、愉快な一時を過す。

十五日  
二時西南より若干の敵襲あるも大事なし。七時中隊長と一小隊援護のもとに乘馬にて出発、懷慶に出發す。十時着 十五時より連隊本部にて会議、七時より東亜食堂にて宴会あり。

十六日

本日は連絡ないため一日懷慶にて遊び、夕飯に本部にて宴会をなす。

十七日

八時大行李と共に万善に向ひ出発、十一時無事到着す。

十八日

連隊長新着任の宣撫官を引率、九時懷慶出発来善なるにつき、大沢軍曹以下二十五名途中掩護に任せしむ。異状なく十時着。一時間半にして陣地の巡察、小休の後帰還さる。

十九日

藤沢正美十時頃より腹痛、盲腸炎の疑ひあり、十四時本部へ打電、滝沢衛生伍長以下自動車にて患者收容に来善、掩護として安藤伍長以下二五名途中まで派す。途中異状なし。

二十日

夕刻迫撃数発を射たるも、盆屋北方山麓に落下せるため被害なし。RIA、SAにて射撃す。

二十一日

久しぶりで初年兵の教育に出る。各個戦闘教練、可愛い兵隊に見えて暑いさなかの演習、気の毒の様にも思れるが、戦闘にやくだためようでは仕方ない。最近密偵報を得るも、敵情に關して新報を得ず。山地方面は時々出没するも消極的なり。

二十二日

小隊全員の射撃演習を実施す。どんよりした射撃日和だ。特に初

年兵に重点をおく。lg小銃、擲弾筒、手榴弾、十二時終了す。

二十三日

最近敵情も大なる変化なく平穩だ。熱さは烈しい、身がだるひ。本日は特にむし暑く感じた所、夜となつて猛烈な雷雨だ。先日来早魃の事とて、支那人達は畑に、灌水に、なか／＼骨を折つて居る。本夜の雨はまさに千金に相当するなか／＼の豪雨だった。

二十四日

からりと晴れた雨の後、早起きして体操でもして見ようと思つて居たが、涼しくて寢心地よいものでねぼしてしまった。豪雨後だから陣地なぞ心配となつたが、高地のため被害なし。午後伊芸少尉遊びに来て半日過した。密偵報によると敵情に關しても変化ない。

二十五日

懷慶よりの電報にて、北方山中の敵が盛んに移動して居るとの事なるが、状況如何の問合わせあり。西方四千米の高地を敵の約一〇〇下山するを発見、十二時更に二〇〇の敵北方に移動するを発見、RIAにて砲撃す。其他異状なし。十四時懷慶より自動車連絡ありとの電に接し、一昨日の豪雨で道路不良箇所あり、佐藤軍曹以下三〇名を十二時出発、道路修理及掩護に任せしむ。五時自動車無事着、六時帰還、掩護兵七時帰還す。二十一時三十分西北方より迫撃の射撃と共に、約一〇〇のチッコを有する敵攻撃し来り、SA、RIAにて砲撃、撃退す。損害なし。SA、RIAの山の中腹への射撃炸裂の物凄さ、又美しさ、納涼大会の花火を見て居る様な感じがし

た。以後静かにして異状なし。

本日自動車隊の小隊長として、学校時代の友人河合少尉に会って、珍しい又こんなところの面会で実に驚いた。君は昨年応召との事だ。懷慶に居るので再会を約し一時間話して別れた。

六月二十六日<sup>(X)</sup>

山王庄に敵の山中への物資購入のため、便衣隊が毎朝来る事を偵知、部下五〇、RIA 伊芸少尉指揮 一分隊と五時三十分出發、安藤伍長以下十五名を山麓を宇廻、包囲体形とりて前進、山王西北にて安藤伍長以下はチツコを有する三〇の敵と不意に衝突。敵は<sup>(マ)</sup>地陣内の家屋にて休んで居たところ、不意をくらって山中に逃亡、手榴弾五、弾五〇を鹵獲す。同時刻主力は、東南より便衣隊の数名射撃をつくるも東方に撃退、山王庄に進入するも敵なく、八時一同無事帰還す。八時三〇分西北四〇〇〇の高地に、四、五〇の敵移動するを発見、RIAにて砲撃す。以後異状なし。明日大隊兵器検査のため、本日小隊の兵器検査を午後実施す。

二十七日

大行李糧秣輸送掩護として、大沢軍曹以下二五名途中まで派す。兵器検査員として塩原少尉、長尾工長等来善、十一時半より検査を実施す。宮下軍医も同行、衛生状態を検査、十二時大行李と共に帰還す。

二十八日

九時までねぼしてしまった。朝はひやりとする位の涼<sup>(さ)</sup>だ、寢心地よいので。先日来の時々<sup>(さ)</sup>の雨に見舞れて、草木は青々と一増の

緑色を呈して美しい。

二十九日

九時上等兵候補者を集めて、駐軍間の警戒について学科を行ふ。又雨でもふりそうか、珍しく入道雲が出て、吉岡軍曹と写真撮りとど歩いた。支那ではこうした夕立雲はなか／＼出ないのだ。四時まで後睡、どこか／＼と雷が始まってふり模様となる。敵情に關し、二、三日前欄車鎮より校尉營に下山せる土民により、同方面の敵情を知り、本部へ鳩便にて報告す。各部落を総合して約二千名位の敵が居るらしい。

三十日

敵状変化なしだ。むし暑い日だ。昭和十四年も今日で半分終った。そんな月日が経たと思へない懷慶と、この敵の居る万善村の警備だ。こゝへ来て三ヶ月余だ。夜は満月に近い月が東より昇つて来た。西南の歩哨の近くで此の月を眺めて夕涼み、いろ／＼な事が思出される。黒岩上等兵と話していたら、いつしか十二時近くとなった。

七月一日

朝は涼しくて寢心地よい。敵も北方の山へはなか／＼多く進入、陣地構築に余心ない様だが、出撃して来ないのでうるさくなくてよい。故郷の村人へ暑中見舞を一心に書いて手が痛む位だ。今は田植の最盛期だろうな、そんな事を思い乍ら書いた。午後三五Dの工兵隊中隊長、自動車にて北方山中の地形、道路偵察に来て、十六時新店附近を偵察して歸られた。いよ／＼北方の敵も近い中

に思ふ存分たゞかれるのだ。一日で兵隊に酒を飲してやる。慰安として何も無い今、それでも酒を飲んで気持ちいいか、あちこちで唄の音がして来る。

## 二日

三五Dの飯田兵団長閣下、北方の敵状、地形偵察のため、海野旅長同行来善との事で、安藤伍長以下掩護に出す。十一時兵団長以下無事到着、種々偵察の結果十三時帰還す。安藤以下は途中道路不良箇所あり、修理し十四時帰還す。閣下の言によると、七、八日頃いよ／＼三五Dは北方の敵を攻撃開始、晋州に向つて前進するらしい。

## 三日

北方の敵は時々部隊で移動して居るを良く見つけられる。土民の言では、常平村に二、三日前より敵が増加した様だ。通行禁止<sup>(止)</sup>で詳細不明なり。

## 四日

いよ／＼三五Dの討伐作戦もせまり、本日十一時峯木部隊の一大隊警備隊着。情況偵察の結果、午後西万庄に入り、本日より北方山地の敵情を搜索する事となる。懷慶よりの連絡あり、佐藤軍曹<sup>(下脱)</sup>以二五名掩護を出す。夜に当小隊は、別命あるまで飯田支隊の指揮下に入るべしの命令に接す。

## 五日

今度の作戦に協力する戦車の連隊長、地形偵察に来善。又峯木部隊長多数將校と来善、攻撃の区署さる。RIA小隊配属とかれ、十四

時懷慶に帰還す。本日友軍爆撃機、二機にて常平村及許良北方敵陣地を爆撃、目のあたりに見て愉快なり。息のとまる様なまぬるひ風が吹いて、実に暑い日だ。

## 六日

三五Dの北方山地の敵掃蕩戦も、最近となり続々と部隊の集結を見、今まで此のへんびな淋村万善も日本軍で大混雑だ。廟後から万善まで延々と部隊が続いているそうだ。正午頃峯木部隊本部到着、吉岡軍曹の室を部隊長にあてる。小隊は主力を以つて峯木部隊に配属となり、R本部護衛となる。夕刻には飯田支隊長も到着、RIA後を本部にあてる。なにがなんだかこた／＼して居て、熱さは猛烈、全くつかれた。

## 七日

峯木部隊と四時三十分出発の予定なるも変更となり、七時三十分部隊長と共に関帝廟附近に至り、敵陣及地形を偵察す。読売の原記者自分のところへ泊る。小田部隊へ来て居るのだが、今度三五Dと晋州へ行くとて来た。暑くていやだなとあまり気乗りしないらしい。昨夜の暑さは又別だ。夕刻より峯木部隊配属をとかれ兵団の指揮下に入り、一部を西万庄附近、砲兵の掩護に任ずべしの命あり。安藤伍長以下十六名を同任務に派す。第一線大隊は逐次各高地を占領、常平村に対する攻撃準備中。

## 八日

昨夜の暑さは始でた。夜明と共に益々涼しくなるのに本日は反対むし暑く汗は／＼流れ出て寝ていられない。四時頃起きて涼



んでねた。峯木部隊長は昨夕刻出發せるも、残員は本朝出發す。払曉を期してSA、Aの常平村に対する一撃射撃あり、その音で眼が覺めた。読売記者原君も本朝出發せり。昼飯後MGの今井軍曹、阿部上等兵をつれて、乗馬にて西万庄の安藤以下を巡視す。時々SA弾(マ)の砲撃あり、常平村附近は爆煙で物凄い。三台の友軍機にて常平村敵陣地を爆撃、天地も共にその力の音の響が聞いて来る。夕方峯木部隊の羽賀大隊長手榴弾にて負傷せられ、吉岡軍曹の室にて本夜休息す。腕と足にて骨挫なし、元気だった。詳細不明なるも、将校以下の戦死も相当ありと。堡壘式の陣地で相当な堅固なりと。又むし暑い日だ。

九日

夜明頃となつて雷雨となつた。まもなくやむと思つたがなか／＼やみそうもない。北方山地の三五Dの攻撃部隊も、本日は攻撃中止となつたか時々砲声するのみだ。飯田支隊長が新店方向を通過、老馬岑附近に進出せり。雨は夕方になつてもやまず、梅雨性の雨だ、やみそうになつてやまない。西万庄の星野部隊の野砲が昨夕常平村方面に出發、残員を安藤伍長以下掩護中のところ、本日万善村南端に移動せり。夜間のみ分哨を派遣す。

十日

雨は以然ふり続けて居る。此の雨中北方山地の攻撃始まつたが、銃砲声が物凄く聞へて来る。にくい程の豪雨だ。地の利を得て居る敵、山岳戦攻撃する友軍、三五Dの将兵が思やられる。午後になつて幸雨はやんだが、豪雨の為、警備隊中央の道路は濁流と

／＼として流れ、物凄い音だ。北門分哨陣地は破壊され、南門砲陣地の排水口よりくずれて、水は分哨東南の広場に流れ出て、一面大湖のような水だ。而し雨やんで水もまもなく減少(く脱)、それでも警備隊は高地のため附近は水たまりがなくなつて幸だ。左翼隊校尉宮附近より攻撃せる部隊の負傷者二十数名来るも、連絡なく送る事出来ず、懷慶内山中尉より電話あり。而し自分達の任務は変らず、今後の行動不明なり。夕方までに常平村北方省境線(河南省、山西省)を占領せる模様なるも不明なり。担架兵重傷者を懷慶へ送るので、夕刻佐藤軍曹以下十一名途中まで送らせる。

十一日

どうやら雨はふらぬらしいが、梅雨気味ではつきりしない。話に聞くと、新店附近の丹河橋梁及下流懷慶、清化間の橋梁も、豪雨のため流失せり。三五D作戦部隊の糧秣不足をきたしたらしく、自動車隊は新店附近に立おゝじょうらしい。下山せる兵の言によると、先頭は大口村附近まで進出せるものの如く、閣下は常平村に在り、司令部残員は夕方出發の予定なり。十七時三五D輜重部隊長懷慶へ駄馬借用に行く予定のため、鈴木上卜兵以下四名掩護として同行さす。自分達の其後の命令なく、不明にして困却して居る。

十二日

四時輜重部隊長と共に鈴木達帰還す。同部隊長よりの命令を傍読するに、万善村警備隊は常平村警備をなす様軍隊区分を見、起床後出發の準備をなさしむ。九時佐藤軍曹以下十名、常平村支隊本

部へ命令授領<sup>(受)</sup>に向しむ。今後の自分達の行動も以然不明にして、なんだか気がくしゃくしゃして来て仕方ない。十六時佐藤軍曹帰還により自分達は飯支隊<sup>(田脱)</sup>の指揮下をはなれ、命令はなく、今後は小田部隊長の命を待つ様言れたり。常平村附近の敵陣地は相当堅固なもので、敵の死体ごろ／＼して居たと佐藤の言なり。天候ははし／＼しない梅雨気味で、雷も夕方鳴り出した。もう雨は降らしたくない。考へただけでもいやになる。十二日行動開始の晋州攻略部隊も連絡不可のため、二、三日遅れる様子なり。

十三日

三五D Aの星野部隊長以下及SA大中隊の主力は、本日常平村より下山、万善村に集結す。自分達の今後の行動は以然未定なるため、新店に在る富津隊へ大沢軍曹以下十名連絡に向はしむ。大隊本部より、現在地にてしばらく警備を続行すべしの電あり。五時大沢軍曹帰還するも詳細不明なり。夜間になって又雨ふりとなった。長ぶらない事を念じつゝ寝に就く。

十四日

なか／＼雨の降りっぷりがよい。其後に来る水の氾濫が心配だ。毎日出発準備して待期。雨は遠慮なくふる。気がむしゃく／＼して来る。暑いといつても天気の方がよい。実際雨はいやになる。先日同様又／＼と音を立て、道路を流れて居る。夕方になってもついにやまずにしまった。連隊よりの電報にて三五Dの直<sup>(轄)</sup>かつなり、SAの配属は自分の命令にて配属をとく様にこの事だ。

十五日

天候は以然悪い。R本部より電報にて、小隊は三五Dの指揮下に入つたにより、速に常平村に向ひ警備せよの電報あり。明日出発の予定なり。而し被服、私物の梱包の送附に困る。大隊本部よりも別に指示なく、Rよりは若干の監視兵を残して出発せよとの事であり、星野部隊も居る事だし、数名を残しても心配なく其の決心をす。昨日の雨で又新店附近の丹河橋梁流失との事だ。暑い／＼といふ位がよい様に思ふ。雨は实际いやだ。

十六日

いよ／＼長い間の警備地万善村に別れの日、宮下競上卜兵以下六名残置して出発の準備を進めると、砲兵隊も又明日懷慶に出發との事を聞き困つた。六名では残つて荷物の監視は不可、仕方なくSA大隊の太行李の車輪に頼んで、新店二大隊に運んで依頼するに決し出發せしむ。掩護として北沢上卜兵以下十名を向はしめ、他は常平村に向ひ前進す。第一線飯田支隊へも糧秣思ふ様に支給されずとの事を聞知し、味噌、醤油其他食料をなるべく多く持つて行く事とし、土民二百名を雇ひ出發す。

思へば長い、出征以来一番長い警備、而も敵も多く攻撃し来り、幾多の体験をせる万善村よ。雨はふつたりやんだりして梅雨は続く。土民二百名の行列は大名行列を思する。常平村手前の高地に昼飯、新郷平地一望に眺める絶好の風景だ。十二時三十分常平着先日まで敵の大軍の防禦せる地、其の陣地の堅固さに驚いた。それにしても二日間ふり続いた豪雨の中を、よくも攻撃せる友軍にそして此の高地に散つた七〇名の戦友の霊に、感謝の念がわいて

くる。はい跡　せる此の村、血なまぐさい一陣の風が吹いて来る新戦場、敵の死体がごろ／＼して居る。真夏の事で臭気鼻をつく。午後は晴れとなった。敵陣を分隊長と廻つて益々堅固な陣地に感たんす。二回万善へ荷物を持ちに行った向山上ト兵以下夕方帰る。又雨となった。久しぶりの行軍で疲労、早く寝に就くと宿舍へ雨がもつて又一苦勞、一晩中大雨な様とひ／＼してまんじりともしなかった。

十七日

常平村第一夜は明けた。雨はふつたりやんだり、寢室にも以然雨がもつて、小林に修理してもらふもなか／＼直らない。一日中雨のためなやまさる。晋州攻略部隊の後続部隊が、この雨の中びしよぬれとなつて前進して行く様を見れば、宿舎に雨が落ちる位頑慢出<sup>(来)</sup>出る。而し雨々々、此のいつ晴れるかも知れない雨には憂鬱になる。山に來たための涼さか、雨で涼しいのか、秋風の感じをいだかせる強い涼しい風が吹いて、夏じはんでは寒さを感じる。食のうまい事も涼しいためである。

十八日

此の真夏といふに身体が冷ひるためか、夜便所へ行くには驚いた雨もどうやらやんだ様で、漸次青空が見える様になった。晋州へ／＼と部隊は前進して行く。午後十五連隊の大隊長の指揮する二ヶ中隊が、晋州へ向つて前進するを見て聞いて見た。封邸附近より此の作戦に参加の目的を以つて來たと。常平村北方一里大口村より晋州までの警備との事で、同師団の十五連隊と聞いて懐しく

感じた。夜になって天候益々快腹となり、幾日ぶりかな、憂鬱な雨から開放されると思へば氣も晴々する。

十九日

兵が入浴場を立てゝくれた。しけ／＼した天氣に悩まれ、四日ぶりで此の常平村で入浴せる気分又格別だ。而も天候回ふく。本日は三五師団長閣下が前進されるので待つて居ると、十二時頃通過自分の室にて一時間半休止され昼飯を食されて居ると、本日八時晋州へ飯田部隊入城との事、前田師団長閣下以下参謀長、他の將校と、自分の室といつてもむさ苦しい常平村の一角にて、シャンパンをぬいて祝盃を上げ、万歳を三唱す。師団長閣下と紀念の撮映をし、十三時半晋州へ向ひ出發さる。本日は又次々と部隊自動車、戦車、輜重が晋州へ向つて前進。十数日前まで敵の陣地此の山村常平村は、これ等の部隊でこつたがへして居る。淋しい事も忘れて居る。夜となつても自動車隊は続々と北進して居る。

二十日

涼しいまゝぐつすり眠つて居ると、二時頃自分の名を呼んで居るものがある、河合英雄少尉だ。自動車隊本夜こゝに泊るが、ねせてくれた。朋友と珍しい此の山村の会合、話してね<sup>(む脱)</sup>くなつた。狭い寢台で二人でねむる。目がさめて見ると、太陽が室にさし込んで居る。今日は天氣となつたか、十時河合君出發、晋州に向ふ。大沢軍曹以下十数名にて南方谷間の部落に牛を徴發にやり、六頭の牛を徴發して來た。久しぶりで牛肉、涼しいので味がよく、而し土民は「没法子」でかなしんで居る事だろ。午後工兵中隊長

の指揮する一ヶ小隊、本夜より宿営する事となる。星野隊の一部も一泊す。天候は又悪化、雨模様となった。

二十一日

九時までねこんだ。霧雨が降って深い霧がある。あまり天候が悪いので兵に腹痛患者続出す。仕方ない。此の山村では衛生設備もないのだ、お互気をつける事と注意を与ふ。

二十二日

天候も漸次回腹の模様である。陣地付近に出て散歩、懷慶平野をながめて気分をやはらぐ。丹河、泌河の水も減少した様だ。遠く地平線の彼方には、大黄河のみまんとたる水をたぐえて流れて居るのが、ぼんやりかすんで見える。

二十三日

昨夜は塩気の多い牛肉を食し、茶をのみす<sup>(ママ)</sup>ために一時頃になつて腹痛を覚ゆ。下痢を始めて心配す。夜明けとなつて腹痛益々烈しく、便所へは一時<sup>(間脱)</sup>すつ行くので体が疲労して仕方ない。午後になつても回報<sup>(快方)</sup>とならず、キリ／＼と腹が痛むと思ふと便所へ行きたくなる。夕方下<sup>(劑)</sup>済を飲んで寝たためか、夜は一時<sup>(如)</sup>開始に便所へ行き閉口す。

二十四日

昨日より何も食べないので、本朝はおも湯とカルピスを飲んで元気をつける。幾分良い様に感じるが、未だ時々腹が痛む。此の様なへんびな地に居って痛むと、つくづく淋しくなる。何する元気もない。夕方河合少尉の自動車隊晋州より帰還、同附の軍イに腹

の具合を診断してもらひ、薬をもらふ。本夕方は幾分良好の様だ。

二十五日

昨夜も便所へ一時間<sup>(毎)</sup>如に行くには閉口す。而し腹痛は昨日程でもないで、漸次回報に向ふと見て安心す。荷物監視のため残しし宮下親上ト兵は、清化鎮五中隊に荷物託し、渋谷を残し本日帰隊す。前田師団長、飯田支隊長、其他晋州攻略部隊漸次帰還す。自分達の処置不明なり。黒岩上ト兵を貯金のため、横尾を衛生材料受領のため、清化鎮に出張さす。入浴して腹をあた／＼めて見ると具合良く、やはり冷から来た下痢らしい。便所へはあまり行かぬもよくねむれなかつた。かやの中にさそりの入つて居るを発見、小林を起して大賑ぎだつた。

二十六日

昨夜は鞆木部隊と戸ノ池部隊が常平村に宿営、本朝清化鎮に向ひ出発す。今日は具合も良く、起きていろ／＼仕事といつても思ふがま／＼の事をして、気分の転換をなす。高橋上ト兵に清化鎮にいろ／＼買物に出張さす。黒岩、横尾帰還す。雨がふつて来たが大した事もなく曇り勝の天候だ。

二十七日

未明幾時頃から雨の音で目がさめた。最近雨がふると目がさめる。室内に雨がもつるため神経過敏となつて居るのだ。とう<sup>(脱)</sup>ぼちや／＼異様の音をたて／＼もつり始めた。午前雨上つてより徹底的に修理をなす。雑誌もなく他に慰安機関なく、ぼんやり生活で閉口す。雨はしと／＼ふつたりやんだり、いつになつたら空も心も

晴れる日が来るやら。

二十八日

雨のはれ間に午後省境の地形を偵察す。激戦の後を物語る敵の死体はいくとして居り、我軍又多数の戦友を失ったと<sup>(所)</sup>、思はず眼頭があつくなる。懷慶平野を足下に眺め得る景勝の地、連日の雨で生々とした名も知れぬ草花は、我世の春をと競つて居る。大隊より電報で、近日中に常平に歩兵二ヶ小隊、砲一ヶ小隊、野砲等を配属するとの電報あり。昨夜一泊せる自動車隊と共に鈴木上卜兵、八月一日より下土候補教育のため懷慶に向ふ。夕方より風邪の氣味が若干頭痛せり。

二十九日

夜は晴れて十一、二日頃の月が照して居ると思へば朝はしと雨ふりだ。いつになつたら上天氣となるのだ。熱をはかつて見ると二、三分ある。頭痛もなか／＼烈しいので閉口す。天候はどうやらよく漸次はれて来た。毛布、寢具を日光浴して衛生に注意する。物凄い湿気で皮具類は皆かびが発生した。十二、三日頃の月が東の空より出て来る。眺めて郷愁を味ふ事も出来ない頭痛だ。二十一時懷慶より電報で、八月一日先日の電報の兵力を増加するとの事だ。

三十日

頭痛も以然良くならない。ねて居るが肩や足が痛んで仕方ない。天候はいよ／＼回腹した様で漸次あつくなつて来る。部落北方に岩より出る飲水あるとの事で、兵は皆くんで来たがよい水だ。而

も相当広い水たまり 支那人の飲水 あり、皆そこで泳いで来た様だ。早く自分もそんな気分になつて見たいと思ふが、今の様では仕方がない。夕方となつて寒気がして熱 四十度近く 出て来た。マリリヤの気でもあるのか、一番<sup>(晩)</sup>中熱の爲うなされてねむれなかつた。兵が交代で寝ずに看病してくれたのには感謝した。下痢から風邪、マリリヤと続いては閉口した。午後老馬岑の警備隊長林中尉連絡に来る。

三十一日

一晩中よくねむれず、朝になつて幾分熱も下がり気分もよくなつた。而し頭痛、眼まひはする。若干の食事をとる。熱のため多く食べられないが、食ぬと元気がなくなるので無理して食ふ。阿部上卜兵を清化鎮へ連絡にやる。兵団よりと富津隊より糧秣来り、大沢軍曹を二大隊に連絡にやる。夕刻には幾分気分よくなる。懷慶より電報にて、明日連隊長大隊長と同行、常平村増強部隊と共に当警備隊に來光とあり、風邪もよくなつたので安心す。いよ／＼七月も又終りだ。昨年の今頃は待王鎮で独立警備だつた。思い出す。

八月一日

十三時三十分先ず協力野砲隊中隊長以下一ヶ小隊到着す。連隊長以下増強部隊は十八時着。少休の後省境陣地を偵察、いろ／＼と指示さる。二中隊より清水少尉の一ヶ小隊、十二中隊の臼井中尉以下の一ヶ小隊、第三砲吉岡見習士官の一ヶ小隊が自分の指揮下となり、混成一ヶ中隊とし、野砲と共に今後省境の警備にあたる

はず。十六夜かの月が東の空より上り、屋根上に出て、連隊長、大隊長と共に雑談、一時までしてしまった。涼しい風が吹いて驚いて居られた。一ヶ月ぶりで手紙も来た様だが、よんで居るひまなくねてしまった。

## 二日

八時三十分、分隊長以上に連隊長の訓示あり、陣地 南方 を偵察されて懷慶に向ひ出發さる。吉岡軍曹を給与の事で清化鎮へ出張さす。

## 三日

八時三十分各小隊下士官以上をして、省境陣地の地形及位置を偵察、臼井中尉のもとにて各小隊長と種々打合せをなす。吉岡軍曹清化鎮より帰隊す。晋州道附近の敵は積極的となりて行動開始、後方連絡線を遊撃すべく前進せりとの電報あり、砲兵中隊長の通報もありたり。天候はすっかり回復しいよゝ暑くなつて来た。而し平地より涼しいので凌ぎよい。本日より旅団無線も配属となる。

## 四日

七時三十分より各小隊より約二〇名を出し、苦力を五、六十名徴發、省境陣地の構築及敵死体のかたづけを行ふ。長臼井中尉、清水少尉。飯田支隊本部よりの敵情報によると、四十軍、八路軍に積極命令下り、先ず欄車鎮附近及其他の晋州道各警備隊を襲ひ、遊撃するとの情報あり。又小田部隊本部よりも同様の電報ありたり。三五〇作命中に、二〇〇は八月下旬まで晋州に位置し、附近

の討伐に任ずるはずと。尚天井関、欄車鎮には、見城部隊山口中佐の指揮する歩兵二個中隊前進、付近の警備に任ずるはず。

## 五日

塚田賢隆をつれて省境陣地構築を巡視す。本日にて大たい完成の予定。欄車鎮増強部隊常平村に一泊す。知らずゝの中に日はたつて八月五日だ、本年の夏は暑さ知らずで終るか。天候続きでも山頂のためかなかゝ涼しい。幾分夕立気味となつて来た。天井関附近で自動車地雷にかゝり、戦死九名を出したとの情報あり。臼井中尉、清水少尉と夕食を共にす。種々警備に就て打合せをなす。

## 六日

宮下政元上卜兵以下十名を、旧万善村警備隊後に鉄条網を取りに派す。北方へ宿舍をとりし臼井小隊、略小隊警戒上不利のため、清水小隊の南方へ移転を命ず。省境陣地完成のため本日より小哨を配置、先ず清水小隊より出さしむ。大口村に警備隊居るため、下士官を長にて十五名、略三名の警戒とす。附近は至極平穩なり。敵情も変化なし。

## 七日

一昨日清化鎮に出張せし高寺帰還。本日北沢上卜兵を物資購入のたし出張さす。午前清水小隊北方に陣地構築をなさしむ。大沢軍曹以下を省境分哨に出す。今までとゞこうつて居た一ヶ月ぶりの便り、本日入手す。皆大喜びだ。横尾衛生兵も帰還す。新町よりの新聞も多多で来り読むに大変だ。梅雨性の夕立時々来るも大した事もない。八月七日暦の上の土用も終りだ。責任の重大な警備

のためか、相当日長の今日の過ぎるのの早い事。九月か十月頃、我々の部隊も帰還との話もあるが、噂かどうかわからない。

八日

北沢帰還す。自分の冬服入れの私物持参、混つて居ると思つたがそれ程でもない。而し土用干しを行ふ。午前陣地を構築す。

九日

朝からしとくと又雨ふりだ。大ぶも<sup>(り脱)</sup>ないがどうもいやな天気だ。清化鎮に荷物監視に残した渋谷が、手紙其他大隊よりの連絡事項をもつて来た。何よりの慰め物、手紙で皆大喜びだ。敵も来ないし平穩で何よりだが、毎日同じ様な生活全くだといふかつまらない。木下軍曹より手紙が来て返事を書いて見た。先頃まで同じ苦勞して居た君達も、今は遠い内地より手紙をくれるのだ。何だかうその様だ。夕方清水少尉が遊びに來た。十時頃まで<sup>(り脱)</sup>いる話してしまつた。

十日

夜の中は星がふる様な天気と思ふと、未明より又雨ふり憂鬱となる。いつになつたらよい天気となるのだらう。支那もこんなに雨がふるかと思ふ。黄沙岑附近より三ヶ中隊にて敵の堅陣を突破、天井関の警備隊長田村少佐、清化への帰途立寄休んで行く。佐藤軍曹以下十五名の小哨を出す。夜になつても雨はふつたりやんだ。りだ。

十一日 曇時々雨

天候以然ぐつついた天候だ。丹河橋梁を昨日増水のため取はずし

たそふだが、朝自動<sup>(車脱)</sup>の通過するを見ると、架橋せるものと思ふ。本日も雨ふつたりやんだ。晋州に居る二〇Dの輜重の補充四、五〇名、向ふ途中常平村に一泊、給与を当隊にて行ふ。臼井中尉遊びに來る。大夕立一時間ばかり来り、後天候回復か靑空が見へる様となつた。

十二日

昨夕方の模様では好天に向くと思れたに、昨夜より又雨、而もなかの豪雨だ。氣になつて眠れない。宿舎はもうらないが、山の上の分哨はどうなつて居るか、丹河の橋梁は又流失等々、いろいろと考へる。雨はいやだ。家に居る時から嫌いだ、戦場に來ても雨ふれば心配と、人間はどこまでも心配があるものだ。夜が明けても止みそうもない。配属旅団無線帰還させよの命ありたるも、此の雨では仕方ない。昼頃で幸やんだ。懷慶平野の浸水は大変だ。廟後付近は水の中に浮いて居る。この地は水の中に宿舎が浸るといふ事はないが、連絡は当分つかないと覺悟した。食糧はまだあるからよいが、食延す様にしかと兵隊も心配していつて居る。夕方靑空が見える様になつたと思たが夜は又雨、どうにでもなれとすてばちになる。それに夕方より熱ぼくて頭痛がする。三十七度四分ある。夕食もそこへ早速寝る。天候はこつこつので仕方ない。病人も出る。

十三日

頭痛は幸良好となつた。午後は日光も見える様になつた。小隊全員の記念撮映を原田に依頼して撮す。故郷の御盆だ。出征以来陣

没せる小隊出身の十英霊に感謝の念がわいて来る。何も出来ない戦場、而もこの常平村では仕方ない。夜には又雨がばしゃ／＼やって来たが大事なさそうだ。午後百瀬班長以下の旅団無線、下山の自動車で帰還す。昨日あまり豪雨のため山の小哨は引揚げを命ず。大口村に警備隊の居る内は心配ないので、ぬれてあの山に居たら兵は皆病気となつてしまふ。本日工事やろと思つたが天候不順で中止せり。

十四日

天気は曲りなりにもよくなったと思ふので、清水少尉に長で省境の陣地補修を命ず。完全な雨のもうらないものにならないと、北方各けいび隊<sup>(揚脱)</sup>引後不安なり。夕方より頭痛がして熱あり、寒気がするので寝ると益々痛く、一昨日夕刻も同じ経過でマラリヤらしい。夜二十四時には三九度二分の高熱に悩さる。

十五日

夜明けと共に熱も下り、気分も良好となった。出征以来今日まで何もなく喜んでいたが、ついにマラリヤにやられた。なか／＼苦しく兵隊は変る／＼やっている。正午頃二大隊副官より電話にて、清水小隊引揚げ、爾後天井閣警備隊引揚げ後は、当警備隊も引揚げの予定なりとの通報に接す。まもなく小田部隊より電報にて、清水小隊引揚げの命令に接す。敵状は柏肖鎮方面に約一ヶ師の敵集結、我に攻勢の体勢に在り、小田警備隊は一部を以つて同警備隊を増援するとの事なり。

十六日

清水小隊は一部七名の荷物監視員を残置して、六時出発懷慶に向ふ。兵力の関係上、昨夜より省境の分哨を夜間のみ十五名とす。盆の十六日といふか、毎日／＼が早く暮れてあはただしく過ぎて行く。下界の事も何も知れない。雨で数日連絡なし。本日から自動車隊晋州に向ひ、丹河の橋梁は通過出来得ると。飯田支隊の配属とかれ、十一日正午より小田部隊の直轄となりたりの命令に接す。夕刻今日もマラリヤ熱出ると心配したが、幾分微熱ありたりと感じたのみで大事なし。「エンキ」を多く飲んだ関係と思ふが、胃の具合が幾分悪い。マラリヤの薬エンキは胃には非常に悪く閉口だ。

十七日

五時近くに銃声を聞き眼がさめた。老馬岑の方行だ。分哨の報告により、前和湾付近にて晋州に向ふ自動車隊地雷にて爆破され、同時に敵の猛射を受けたらしく、しばらく様子を見ると銃声益々烈しいので、急援として佐藤軍曹以下二五名を東方高地に、又一部を旧道掌考湾北方高地に出す。七時敵を北方に撃退、警備隊に異常なきも、自動車隊にて負傷四を出し自動車一台を失ふ。常平村へ来て約一ヶ月、今日始めて敵の後方より遊撃せり。今後油断ならず。いよ／＼明後日天井閣警備隊引揚げとなるにつき、常平警備隊の残置に付て塩原副官<sup>(と脱力)</sup>電話で話した結果、当地も引揚げの内命あり、準備をなさむ。

十八日

自動車隊は本日で引揚げ完了。R本部より電報にて命令あり、自動



車十二台を荷物運搬に請求、承知の電あり。更に夜に入つて二四時細部の電報命令あり、西向に行く事に決す。

十九日

昨夜は夜になつてより夕立あり、先日程の豪雨となりやしなやかと非常に心配し、よくも眠れなかつた。又丹河の橋梁でも流失したなら、自分達は荷物の為いつ引揚となるやも判明せず。幸一時の雨でやみ、朝は快晴となつたため安心す。十三時自動車九台にて清化より荷物取りの自動車来り、吉岡軍曹、高橋上卜兵、矢口を清化にやる。三五Dの山口中佐以下天井関警備隊一〇〇〇名近く、夕刻までに常平に引揚露宮す。敵も後をつけて来ず、平穩なりしと。思出多い常平村の警備もいよ／＼今夜かぎり。西向より電報あり、明日迎へに来てくれるらしい。

二十日

山口中佐の指示により、警備隊は先に帰還することとなり、野砲は山口部隊と共に清化へ帰る事となり、自分は白井小隊第三MGと共に旧道を万善に下山、思出多い万善村にて朝飯、家屋が雨のため<sup>(マ)</sup>のたこわれて居るには驚いた。八時五〇分臼井小隊と別れて西向<sup>(向)</sup>に迎ふ。西万庄には中隊より臼井見習士官の指揮する一ヶ小隊来てくれ安心。一天の雲なき快晴日だ。而し一同元氣、下界の暑さをこくふくし、十二時三十分中隊長以下の出迎へを得て懐しの中隊へ実に七ヶ月ぶりで腹帰す。西門付近に宿舎を定める。自分も暑さに平口した為か、西向に来て一寸貧血を起したが大事なく、中隊の入浴で汗を流す。昨日前田 二小隊 上卜兵西門に

て戦死、慰霊祭あり、参列す。宮坂中尉の許にて酒、夕飯を出してもらつた。幾ヶ月ぶりがで安心した、心配のない眠りがとれる晩だと思ひ、早くねるも下界は暑くてね苦しい。何度かねがへりをつていたが疲れていつしかねむつた。

二十一日

宿舎の準備をさせる。明日まで兵も勤務は別がない。先日の水で前の道路は河川となつて流れて居る。事務室にて種々話し、宮坂中尉の許にて入浴し帰る。柏肖鎮の情況はなか／＼急で、敵は加農砲二門にて射撃し来り、我に不利。大隊本部も今は柏肖鎮に進し居り、本部小隊よりは出ざるも中隊の懷慶連絡あり、吉岡軍曹帰還す。

二十二日

朝より雷なり。七時頃より豪雨となり見る／＼中に増水、二時間位でやんだが増水烈しく、宿舎中へ五寸位の浸水となり、昼飯は中隊にて煮てもらひ、皆裸にて取りに行く。午後猿又一つにて各分隊長と西門西北、北門の地形、陣地を廻り見て、中隊事務室前にて又雨となるもまもなくやんだ。水も漸次減少せり。長い雨のため、一寸降つても地下に浸みるのがないので閉口だ。

二十三日

雨は幸やんだがはし／＼しない天氣、時々小雨さへやつて来、雷が鳴るむし暑い日だ。昼頃より天候回復晴となつた。今朝まで中隊にて食のたき出しをやつてもらひ、井戸は不潔となつたため、かへ出して使用す。十三時二小隊にて入浴す。中隊長と共に西南

門附近の地形偵察す。今朝六時東南方面より若干の敵襲ありしも、大した事なし。

二十四日

小隊受持区域の西、南門の陣地構築を、警察隊、土民を使用して実施す。天候も漸次回腹の様子だ。水も減少して来た。本日の情報によると、敵も西向四方に盛んに出沒、午後東北一軒、コウ山廟附近に便衣隊あるを知り、臼井軍曹以下十五名出撃、二名を射殺の討果を揚げたり。主なる附近の敵情は邗台、校尉営に二連、虎子村に一連、其他附近に便衣隊出沒せり。十一時西方義庄附近より迫撃二丁三門の射撃を受くるも、我砲兵の射撃により被害なし。

二五日

五時又迫撃の射撃を受くるもまもなくやんだ。電話線切断され、宮坂中尉の指揮する一小隊にて補修に向ふ。敵は雨の後糧秣なく徵発中らしい。懷慶の連絡は今後相当の警戒を要する。午後宮坂中尉の許にて入浴す。夕刻 十七時頃 より、西方義庄及南方より迫撃の射撃をうける。重迫、軽迫らしく、話に聞くと今まで昼間砲撃せる事ないとの事だ。相当長時間に渡り時々射撃せるも、我砲撃により沈黙す。本夜は敵襲あるものと予想せるも、夜に入つて相当な雨となつたので平穩なり。よくふる雨だ。先日の雨で豪雨が来ると又浸水かと心配で、夜もよく眠れない。

二六日

払曉便所へ起きた頃は快晴で、好天気かと思れたが起きて見ると

又雨だ。ぐずついた曇天、時々雨がやって来る。こう悪天続きでは氣もくさる。午後一小隊にて入浴す。渠軍曹と将棋、囲棋などやって退屈凌ぎ。更に根津少尉 MG の許にて話し、夕刻帰る。

二七日

五時三十分敵迫撃砲彈落下と共に、<sup>(ママ)</sup>チコ小銃の射撃を受くるもまもなくやんだ。敵砲は八時頃まで続いたが後平穩なり。電線切断されたため、臼井見習士官以下一ヶ小隊を補線掩護に出ず。十時出発。西義合附近に若干の敵ありたるも我に損害なく、敵を北方に撃退せりと。夕刻雷鳴あり。西向配属野戦隊交代となり、穂高少尉の送別会を中隊にて行ひ十一時帰る。邗台、校尉営附近の敵山中に移動せりとの情報ありたるも真偽不明なり。

二八日

五時頃より又敵の迫撃砲が始まった。なか／＼猛烈となり、約一時間の集中射撃の後、やむと同時に西北門より一整の小銃、チッコの一整射撃となり、全員武装、敵は相当接近し居るらしく各分哨に増員をなす。夜明けと共に敵は退却するけはいなく、分哨二／＼三百米の高梁畑に陣地構築を発見、猛射を浴すと敵も射つ。払曉の敵砲彈で河西軍曹重傷、西北門で自分と並んで居た宮下競上ト兵右手に軽傷せり。敵は退却の様様以然なく、西北方三百米の廟に敵居るらしく、砲撃の後臼井見習士官以下の三十名出撃、撃退。安藤伍長以下十一名これに付随して出撃、廟占領後西方にてlg射撃中の下向上ト兵頭部貫通、かけよつた風間一ト兵同じく頭部貫通、戦死せり。残念此の上なし。下向上ト兵、出征以来真面

目な而も実行力の旺盛な立派な兵なりしもついに戦死。又初年兵の風間一ト兵、前途有望の士を二名も失ひ断腸の思いだ。敵に対し忿怒の情やりがたし。河西軍曹もついに午後息を引きとった。かつて我部下として一年中やってくれた君もついになし。昨夜の宴会も元気で姿見せていたに、思へば永遠の別れの宴会だったか。十四時中隊にて簡単な慰霊祭の後火葬にす。敵砲弾、小銃弾は落下する。敵は東南五百米の東向村附近にも出沒、陣地構築中なり。夕刻林中尉の指揮する歩兵一ヶ小隊、MG一小、RIA一小隊増強になり、一同の元氣益々旺盛なり。

夜になった。十四夜位の月が東方より昇り日中の様だ。一天雲なき晴れ、西門分哨の巡察をして此月を見、二年前の大冊河、西保障の戦、こんな月の夜だった。夜となって西北門方面は静かとなりて、東方よりの敵の攻撃益々猛烈、やけに射ち込んで来るチッコの音、僕等の頭上を盛んに弾が通って行く。二十一時喇叭と同時に敵の東門附近に突撃し来りしも、我野砲の〇距離射撃に挫折退き、又遠距離にて猛烈な射撃するも我沈黙を守り居り、敵も逐次後退か、銃声も時々するのみで静かとなり、月のみこくと輝いて風一つない大陸を照らして居るのみ。

二十九日

二時頃となつて疲れて眠った。各分哨も交代で仮眠を命ず。朝となつて相当敵も遠くへ引いたらしいが、時々射撃してくる。昨日行ふ予定の東沁陽に集積の弾薬、糧秣、本日大隊にて西向に輸送する。その掩護として歩兵一小隊、MG一分隊、RIA一分隊を指揮し、

東南四軒魏村に向ひ十一時出發。途中にて東北より二、三発の射撃を受けるも大した事なく、魏村に入る二三百の地点で懷慶よりの糧秣輸送隊と会ひ、部隊混雜した時、南方五百米の竜泉よりチッコ小銃の猛射を受けたるにより、強行通過して魏村南方を占領、竜泉の敵を射撃、輸送隊の掩護をせり。竜泉北側は湿地帯にして前進不可をよい事として、敵は掩蓋陣地を構築、以然頑張つて帰還の我隊を待ち居り、四時部隊帰り来りし時、RIAにて敵チッコ陣地に射撃せしため、二、三発の小銃射撃をせるのみにて、負傷なく無事通過を見て、我々帰還にあたり高橋中尉のMGの掩護射撃に危険地帯を通過、六時全員無事帰還す。二中隊の二ヶ分隊本夜当小隊に宿泊、伊芸少尉のRIAは西隣に宿舍をとる。四時頃柏肖鎮のSAは、沁河南岸より西向西方村落を射撃せり。本日の連絡で手紙、小包到着、稲里軍友会より小包一個入手せり。便りも父や妹、近所より多数到着した。昨日来の戦闘の疲れも、此の内地の便りで慰められる。二年前の今日、懐しの兵営に別れを告げて勇躍營門出發、征途についた日だ。當時を思い感無量なり。

三十日

午前林中尉、伊芸少尉遊びに来りいろくと雑談せり。師団の帰還も実現の話専らあり。附近敵状は平穩となりたるも、義庄附近より北方にかけて残敵居るらしく、時々分哨に向つて射撃し来る。

三十一日

RIAは小隊宿舍隣へ移転、陣地を西北門分哨に砲列をひく。林中尉、伊芸少尉又来り、二中隊は明日歸るらしい。明日連隊の兵器検査

ある予定なり。午後電話線切断され、二中隊、十二中隊より補線の掩護に出る。午後日直将校に服務、宮坂中尉の許にて入浴、根津少尉、野砲の細川少尉と麻雀で費した。八月も終りだ。非常に涼しくなった様に感じられる。朝なぞ毛布を着てねて丁度だ。

九月一日

二百十日、内地は颱風の烈しい時だ。そんな事も忘れていたが、何かの時ふと思出した。最近敵情も大なる変化なし。本日連隊の兵器検査、懷慶より兵器係の笠原少尉、大隊より塩原少尉外検査員来向、十二時半より開始す。二時半より故河西曹長、下向、風間三英靈の慰霊祭を実施、連絡部隊と指揮班の井口、三小隊の島田兩名にて懷慶へ送る。

二日

別に変った事もない。時々西方義庄方向より敵が発砲して来る。根津少尉の許にて入浴し遊んで夕刻帰る。

三日

中隊長警備隊長会議出席のため、根津少尉以下五〇名掩護のため出発。協力野砲中隊長吉野大尉来り、警備隊長の代理をつとめ、十一時無事来向す。十五時より吉野大尉と各小隊長陣地を偵察、警備に万異感なきを期す。夕刻より事務室にて宴会、遅くなりしたため一小隊の県軍曹宿舍にて一泊す。

四日

昨夜は平穩なりしも電話線切断されたため、臼井軍曹以下三〇名補修掩護として八時出発す。十四時一同無事帰還、途中東向にて

若干射撃さるも異状なし。どんより曇った雨模様の憂鬱な天気だ。午後日直将校を服務す。今月下旬には西向も交代する様な話もあり、逐次そんな準備にとりかゝる。懷慶へ行つて気分転換でもした<sup>(い脱)</sup>気持で仕方ない。而し今の情況では思ふにまかせずか。

五日

事務室よりレコードを持って来り、歌でも聞いて慰安となす。吉野大尉道路にて魚つけ、早速てんぶら、煮魚をやつて柳の下で酒もり、酒好きな同大尉はなか／＼愉快だ。一方で兵が魚つけ、その側での酒の味も又格別だ。時々分哨を狙撃してくるか、流弾が頭上をかすめて行く。どんより曇った雨模様の憂鬱な天候だ。夕刻となつて欧州問題のニュースが入つて来た。即ち日本時間にして三日午後二時二四分、英国独に対し宣戦を布告との事、仏続いて独に宣戦との事を聞き驚いた。真偽不明なるも最近の欧州情勢を推察すれば、来るべき時が来たと考へられる。吉岡其他の下士官達といろ／＼と談じて十二時寝に就く。而し欧の大都市が今は各空軍のために大混乱を来して居る事を思ふと、いろ／＼な現在の支那問題と関連して頭をかすめてなか／＼眠れない。新東亜の建設も案外早く成功するのではないかと考へられる。

六日

朝からしと／＼憂鬱な雨ふりとなつた。水害が心配となるも仕方ない。何もする事ない。欧州大戦の事、いろ／＼な世界情勢を頭<sup>(指力)</sup>に図書いて平凡な一日を過ごした。

七日

本日糧秣輸送の予定なるも、雨のため道路悪く明日に延期となる。逐次天気回復となりたり。其後欧州の情況も知れない。一日も早く又毎日でも聞きたい。今でも此の田舎では何とも仕方なし。

八日

糧秣掩護として歩兵一小隊、MG一分隊を指揮し十三時出發、苦人一〇〇人を使用して道路を修理し乍ら、魏村まで前進す。敵なく平穩なり。十六時半廟後出發予定の自動車待てど来らず。五時半県軍曹以下十五名を東沁陽まで偵察に向しむ。其の報告も、自動車見へず十九時三十分引揚す。西向に歸りて副官内山中尉と電話で話し中、二十時半自動車来り、廟後西方にて自動車故障のため遅れたり。入営の宮下競上卜兵、入院の藤極<sup>(カ)</sup>歸隊せり。僕等の内地歸還の話も欧州情勢により変更らしく、部隊の行動も間近となり、切迫して居る情況だ。北滿方面へでも移動のうわさが有力なり。

九日

將校現地教育のため開封へ出張中の中隊長、情況のため中止となり、昨日歸還の白井見習士官以下六十名出迎へのため懷慶に向ひ、十七時歸還す。欧州の大戦により、師団の内地歸還は変更となつた様子で、滿州へ行くらしい。部隊の交代は峯村<sup>(マ)</sup>部隊。西向は幸交代あるも、崇義鎮、柏肖鎮、溫県は皆放棄するらしく、一年近くに渡つて警備をし、部隊の宣撫も無になる事と思へば残念だ。而し大局の作戦のためには仕方ない。夕方交代部隊の中隊長以下十六名設営に向す。

十日

遺骨護送のための鈴木上卜兵 二小隊 を送るべく、宮坂中尉以下五〇名懷慶に向ふ。下士候補は本日歸隊せり。十九時中隊長の許に各小隊長參集、移動に就ての種々打合せあり。滿州へ行く事確實らしい。あきた<sup>(麻)</sup>西向をすて、北滿への移動も望むところ。

十一日

私物の梱包を行ふ。九時より赤羽衛生兵によりコレラの予防接種あり。根津少尉遊びに来る。十七時三十分頃西門立哨の沢柳恭逸腕に敵の狙撃に合ひ輕傷す。大事なし。先日來の敵は義庄をどうしても去らず、時々狙撃して來り油断ならない。敵の企圖不明なるも、我交代を察知し居る様でもある。明日交代部隊來向の予定なり。

十二日

大沢軍曹以下四〇名は、糧秣、彈藥運搬のため掩護に一部を魏村に、他は自動車便乗とす。吉岡軍曹以下七名設営、私物整理のため廟後に先行さす。午後になつて、峯村部隊の交代部隊交代せざる事となり、中隊長以下各隊長參集、種々引揚について協議す。敵は我撤退を察知してか、夕刻より義庄方向より攻撃し來り、迫撃砲の射撃もありたり。而し陣地前三、四百米の地点で射撃せるのみなるも、油断ならずなか／＼眠れない。

十三日

夜明まで迫撃砲は時々時間をおいて落下、又チツコの射撃ありたり。而も迫撃は我宿舍附近に最も落下したるも、幸被害なし。八

時頃までに敵は後退、以後平穩なり。午後小隊長以上集合、引揚に際し種々協議す。明日日没を期して引揚と決す。

十四日

昨朝より誠に平穩にして、本朝二・三発の銃声せるのみ。午後小隊長参集、本夜九時を期して引揚と決し、それまでつとめて行動を秘す。夕方より小雨ふりとなり、九時引揚頃は一寸先は見えない暗、雨は天佑と思れた。小隊は最後尾として幸魏村まで一発の銃声もせず、大成功なり。

十五日

魏村を出る時、二・三発南向村より射撃をうくるも大した事なく、たゞ道の悪いのには閉口してしまった。皆どろだらけ、今までこんなくらひ悪い道を歩いた事ない。三時無事廟後着。吉岡軍曹達のかさへてくれた宿舎に入り、身をあたゝめて一眠りす。七時大隊副官内山中尉来り、昨夕一中隊の連絡者二四名全滅を聞き驚いた。十五時清化鎮出發の連隊長を送り、城内に遊びに行き、小隊下士官と小田部隊酒保にて宴会、長い警備の慰勞とす。大隊本部にもよる。いよゝ長い間の懷慶と別れだ。第二の故郷の感がある。

十六日

十時中隊は先兵となり、廟後出發清化鎮に向ふ。途中異状なし。十四時清化鎮西門外の宿舎に着、数日宿営と決した。風邪の気味で早くねむる事とす。二・三日前の事を思ふと何と安心した事が、遠くで聞く他部隊の戦鬭、銃砲声を聞いて感無量なり。

十七日

九時より県公署に於て、連隊、二〇A野砲と合同の慰靈祭を施行す。十四日全滅の一中隊の兵と野砲の兵のみの慰靈祭にして、吉岡中尉も大ぶ元気がない。責任を感じてか、而し仕方ない事、元氣をつけてやる。風もなかゝはしゝしない。鼻水が出て仕方ない。夕方飯をすまして吉岡中尉の許に遊んで帰る。

十八日

九時より中隊長の兵に対して学科あり。師団長訓示、其他注意。師団の満州行も、外交折しよつゝの結果ソ満国境の問題解決、中止となりたる様だ。兵は皆冬服に着替へたのに、又変更で何が何だか判明しない。十四時より下士官以上の対機甲部隊の戦鬭法の訓練、西門外にて行ひ、山崎大尉教官、四時終る。

十九日

九時大隊下士官以上、内藤少尉の瓦斯に対する教育あり。

二十日

本日正午より小田部隊は三五Dの指揮下をはなる。

二十一日

午後運動のため中隊全員の体操及各個教練を実施す。いよゝ部隊は開封へ行く命あり。正午設営出發す。河合少尉の許にて昼飯を世話になり、西沢中尉の許により、更農同窓会の件中止となす。二十一時大隊本部に隊長会議あり、中隊長マリアヤのため代りに出席。要件は又三五Dの指揮下となり、敵の九月攻勢の討伐参加との事だ。皆あきれてしまった。

二十二日

九時頃までねむってしまった。何だかおもしろくない。三五Dは我部隊が居らなくては討伐出来ないのか。満州へ行くべくこゝへ集結して冬服までかへた我部隊を、又討伐に使用するとはいくじがなさすぎる。而し命なり、仕方ない。宮坂中尉の許にて入浴し、午後は夕方まで眠ってしまった。吉岡中尉遊びに来る。

二十三日

午後小隊全員で小さな池をかへ、魚捕へをやるので行つて見た。なか／＼の大きいようであつた。昨年の今頃も苗店で魚とりをやつた事を思い出した。行動開始はいつなるか不明なり。夜大隊本部にて遊び一時帰る。

二十四日

今回の討伐は連隊長の意見ぐしんで、一大隊懷慶の警備、二大隊清化鎮の警備、三大隊のみ行動との事、大隊は明日出発の予定なり。

二十五日

八時三十分西門外出発。二中隊他一部は右側衛となり懷慶に向ふ。十一時三十分丹河橋梁を野砲隊通過せんとするや、西方王庄附近より敵迫撃砲落下、十発位も受けたるも我に被害なし。大隊は廟後に集結、輕装にて北十字王庄附近の敵を攻撃、葉屯を占領し、王庄の敵を攻撃せんと、一中隊一線にて前進すると、堤防線に陣地を張つて居りし敵の一撃射撃を受く。吉岡中尉負傷との報あり、心配し乍らも弾の中行く事不可、自分は左方部落を攻撃、占領し、

敵と対す。なか／＼敵も抵抗し、退却の様子なし。夕刻となつて

根津少尉の戦死を聞き、がっかりした。大隊の任務は懷慶警備交代なのであまり深入せず、八時四十五分をきして大隊は一整に引揚十二時二度と見まい、ふまなひと思つた懷慶城内に又入つてしまつた。西北角附近に宿舎。武装をといて与期<sup>(予)</sup>していなかった今日の戦闘を思ふ時、战友你津少尉<sup>(ママ)</sup>の戦死は残念で仕方ない。あのまゝ満州なり、開封へ行つて居つたら、こんな事もなかつたにも愚<sup>(病)</sup>智も出る。吉岡の傷は生命に別状なしと中山軍イより聞いて安心す。

二十六日

西義合村の警備交代の二中隊と共に大隊長行く予定なので、掩護として一ヶ小隊を指揮し、九時北門外整列。昨夜泌河橋梁いたみ修理に二、三時間を要するので大隊長行は中止となるも、大行李掩護として二時出発す。九時頃よりふり出した雨は、乾ききつた道をでいねいとしてしまひ、しと／＼ふつていやな日だ。西向引揚の日を思出す。西義合に着いた頃は幸雨もやんだ。途中無事、十八時三十分帰還す。

二十七日

城内東門、北門を中隊にてもつ事となり、中央付近に宿舎を見つけるもないので、現在の位置とす。白井見習士官は半小隊をもつて東武庄に、宮坂中尉三分隊をもつて東王庄に出で、中隊は一ヶ小隊半城内なり。吉岡中尉を見舞ふ。午後部隊日直将校を複務す。

二十八日

昨夜は相当冷へて寒く明けがた早く眼がさめた。清化鎮以来入浴せず、気持ちが悪いので入浴に行く。峯村部隊の主力本日集結終つたらしい。一久君より内地のいろ／＼な珍しいニユスの便りを入手せり。変わった事もなか／＼ある。

二十九日

峯村部隊本日行動開始。北方で払暁より盛んな砲声で眼ざめて、城壁の上に上つて見たが別に得るところなしだ。幾分腹の調子が変わり冷へらしい。その為か兵にも病人がなか／＼多い。当番小林も珍しく腹の調子悪く休んでいる。吉岡の父上に便りを書いて出す。家の父に、一久君にと三通書いた。別に他に仕事とてないから。天候は秋晴れの快晴、而し涼しく室内に居ると寒く感ずる。北方の討伐隊も敵を駆逐したが、午後は砲声がやんだ様だ。

三十日

大隊長西義合警備隊巡視のため 一中隊半小隊、mg一分隊、小隊半小隊を指揮 九時北門出発、途中無事義合到着。十二時半帰還の途に就き、更に二中隊清水小隊北十字村に新に配備され指道、<sup>(マ)</sup>四時懷慶へ無事帰還す。西北方討伐隊は本日西向占領と。十日前までは警備し居りし事を思ふと、占領しなれらなれないとは兵力の減少やむを得ないとはいへ残念だ。酒支給され、久しぶりで吉岡軍曹達と宴会をなす。兵の中にマラリヤ其他病人続出、毎日の掩護に又勤務に寧日なきための過労から来るものと思ふ。本日で九月も終りだ。すっかり秋らしくなり、木の葉も黄色を呈して来た。二十一時自動車隊の金井少尉に会って、討伐隊も相当苦戦の

話を聞いた。

十月一日

九時入浴す。宿舎より距離相当あるため、思ふ様に入浴も出来ない。三日ぶりだ。午後部隊日直を複務。大隊長中隊へ来られ雑談をなす。続いて病院に吉岡中尉を見舞、痛みがあつて苦しくて仕方ないとこぼしていた。昨日三大隊の犠牲甚大らしく、死傷五〇余とか。而もMGキガサワ中尉戦死、同じく吉岡見習戦死。下士官兵も相当あるらしく、白井中尉、保坂少尉重傷と聞く。吉岡見習士官の戦死は、常平村で同じく警備した元気な君だったに残念だ。白井中尉も常平での警備の君だに心配でならない。詳細は直不明だ。

十月二日

昨夜西北方の討伐隊引揚をなす。入院の吉岡中尉、本日急に後送されると一中隊兵の通知あり、面会に行く。本日は痛みもあまりなく心地よいに、自動車にゆられて又痛む事を心配していた。午後になつたので十字路酒保まで来ると篠原中尉に会ひ、二人にて又吉岡の許を見舞ふ。三時後送された。何だか物淋しい気持ちでいっぱいだ。篠原中尉はこの頃の討伐は病気で清化鎮に残ため元氣だ。

三日

午後西沢中尉の許で遊び、木内中尉の許に寄つて夕刻帰る。夜大隊本部にて遊ぶ。

四日



河合少尉と会ひ、帰り昼飯を共にし帰つて見ると、篠原中尉が遊びに来て居た。こんなところへ遊びに来るんでないが、手紙を書くに何もないので仕方ない来たと、もう手紙を書いて居た。夕飯を食つて帰つた。二十一時大隊副官のまねきで何事かと行つて見ると、又酒だ。中山軍イと二人で盛んにやっていた。仲間になつて冷酒をやつたがよいが、すっかり酔つてしまひ、胸が苦しく内山中イの室で寝てしまつた。嘔吐をしたり、實際苦しくて、酒はもういやだとつくづく感ずる。

五日

四時大隊副官の室で目がさめ、一人でねているので酔もさめたので降りねる。朝になつても頭がぐら／＼して心持が悪い。ねていると大隊長四中隊へ行つた帰り立より、三十分ばかり話して歸られた。

六日

本朝〇時より自分はいつにても出発出来得る如くの命あり。一中隊より一小隊、四中より二分隊、三中隊より二分隊、それを素原中尉が指揮となり、飯田支隊の予備なり。本朝峯村部隊の二ヶ大隊及小田部隊の友枝隊行動開始、柏肖鎮、崇義鎮に出発す。十一時一ヶ小隊を指揮、略一分、RIA一分と共に、連隊長掩護として清化鎮に向ふ。十六時帰還す。部隊日直を服務す。

七日

討伐隊は附近に敵なく、昨夜三日の予定を変更し全部帰還す。昼食に小隊下士官と会食をなす。R本部本夕清化鎮へ引揚をなす。

八日

三時三大隊清化鎮へ引揚出発、大隊は明朝の予定なり。自分は不意に林中尉、宮坂中尉と共に、連隊長の命により十時の自動車にて清化へ来いとの事で出発す。今日一日懷慶と別れる事と思つて居たが、不意で何するまもなくもう永久に此の地には来ないだらう。三尾中尉以下十二名補充隊付を命ぜられ、本夜R長の招宴なり。兵站食堂にて八時より。兼て予定して居た事で驚きもしない。

九日

大隊主力を七時起床して迎ひ、大隊長に帰還の挨拶をなす。十一時よりR長、副官、各大隊長に挨拶をし、打合せをなす。午後八時より県公署にて将校団の送別会あり。

十日

出発準備で歩き、昼食に小隊の兵と別れの会食、胸が一っぱいで泣けて仕方なかった。十四時より中隊の兵と別れの挨拶をなし、二十時より兵站食堂にて大隊將校の送別会をなす。十一時降りねる。

十一日

各中隊長其他に帰還の挨拶なぞで半日終つた。河合少尉の許にて別れて、篠原中尉の許に遊び、午後四時より中隊長以下中隊下士官達の送別会に出席、第二次会に移り心ゆくまで戦場最後の酒宴をなし、清化鎮旅館にて寝に就く。

十二日

西沢中尉大隊本部に挨拶をなし、十一時頃良郎、保治、原田君達

と記念の写真を撮り、中隊長と最後の昼飯、河合少尉の出してくれた自動車にて駅に向ふ。午後四時連隊長を始め各各校の見送りをうけて、列車は思出の地清化を後に一路新郷に向ふ。午後八時新郷着。荷物は塩瀬にあずけて玉屋旅館に一泊す。

十三日

八時三十分新郷出発、新開線の新しい鉄道をゆるひ列車は進む。各駅は三五〇の警備隊居り、永久のトチ力をそなへてなか／＼大したもの。昨年<sup>(徐)</sup>除州会戦当時は麦又麦の地も、今は広々とした大平野だ。三十里たらずの里程を午後三時漸く開封着、列車の中で地方人のレコードを聞き乍ら退屈をしのんで来たので、いやにならなかつた。

旧黄河の鉄橋も工兵隊の活躍でなか／＼すっかりしている。昨年のあの水はどこへ行つたか。開封駅より旅団より迎へに来てくれた自動車で旅団司令部に向ひ、閣下及加嶋副官其他幹部に挨拶後、雑談一時間にして閣下及副官と記念の写真を撮り、宿舍河南ホテルに向ふ。宮坂中尉とすぐ飛び歩いて長靴を買ひ、二十三円だ。

夜閣下の招宴旅館にあり、出席後加嶋副官と夜の開封を散歩、十二時帰宿す。

十四日

十時師団司令部にて師団長、副官に挨拶し、午後加嶋副官と旅団の自動車にて林、宮坂中伊と四名にて、思出の攻撃せる西北角ラマ塔及城外のラマ塔なぞ見物、写真をつんと取って、更に七時より我々三名副官殿の招待をうけ、十一時頃自動車にて副官と

街を散歩す。むし暑い日だった。

十五日

七時四十分副官殿の見送りをうけていよ／＼開封にさらば。午後三時新郷着、将校行李の入れかへをなして旅装を整ひ、陸軍病院に吉岡中尉を見舞、夜の新郷を宮坂、林と散歩、早く帰ってねる。

十六日

九時四〇分新郷発、一等車におさまり、彰徳、磁県の古戦場を眺めて、石家荘に八時三十分着、もう暗くなった。それより寝台車にて夜が明けたら長辛店だ。二年前行動開始の地点、感無量なり。

十七日

八時半北京着、駅前にてかるひ朝飯、遊覧バスにて宿舍三笠館に軍装をとり、万寿山の見物をなす。天壇の見物、紫禁城、北海公園と見て、西太后のごうしやの又清朝のおごつた様がしのばれる。珍しく雨ふりとなり、何だか風気味<sup>(ママ)</sup>なので早く寝に就く。マラリヤの気でもあり、エンキをのんで。今日は俺の誕生日だ。此の日北京の見物も意義ある。

十八日

幾分熱ばくあるも大した事ないので、十時頃より林君の親類の人の案内で街を見物、北京料理で飲食をすまし、皮類の支那人の店をひやかしてカバン一個を購入、充分北京の空気にひたる。森の都北京は実に感じがよい。

十九日

九時四〇分北京発、天津に近く<sup>(に脱)</sup>したがって水害の様が見られて来

た。午後一時半天津着、租界の封さを見て、大通り白河<sup>(マカ)</sup>旅館に宿営す。腹の具合が悪く、階行社で買物後早くねる。

二十日

昨夜は腹痛及一時間おきの下痢で閉口す。それでも見物しないと折角の期待した天津を話にならないと、宮坂中尉と租界及其他を見物なす。午後は益々腹痛あり、仕方なく休む。宮坂、林、塩入と小生以外の諸氏は、本朝太沽に向ふ。夜は以然腹痛、下痢になやむ。

二十一日

九時三十分の列車で奉天に向ふ。北支の風景と何ら変らない。列車中でも下痢あり。山海関へ午後三時着。僕達の税関検査はかんだん。いよゝ満州国へ入る。錦県へ夜つき、奉天へ十一時着。旅館なく、漸くせまひ二人用の室不二丸旅かんにあり、そこへ四人にて宿営。腹は以然同じ。

二十二日

腹は益々いけない。地方医の診察をつけるも思しくなく残念だ。宮坂君達は見物に歩いている。

二十三日

一日寝ている。便所へ三、四〇回も行く様な猛烈さだ。今晚十一時で出発するのだが、夜になつても駄目なので、八時三十分奉天の陸軍病院に入院す。

二十四日

終日猛烈な腹痛、下痢だ。三、四〇回も便所へ行くので、室に便

器をもつて来てもらひそこでやる。体はすいじやくするのみ。

二十五日

川島軍医の診断、院長も来診す。

二十六日

二十七日

二十八日

共に同じく腹痛、下痢だ。而し本今朝より幾分具合よいので、先ず家へ葉書を出すべく始めたが、元氣なくいやになつてやめた。

二十九日

幾分よい。

三十日

本日は非常によく、腹痛はあまりなく便所へ十回位だ。うれしい。家へ心配している事と思つて葉書を出す。

三十一日

益々経過よく食欲が出て来て、おも湯だけではあきたらぬ。而し今が大事な時とがまんしている。夜は冷へるためか腹の具合幾分悪い様だ。本を借りてよんだり、新聞を見るが、つかれて駄目だ。ぶらゝしている。健康時の戦場の事がなつかしい。

十一月一日

もう十一月だ。毎日大陸晴の好天気。昨年今の頃、馬坡の生活が思出されて懐しい。あの頃が一番楽しい時代だ。これといふ仕事もなく、暖い黄河北岸の冬。今一人病の床で考る時たまらない。懐かしい泌河河畔よ。具合益々良好なり。午前病室を移転す。川

田部隊長に便り出す。家へもくはしく手紙を出す。本昼飯より幾分かゆが支給された。午後幾分腹が痛む様だが、大した事もない。夜はいろ／＼と考えるためか眠れない。

## 二日

腹がへって朝飯が待遠しい。ねているといろ／＼と食物の事のみ考へて、腹がグウ／＼鳴るし、食いたい／＼で時間がながいので閉口だ。食意地がきたなくなつたものだ。自分乍あきれる。益々良好、お粥を食ふためか元氣が出て来た。散歩は未だふら／＼して駄目だ。午後暖いので外に出て見たが疲れた。風があるも暖い日だ。

## 三日

十二時頃よりよくねむれたが、朝寒くなりて目ざめた。明治節だ。病で床にあるがかなしい。又昨年の事が頭に浮ぶ。懷慶城内へ部下をつれて大隊の拝賀式に参烈した事が。もう一度行つて見たい様だ。病院も祭日のため一そうひっそりして静かだ。伝染病なる故慰問団もこない。お粥をすすつて明治節とは。本をよんでもいいになる。たゞぼんやりしているのみ。

## 四日

昨夜もよく眠れなかった。運動不足のためか。午前院長殿の巡視あり。本昼飯より普通の粥となつた。やっと生きた心地だ。便は未だ幾分膿が混つて出ると軍イの言だ。甘いもの食ひたいので、酒保より看護婦にビスコを買つて来てもらひ、そのつまひ事。而し腹も大切と少々でやめた。散歩もつとめてやり、運動し乍ら眠

らない事にして居る。午後幾分腹痛を感じたので、床に入つて眠つてしまった。診断あり、結果は後半月位かゝるとの事でがつかりしてしまった。夕刻家より航空便来た。大変心配して、松本まで宮坂中尉の許を尋ねて聞いて帰つたそうだ。入院しての始めての便りで幾度も読み直した。

## 五日

夜は益々眠れなくて、小便が近くて三時間に一回位行くので閉口だ。日曜日のためか病院は全く静か。家と宮坂中尉に手紙を書いて見、午後散歩もして見た。なまぬるひ風が吹いて思つたより暖かだ。他の外科患者なら、日曜、祭日には各種の慰問団体が来るが、伝染病では駄目だ。面会人として一人もないのだ。國務院総務長官の見舞品としてなま菓子をもらつた。以然ねたり起きり。早く日の暮れると全快の早い事のみ。

## 六日

昼飯後若干腹痛を覚ゆので休む。便所へ行つて見ると固い便に膿がある。それがための腹痛と思ふ。大阪朝日新聞を見せてもらひ、角から／＼まで読んで見た。よく読むのはこんな時だけ。甘いもの終つたのでビスコ拾個購入す。病院だあつて、<sup>(け脱)</sup>滋養のある子供の菓子だがうまひ。夜がやつて来ると眠れないのでつく／＼いやとなる。

## 七日

起床して見るとなか／＼暖い。どんよりした日と思たらまもなく小雨ふりとなり、薄暗くて床に居ても憂鬱だ。庶務主任軍イ少佐

の診断あり、小便の近い事とねむれない事を話すと、あまり心配するからだ、眠れないから便所へ行くのだからとの事で、眠がけに飲んで見ると薬をくれた。小雨は以然ふって居り、しとくと淋しい音を立てゝ居る。

八日

昨夜の薬がきいたのか、久しぶりでよく眠る事が出来た。便所へ一回立ったのみ。夜明頃になって大変寒いと思つて起きて見ると一面銀世界だ。多く積つたといふ程でもないが、なか／＼寒く感じる。大便も漸く普通便となつたらしい。今が大切の時と一増自重、一日床に就いている。頭の毛がのびて不快なので、看護婦さんにかつてもらふ。(駒ヶ根市)信州赤穂の出身とかで、同県人となればなつかしい。中隊長や小隊の吉岡軍曹に手紙を書いて出す。

九日

昨夜も夕飯を食ふとすぐ眠くなり、夜中に一回便所に行ったのみ。こんなによくねむれた事は入院して始めてだ。昨日の雪のためか外は非常な寒さだ。道路も氷結している。午後川島中尉の診断あり、身の健全になつた事を話すと、明後日退院してもよいとの事で大喜び。

早速二十日ぶりの入浴で、そのあかの出る事、一回では皆下す事不可能だ。風邪をひいては大変と、床に入つて雑誌読み。本日昼飯より普通の麦飯、やっと一人前になつた様で食つた様な気がする。一ヶ月前の今日は、懷慶で急な命令をもらつて清化鎮へ向つた日だ。今日は退院を許可された。松本へ行つたら何を食すかと、

そんな事も次から／＼と考へてならない。もう明後日まで長い事／＼。

十日

午後確實に許可となつたので院長及軍医に挨拶した。半月ぶりの軍服を身につけて身が引しまる。麦飯を食ふ様(に脱)なつて、腹が張つてく／＼なり便通なく心配だ。新町の伯母さん、伯父さんより見舞の便りをもらった。

十一日

いよ／＼退院の日だ。十時世話になつた病院よさらば。直に奉天に居られる寺沢先生宅に洋車を走らす。二ーが当地を知つて居てすぐ知れ、先生も在宅、二年振りでの面会に話はずきない。飯をこちそうになり、遊覧バスで奉天の名所を見物、夕方又先生宅にて御世話になり、十一時半の奉天発で、先生の御見送をつけて、二十分おくれた急行にて一路釜山へ。

十二日

車内は二等でもなか／＼混んで居り、大陸へ渡る地方人の多いのに一驚す。列車は遅れ勝て、安東駅へ二時間遅れ夜明けだ。七時半。満州国の紙幣を朝鮮銀行紙幣と交換、荷物検査は車中にて、軍服のためか何も僕のは検査なし。鴨緑江を渡つて朝鮮。支那、満州と異り、農家の貧弱の事に驚いた。列車は急行でも遅れるのみ、京城へ三時間と十五分遅れて着き、本夜の船は乗れないらしいので、自分は前からの予定もあり下車、日没となつた京城の街を眺め乍ら駅前(の)三重旅館に一泊。なか／＼寒い。入浴して寒気

がするので、快々の飯を食って、布団三枚もかけてもらひ床に就く。

十三日

燃料節約のためか、暖房は火鉢一個、寒い事なか／＼猛烈な寒さだ。九時過ぎ京城市街を見物、李王家の後、公園等を見物し、本日は二十分遅れて来た列車の人となる。昨日同じ腰掛の人と同じく席し、旅は道連で一人旅の淋しさから解消された。十時釜山着。紙幣は駅にて交換してもらひ、列車にて同席の人々に船中の席をとって置いてもらひ、好都合だった。十一時半ボウ／＼と出発の合図と共に、いよ／＼二年余の大陸と左様なら。夜の釜山の電灯も遠のいて行く。

十四日

船は相当ゆれて気持が悪ひが、横になつて玄界灘にかゝつた頃はねむつていつしか夜明。懐しい母国の山々、下関港に入つて居た其の感じ、たゞ何とも言得ない。第一步母国の土をふんで又感無量。丁度七時半だった。八時五〇分東京行の急行で一路東へ。午後六時五四分大阪着。下関で電報をうつておいたに伯母の姿も見ず、タクシーにて昭和町に向ひ、一時間もみつて漸く知れ、入つて見ると伯母が駅へ行つて留守、下車口が二つあるので間違へたらしい。話はずきない。八時半伯母も帰り、十二時頃まで話して床に就く。

十五日

連隊と家へ十六日着くの電報を打ち、一人で天王寺公園、動物園

を散歩。午後二時半伯父、伯母、忠重君と四人で大阪市街の散歩、岩田宗太郎さん宅に御よりして、出征前の御世話になつた挨拶をなし、四十分ばかりして御別れし、デパートに入つて心齋橋通りにて夕飯。八時一分発の急行で左様なら、名古屋へ十一時四十分着いた。駅前の旅館で一泊す。

十六日

八時二十八分発で中央線、急行はない。汽車の旅はあきたし、この山中へ入る列車にはつくづくいやになった。午後二時松本駅着。宮下少尉以下将校若干の出迎へをうけて、父も来て居り面会。連隊に向ひ、連隊長不在のため副官に挨拶、診断をしてもらつて、浅間亀ノ湯が万員のため、王の湯にて父と一泊す。宮坂中尉達は昨日除隊となり、まだ浅間に居り、本夜僕も丁度来たので、一緒に加藤軍曹達中隊の連中や野村軍イと林君と招待にあずかり、疲労して居るも思はず酒を多く飲んで十時帰る。父といろ／＼十二時半まで話して寝に就く。

十七日

背が痛む様で気分が悪く、旅のつかれか連隊へ行くもいやだが、連隊長に挨拶もすまないいで出掛ける。父は十一時の汽車で帰つた。挨拶もすんだので佐藤副官に話し、帰つて亀ノ湯に移り、床に入つて休む。木内中尉と同室。

十八日

連隊に出掛けて中隊長小池大尉及将校全員に挨拶終り、二、三日休暇をもらつて帰り、旅館にて休む。

十九日

二十日

湯にて休養。加藤軍曹も十九日遊びに来た。春日満  
寿雄中尉が来て一泊。

二十一日

二十二日

特志志願に来た郷里部隊へ挨拶状を出す。

二十三日

本日は祭日。午後加藤軍曹、橋詰軍曹遊びに来り、街に出掛けて「土と兵隊」の映画を電気館にて見て、旅館に帰り夕飯をすまして十時前に帰った。

二十四日

連隊に本日より出掛ける。別に用とてないので、医務室へ行ったりして午後早く帰る。

二十五日

帰り写真屋に行つて五時半頃帰館す。

二十六日

日曜日だ。午前十一時半突然差出の伯父が来て驚いた。普及社の用で来たのだとの事。昼飯をすまして、三時頃僕も送つて帰られた。加藤軍曹とも会つたが、本日は連隊に帰った。坂田大尉が近日中午に帰るとの事を聞いた。日は不明なり。雪がちら／＼舞つて寒い日だ。

二十七日

雪舞ひ本日も非常に寒い日なり。中隊の将校室でふるいている位だ。石炭節約でストーブはもやさないで閉口す。午後二時坂田大尉留守宅を尋ねて挨拶し帰る。寒い風に雪をまじへて非常に寒

い日だ。

二十八日

北風の寒い日だ。九時頃出掛ける。二、三日来の寒さで、本日より連隊でもストーブを燃す事となり、将校室も漸く暖くなった。相変らず仕事もなく、新聞をよんだり雑談だけ。十一時牧野三大隊長に挨拶してないので行ふ。坂田大尉殿の近日帰還で、小田部隊もいよ／＼来月凱旋との話が出て来た。酒保の岩下へ立寄り、マントの修理を早くする様依頼して帰る。

二十九日

昨日より暖だが風は以然強い。朝は小雨が風と共に吹きまくつて居たがまもなくやんだ。午後二時頃、明日遺骨受領のため故松坂安重君の母堂と共に、村長、青木軍治分会長、利光君と共に来松隊に面会に来られ、慰問金として金貳円を戴く。夜は同じ亀ノ湯に宿泊され、いろ／＼と話がつきず、利光君と一時半まで話して休む。

三十日

九時より五十一柱の英霊の慰霊祭を営庭に於て施行さる。先頃まで戦場で多くの部下を亡ひ、今原隊に於て此の慰霊祭を行ふにあたり、感<sup>入</sup>一<sup>(の脱)</sup>しを深いもがあつた。続いて明日の除隊兵の除隊式あり、補充隊将校の記念撮映あり、二時松坂君の英霊歸るに就て、中隊代表で駅に送る。新町の伯父来松中なので立寄るも不在だつた。

十二月一日

去る九月召集された七次補充兵千余の除隊と、二十二D要員の初年兵千余名の入隊の日で大変なさわぎだ。現役初年兵だけあって体格もよく、気合が異なる様に見して知れ、たのしく感じた。

三時頃新町の伯父が面会に来り、将校集会所に於て二年ぶりの面会、夜旅館に來られて夕飯をすまして九時頃歸られた。

二日

近く野戦小田部隊帰還となるらしく、留守師団長笠井中将訣別に来隊、九時半より其の挨拶をされた。初年兵に教練で當庭は大賑か。別に仕事もないので陸軍病院に午後、満州事変當時の傷のため入院中の小山一郎君及中隊の清水新、牛越上卜兵を見舞ふ。

三日

日曜日だ。十一時町へ出掛けて写真屋へ行き自動シャッターを購入、引伸しを依頼、アルバム其他いろいろと買物をして、橋詰班長と会ったので演技座にて活動見物、八時歸る。

四日

昼飯に明日召集解除なる将校の送別会あり。八中隊では重信中尉、新井中尉の二人だ。午後三時市内にて理髪、写真屋に行き、引伸しの完成したのを持って歸る。

五日

午前八時四〇分除隊両中尉の中隊での挨拶あり、万歳を三唱し前途を祝す。夜重信中尉遊びに来り、十時半まで話して歸った。

六日

連隊に出ても仕事もないので十時頃出掛ける。昼飯に内藤中尉及

一日入營の初年兵引率、近く戦地に向ふ真田部隊の将校の送別会あり。近頃朝夕の寒さ烈しいが、風なく日中は案外暖だ。いよく小田部隊近日帰還らしい。復員に關し師団長の訓示あり。

七日

小田部隊一部勇士帰還に就き午後駅に迎へに出掛ける。二時塩沢中尉以下百余名、伊芸中尉も歸る。三中隊の宮下、佐藤軍曹、小隊の嶋田、河西上卜兵も歸かん、懐しくて、又戦場で生死を共にした當時が思出されて仕方なかった。教育要員として帰還したもので、若い年次の兵、下士官のみだ。夜伊芸君達を千代の湯に尋れ、部隊の其後の状況を聞く。開封附近に居り、三中隊は又独立して開封数里南方に出ているとの事だ。

八日

午後になって風<sup>(マ)</sup>くなり、雨も幾分降ったりして寒い日となった。小池大尉に來週の週番をやってくれとの事で、日曜に弟が来る予定なので、月曜より腹務する事とする。

九日

午後二時半頃、弟東京より面会に来り、正に旅に歸り二年余ヶ月前、此の松本で別れて今思出の地で会ひ互いに無事を祝った。

十日

昨夜は話はずき十二時頃ねむり、本日去る一日入營せる真田部隊初年兵出發するを、十二時頃出掛けて見送り、午後三時二十分の汽車で歸った。小雨ふりとなって寒い日だ。

十一日



昼より週番士官を服務す。昨日塩沢中尉以下伊芸、内藤君等初年兵教育要員帰還、中隊の宮下、佐藤軍曹、小隊の嶋田、河西上卜兵なども帰還、其後の戦地部隊の情況を知り懐しいものがあつた。

十二日  
週番

十三日

十四日  
昼飯時自分も近日中に除隊となるらしいので、週番を塩沢中尉に依頼、帰る。

十五日

昼に将校の送別会をつけ、命令は出ないが近日に除隊と決す。夜中隊の将校小林中尉、川崎少尉をよんで、春日中尉の室で会飯をなす。

十六日

本日命令が出るらしいので、連隊長以下にそれ／＼挨拶をなす。午後二時自分以下十二名本日付を以つて除隊となり、いよ／＼隊とも御別れ。一昨年応召以来二年四ヶ月ぶり、いよ／＼と思出し<sup>(考力)</sup>て過去の事なぞ感へる時悲しさで一ぱいだ。四時帰る。

十七日

十一時頃村松正永君村より面会に来り、開封や其他作戦当時の事が思出して話はず、いよ／＼と村の話なぞも聞いて、夕飯をすまして七時五〇分の列車で帰った。

十八日

十二時頃宮下、佐藤軍曹話しに来り、昨日の日曜なく本日代日休

暇との事だ。三時頃帰った。本日大隊の宮下軍イ中尉以下部隊の先発隊帰還、亀ノ湯にて宮下君に面会、久方ぶりでお互の無事を喜んだ。懷慶で別れた大隊本部の小池曹長目下自宅療養中のところ、長野へ行く途中一泊しこれも珍しい会合だった。

十九日

午前連隊区司令部へ挨拶に行くと、司令官、副官は留守だった。職業補導部にて主任といふ／＼と話し、よき就職を依頼して帰る。父から返信あり、帰郷に就て小田部隊帰還後、村の出征諸君と共に帰れとの事であつた。

二十日

午後活動見物をなして久しぶりで気の保養をなす。

二十一日

何なす事とてないが、身を大切にしながら養生專一と旅館に真面目に居る。

二十二日

午前一寸司令部へ行つて見るも、補導部の係が居らず帰る。

二十三日

午前十時司令部へ行き、職業補導部の准尉の人に履歴書、診断書を提出、就職の件依頼して帰る。<sup>(長野市)</sup>信田の小林中尉王の湯より本日帰郷する。

二十四日

午後春日中尉と活動見物をなし、五時加藤軍曹と松本座の東京少女歌劇を見て、<sup>(マキ)</sup>十時旅に帰る。

二十五日

宮下、佐藤軍曹遊びに來り午後三時歸つた。いよく部隊も明日歸るらしいとの事で、宮坂中尉に電話をす。

二十六日

午後四時三十分、林、宮坂中尉等と駅に歸還の中隊、一中隊、二中隊を迎へる。懐しいかつての我部下は、中隊長の指揮の本に松本駅にすべり込んだ。輸送指揮官坂田大尉は官民多数の出迎へをうけて元氣な挨拶、堂々と暮の松本市内を行進、懐しの原隊に入つた。宮坂中尉と二人で、中隊にて中隊長を始め幹部兵諸君と面接、話しはつきず点呼まで話して宿に歸る。夜宮坂中尉僕の室に來り一泊す。

二十七日

光輝ある我等の軍旗歸るの日、宮坂、林、木内の諸君と迎へる。慈父の如き小田連隊長を始め海野隊長は、軍旗を先頭に懐しのホームに下車、R長挨拶の後、歡呼の嵐の中を原隊に迎ふ。夜西沢中尉は山崎大尉と共に一部歸還、十二時三十分駅に迎ふ。

二十八日

午前十一時三十分富沢中佐以下歸還、篠原中尉歸還につき迎ふ。夜篠原中尉北大湯より遊びに來り、十時三十分歸つた。本夜を以つて小田部隊全部の歸還終つた。連隊に遊びに行き、中隊で二、三時間話して歸る。

二十九日

午前十一時半吉岡軍曹、塚田上卜兵遊びに來り、一時三十分歸る。

三時半新町の伯父駅に着くので、依頼せる荷物を取りに行く。夜宮下、中山、内山各中尉と亀ノ湯にて宴会をなす。

三十日

護国神社、陸軍墓地に参拝をなす。不在中吉岡軍曹面會に來り、マラリヤで除隊延期を宮下軍医に話して、早く歸る様に願ふとの事を書いて行つたにより、四時半宮下軍イ歸りたるにより依頼しておく。

「付記」

今回も私は、坐らにして「陣中日記」を手にするという幸運に恵まれた。「日記」の閲覽を仲介してくださつた工学部教授山本富士夫氏、翻刻することをお許しになり、茂人について御教示いただいた青木志子さん、村上美代子さんの御姉妹に、心からお礼を申し上げる。またこのように大部なものを、一挙に印刷することに同意を与えられた、日本史研究室同僚の寛容にも感謝する。